中央市埋蔵文化財調査報告書　第１集

山梨県中央市

平田宮第２遺跡（２・３次調査）

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2008

中央市教育委員会
山梨県新環状・西関東道路建設事務所

山梨県中央市

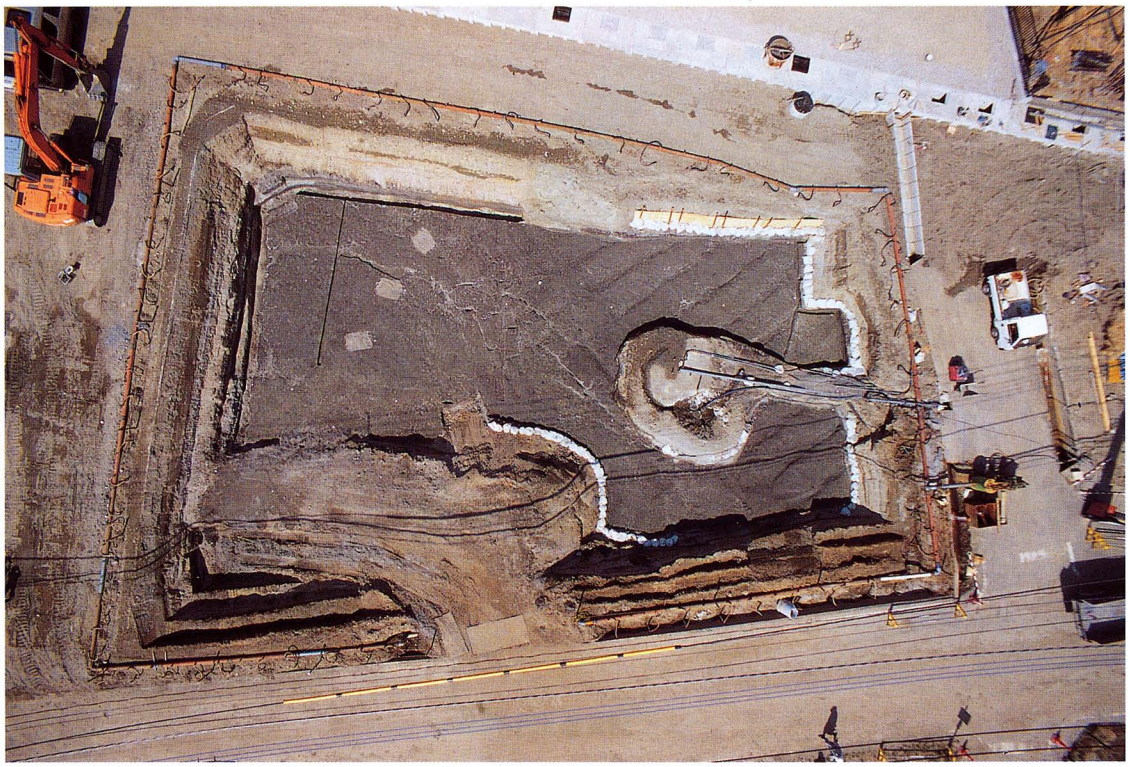
平田宮第２遺跡（２・３次調査）

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2008

中央市教育委員会
山梨県新環状・西関東道路建設事務所

平田宮第２遺跡遠景（南から撮影）



２次調査区畑跡

２次調査カマド構築材

２次調査出土木製品

3 次調査第 1 面水田跡

3 次調査第 2 ・ 3 面集落・畑跡

3 次調査 3 号住居跡カマド

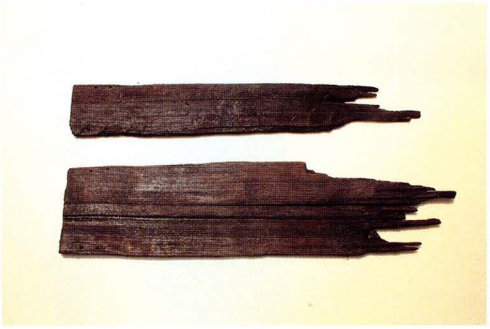
3 次調査 3 号住カマド構築材

3次調査4号住居跡カマド構築材

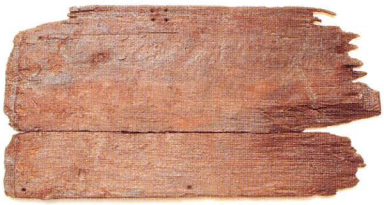
3次調査4号住居跡出土木製品

3次調査井戸跡

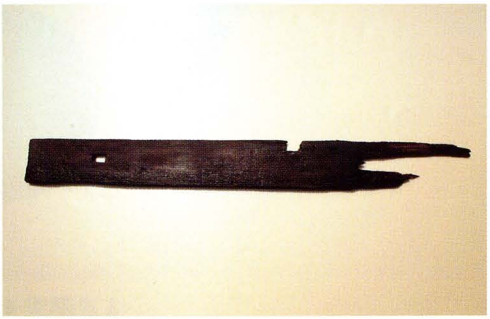
3次調査井戸材（1）



3次調査井戸材（2）



3次調査井戸材（3）



3次調査井戸材（4）

序

本書は、主要地方道韮崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事（新山梨環状道路）に伴う平田宮第２遺跡２次調査及び３次調査の発掘調査報告書です。

中央市は、縄文時代から生活痕跡の確認できる御坂山系の丘陵地帯からなる旧豊富村と、釜無川扇状地の南端部に位置し、長い間洪水常襲地ということから遺跡の空白地帯と考えられてきた旧田富町、玉穂町が合併し、平成18年２月に誕生しました。

近年、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査により、遺跡の空白地帯とされてきた地域でも、私たちの想像をはるかに超えた先人の足跡が発見されているところです。

平田宮第２遺跡もその一つで、１次調査では、厚い砂層の下から平安時代の集落や畑が発見され、本市で営まれた1,000年前の生活を生き生きと私たちに伝えてくれました。

本書は、さらに多くの情報を得ることができた２次調査及び３次調査の成果を報告するものです。

地中からの歴史の積み重ねは、本市のみならず同様な立地にある地域にとっても、新たな可能性を示す貴重な事例となるはずです。この成果が、多くの方々の調査研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、御指導御協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成20年３月31日
中央市教育委員会
教育長　比志　保

例言

1．本書は山梨県中央市下河東字平田宮地内に所在する平田宮第２遺跡２次調査及び３次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は、主要地方道韮崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事に伴い２次調査を玉穂町教育委員会（現中央市）、３次調査を中央市教育委員会が実施した。

3．調査期間は、２次調査が平成17年２月10日～平成17年３月29日、３次調査が平成18年３月１日～７月３日である。

4．本書は、今村直樹（中央市教育委員会）が執筆・編集を行った。

5．本書にかかる出土品・記録図面・写真等は、中央市教育委員会で保管している。

6．航空写真撮影及び写真測量は、（株）東京航業研究所に委託した。

7．発掘調査に係る国土座標測量・グリット設定は、（有）コスモ設計企画に委託した。

8．自然科学分析については（株）パリノ・サーヴェイに委託した。

9．出土木製品の一部実測は、（有）松風実測部門ツールアートに委託した。

10．出土木製品の一部保存処理は、帝京大学山梨文化財研究所に委託した。

11．発掘調査から報告書作成まで、次の諸氏にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。

（敬称略・五十音順）

網倉邦生、岡野秀典、後藤聡、小林広和、末木健、内藤和久、畑大介、平野修、渡辺拓美、渡辺康彦

凡例

1．遺跡全体におけるＸ・Ｙの数値は、国土標準平面直角座標Ⅷ系（旧座標）に基づく座標を示す。また、各挿図における方位はそれぞれ記したとおりである。

2．遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準平面直角座標に基づき、５ｍ×５ｍの方眼を基本としている。

3．本書における挿図の縮尺は以下の通りである。

［遺構］　遺跡の位置と範囲　１／25,000　　調査区位置図　１／2,000　　遺構全体図　１／200

遺物分布図　１／200、１／100、１／60　　遺構平面図・断面図　１／20、１／30、１／60

［遺物］　土師器・須恵器・灰釉陶器　１／３　　石製品　１／３　　木製品　１／３、１／５、１／10

住居跡出土木製品はスクリーントーンで示す。

4．遺物実測図中のスクリーントーンは次のとおりである。

［平面図］　内面黒色処理　　施釉　　被熱　　→　木製品穿孔

［断面図］　土師器　　須恵器　　灰釉陶器

5．土層断面図における数値表示は標高を示す。

6．本書に掲載した遺跡の位置と範囲図は、中央市管内図（１／25,000）を使用した。

目次

序

例言・凡例

目次

平田宮第２遺跡２次調査

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・1

第２節　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・1

第３節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　遺跡の地理的歴史的環境

第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・3

第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・3

第３章　層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第４章　発見された遺構と遺物

第１節　不明遺構及び遺物分布状況・・・・・5

第２節　畑跡・・・・・・・・・・・・・・・・7

平田宮第２遺跡３次調査

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・16

第２節　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・16

第３節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・17

第２章　層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　水田跡・・・・・・・・・・・・・・・18

第２節　住居跡・・・・・・・・・・・・・・・18

第３節　畑跡・水田跡・・・・・・・・・・・・21

第４節　井戸跡・・・・・・・・・・・・・・・21

自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59

まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

図版目次

（２次調査）
第１図　平田宮第２遺跡の位置と周辺の遺跡・・２
第２図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・２
第３図　調査区西壁土層断面図・・・・・・・・・４
第４図　第１面遺物分布状況・・・・・・・・・・６
第５図　第１面遺物分布拡大図・・・・・・・・・７
第６図　第１面土層断面図・・・・・・・・・・・８
第７図　第２面畑跡・・・・・・・・・・・・・・９
第８図　第２面畑跡杭列拡大図・・・・・・・・・10
第９図　第２面畑断面図・・・・・・・・・・・・11
第10図　２次調査出土遺物(1)・・・・・・・・・・12
第11図　２次調査出土遺物(2)・・・・・・・・・・13
第12図　２次調査出土遺物(3)・・・・・・・・・・14
（３次調査）
第13図　調査区北壁土層断面図・・・・・・・・・17
第14図　第１面水田跡・・・・・・・・・・・・・22
第15図　第２面遺構分布図・・・・・・・・・・・23
第16図　１・２号住居跡　・・・・・・・・・・・24
第17図　１号住居跡カマド土層断面図・・・・・24
第18図　１号住居跡遺物出土状況図・・・・・・25
第19図　１号住居跡カマド土層断面図・・・・・25
第20図　２号住居跡遺物出土状況図・・・・・・26
第21図　２号住居跡土層断面図・・・・・・・・26
第22図　３・４号住居跡・・・・・・・・・・・・27
第23図　３・４号住居跡土層断面図・・・　・・27
第24図　３号住居跡遺物出土状況図・・・・・・28
第25図　３号住居跡カマド土層断面図・・・・・28
第26図　４号住居跡遺物出土状況図・・・・・・29
第27図　４号住居跡カマド土層断面図・・・・・29
第28図　５号住居跡遺物出土状況図・・・・・・30
第29図　６号住居跡・・・・・・・・・・・・・・31
第30図　６号住居跡カマド土層断面図・・・・・31
第31図　６号住居跡遺物出土状況図・・・・・・32
第32図　７号住居跡土層断面図・・・・・・・・33
第33図　第３面畑跡・・・・・・・・・・・・・・34
第34図　第３面田畑境界拡大図・・・・・・・・35
第35図　井戸跡・・・・・・・・・・・・・・・・36
第36図　井戸跡土層断面図・・・・・・・・・・・36
第37図　１号住居跡出土遺物(1)・・・・・・・・37
第38図　１号住居跡出土遺物(2)、
　２号住居跡出土遺物(1)・・・・・・・38
第39図　２号住居跡出土遺物(2)、
　３号住居跡出土遺物(1)・・・・・・・39
第40図　３号住居跡出土遺物(2)・・・・・・・・40
第41図　４号住居跡出土遺物(1)・・・・・・・・41
第42図　４号住居跡出土遺物(2)・・・・・・・・42
第43図　５号住居跡出土遺物、
　６号住居跡出土遺物(1)・・・・・・・・43
第44図　６号住居跡出土遺物(2)、
　７号住居跡出土遺物・・・・・・・・・・44
第45図　２号土坑出土遺物、
　井戸跡出土遺物(1)・・・・・・・・・・・45
第46図　井戸跡出土遺物(2)・・・・・・・・・・46
第47図　井戸跡出土遺物(3)・・・・・・・・・・47
第48図　井戸跡出土遺物(4)・・・・・・・・・・48
第49図　井戸跡出土遺物(5)・・・・・・・・・・49
第50図　田畑境界杭、
　出土位置不明遺物(1)・・・・・・・・・・50
第51図　出土位置不明遺物(2)・・・・・・・・・51
第52図　出土位置不明遺物(3)・・・・・・・・・52
第53図　分析試料採取地点・・・・・・・・・・・59
第54図　花粉化石群集・・・・・・・・・・・・・60
第55図　植物珪酸体含量・・・・・・・・・・・・62
第56図　１～３次調査第１面水田跡合成図・・・74
第57図　１・３次調査第２面集落跡合成図・・・75
第58図　平田宮第２遺跡
　３次調査検出カマド構築材・・・・・・76
第59図　平田宮第２遺跡出土カマド構築材・・・77
第60図　平田宮第２遺跡出土斎串状木製品・・・79
第61図　山梨県内出土斎串状木製品・・・・・・79
第62図　平田宮第２遺跡３次調査出土杭状木製
　品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
第63図　１～３次調査第３面畑跡合成図・・・・81

表目次

第１表　２次調査出土遺物観察表・・・・・・・15
第２表　３次調査出土遺物観察表(1)・・・・・・53
第３表　３次調査出土遺物観察表(2)・・・・・・54
第４表　３次調査出土遺物観察表(3)・・・・・・55
第５表　３次調査出土遺物観察表(4)・・・・・・56
第６表　３次調査出土遺物観察表(5)・・・・・・57
第７表　３次調査出土遺物観察表(6)・・・・・・58
第８表　分析試料及び分析項目一覧・・・・・・59
第９表　花粉分析結果・・・・・・・・・・・・・61
第10表　植物珪酸体含量・・・・・・・・・・・・63
第11表　灰像分析結果・・・・・・・・・・・・・63
第12表　微細物分析結果・・・・・・・・・・・・65
第13表　樹種同定結果・・・・・・・・・・・・・69
第14表　遺構別・器種別種類構成・・・・・・・70

写真図版

写真図版１～２　２次調査遺構
・・・・・・・・・・・・84～85
写真図版３～４　２次調査遺物
・・・・・・・・・・・・86～87
写真図版５～23　３次調査遺構
・・・・・・・・・・・88～106
写真図版24～31　３次調査遺物
・・・・・・・・・・・107～114

平田宮第２遺跡２次調査

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

本報告の発掘調査は、主要地方道韮崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事に係わるものである。

主要地方道韮崎南アルプス中央線は、新山梨環状道路の南部区間に当たり、中央市内では、医大南部土地区画整理事業地内中央を東西に横断している。道路建設に先立つ埋蔵文化財調査により、これまで北河原遺跡、上窪遺跡、平田宮第２遺跡で近世から平安時代までの遺構・遺物が報告されている。

特に、上窪遺跡及び平田宮第２遺跡の調査成果は、これまで遺跡の空白地とされていた旧玉穂町にも実は地下深く遺跡は埋没していたということ、しかも古代にまで遡ることを明らかにし、盆地低地域への認識を大きく変えることになった。

そのような中、平田宮第２遺跡１次調査区に隣接する橋梁工事予定地内で平成17年１月に実施した試掘調査では、現地表下約240cmで炭化物の堆積と土器片や被熱した木片を確認した。また、さらに下層では、畑跡を確認したことから、工事主体者である新山梨環状・西関東道路建設事務所と玉穂町教育委員会（現中央市）で埋蔵文化財の取扱いを協議し、試掘調査により遺構の確認された範囲約900㎡の本調査を実施することとなった。

その後、新山梨環状・西関東道路建設事務所長と玉穂町教育委員会教育長は、主要地方道韮崎櫛形豊富線県道橋梁改築工事に伴う「平田宮第２遺跡」発掘調査に関する覚書（平成17年２月７日）を交換し、関係書類を山梨県教育委員会へ提出後、調査に着手した。

発掘調査は、平成17年２月21日から同３月29日までの約１ヶ月間にわたり実施し、整理作業及び調査報告書作成については、別途覚書を交換（平成19年５月１日）した後、平成19年６月18日から平成20年３月31日まで実施した。

（事務手続きの概略）

平成17年２月18日　文化財保護法第57条３第１項埋蔵文化財発掘調査の通知
平成17年２月21日　文化財保護法第58条２第１項埋蔵文化財発掘調査の報告
平成17年３月30日　埋蔵文化財の発見届け
　　発掘調査の終了報告

第２節　発掘調査の概要

平田宮第２遺跡における今回の調査対象範囲は、新山梨環状道路橋脚及び側道建設部分で面積は約900㎡である。

限られた調査期間であったため、調査区周辺にウェルを設置し、現地表下５ｍから24時間排水を行い調査環境を確保しつつ、重機により現地表下約240cmの暗灰色砂層まで掘下げた。暗灰色砂層は試掘調査時に炭化物が広がり、遺物も出土した層であったため、第１面として遺構確認作業、検出遺構の精査、記録写真撮影、図化を行った。

第１面の調査終了後、重機によりさらに約50cmを掘下げ、検出した畑跡を第２面として調査を実施した。精査終了後、航空写真撮影及び写真測量を行った。

最後に、下層の遺構の有無をトレンチを設定し確認した後埋め戻しを行った。

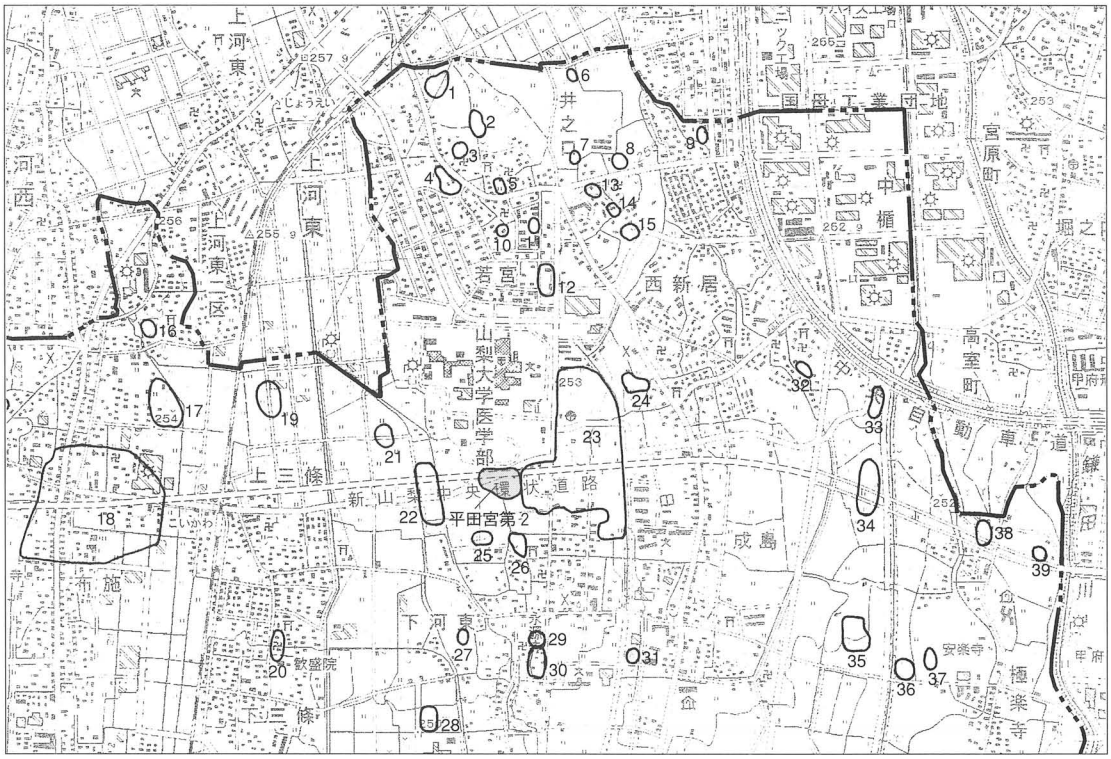
埋め戻し終了後、ウェルの撤去、現場事務所の撤収を行い調査を終了した。

第３節　調査組織

調査主体　　玉穂町教育委員会（現中央市教育委員会）

調査担当者　今村直樹（玉穂町教育委員会）
調査参加者　新谷和美　伊藤知子　河西圭子　田中初子　田中ふみ江　中込俊介　名取ゆずみ
成島喜久美　野呂瀬英臣　依田和美

第2章　遺跡の地理的歴史的環境

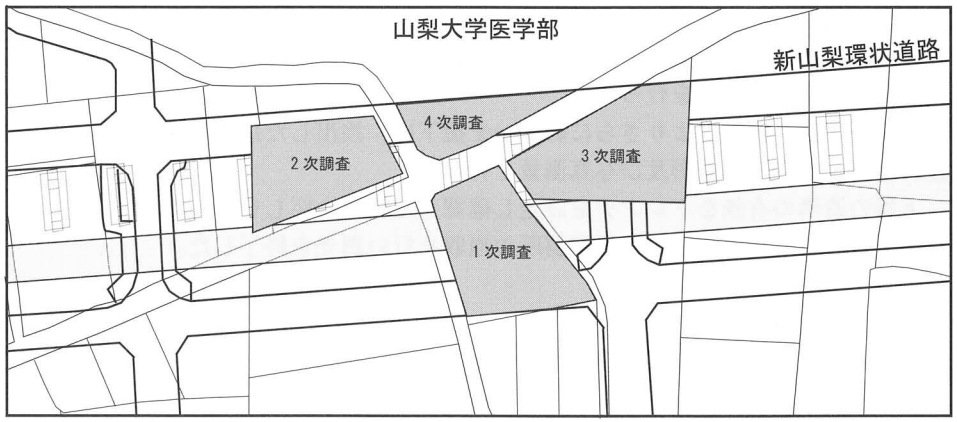


No.	遺跡名	種別	時期
1	中通第1遺跡	散布地	中世～近世
2	中通第2遺跡	散布地	中世～近世
3	中通第3遺跡	散布地	中世～近世
4	村西遺跡	散布地	中世～近世
5	中通第4遺跡	散布地	中世～近世
6	今川第1遺跡	散布地	近世
7	今川第2遺跡	散布地	中世
8	今川第3遺跡	散布地	平安
9	相之田遺跡	散布地	中世
10	中通第5遺跡	散布地	中世～近世
11	若宮第1遺跡	散布地	中世～近世
12	若宮第2遺跡	散布地	平安・中世
13	今川第4遺跡	散布地	中世～近世

No.	遺跡名	種別	時期
14	今川第5遺跡	散布地	近世
15	今川第6遺跡	散布地	中世～近世
16	布施村北遺跡	散布地	中世
17	神田遺跡	散布地	中世～近世
18	小井川遺跡	集落　城館跡	平安～近世
19	三宮司遺跡	散布地	弥生末、平安
20	竹之花遺跡	散布地	古墳
21	中新居遺跡	散布地	平安・中世
22	八反田遺跡	堰跡	近世～近代
23	上窪遺跡	散布地	平安～近世
24	川久保遺跡	散布地	近世
25	平田宮遺跡	散布地	中世
26	天神木遺跡	散布地	平安・中世～近世

No.	遺跡名	種別	時期
27	青六遺跡	散布地	中世～近世
28	西反甫第1遺跡	散布地	中世
29	扇田遺跡	散布地	中世～近世
30	下河東屋敷	城館跡	中世
31	向河原遺跡	散布地	中世
32	中楯遺跡	散布地	中世～近世
33	二又第1遺跡	散布地	平安・中世～近世
34	二又第2遺跡	散布地	平安・中世～近世
35	壱丁田遺跡	散布地	平安
36	下河原第1遺跡	散布地	中世～近世
37	下河原第2遺跡	散布地	中世～近世
38	北河原遺跡	寺院跡	中世～近世
39	神明遺跡	散布地	中世～近世

第1図　平田宮第2遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図　調査区位置図（S=1/2,000）

第１節　地理的環境

中央市は山梨県のほぼ中央に位置し、釜無川と笛吹川の氾濫原、釜無川扇状地扇端域（旧田富町・玉穂町）と、御坂山塊北斜面の山地、曽根丘陵台地が大部分を占める地域（旧豊富村）の２つの地域からなる。

前者の地域は釜無川ばかりでなく笛吹川や荒川などの河川氾濫の影響を受けた地域であり、地層の多くは河床堆積物に相当する沖積層の砂、砂礫、多少の粘土で構成されている。地表面の標高は245m～265mで南方に向けて若干の傾斜をもち、微高地である自然堤防と低地である氾濫盆状地、旧河道で構成されている。現在居住地となっている地域、特に土蔵をもつような古い屋敷地や寺社のほとんどが自然堤防上であり、水田が営まれている地域はほとんどが氾濫盆状地である。

後者は標高650m～950mに及ぶ急峻な山地と、それに連なる標高240m～380mのローム層で覆われた曽根丘陵、浅利川流域の平坦地、及び笛吹川流域の沖積地とに分かれる。遺跡の大部分は丘陵上に集中している。

平田宮第２遺跡２・３次調査地点は、市中央北、JR身延線小井川駅より東へ約１km、山梨大学医学部南に位置する。遺跡は山梨大学を中心に南北に伸びる微高地上（標高252m）にのり、東は上窪遺跡を挟んで今川（山伏川）に向かってゆっくり傾斜している。西へはほぼ平坦な地形が続くが、上三条地区から傾斜は西へ向かって上るようになり、山之神地区にいたっては標高が255mを越える。

第２節　歴史的環境

中央市の初現の遺跡として、横畑遺跡と弥二郎遺跡から旧石器時代のナイフ形石器が出土している。続く縄文時代の遺跡としては、駒平遺跡から中期初頭～後半の住居跡が９軒、横畑遺跡から中期後半の住居跡が検出され、高部宇山遺跡の後期中葉の土坑からは注口土器の完形品が出土している。

弥生時代では、横畑遺跡と弥二郎遺跡から後期の住居跡が３軒ずつ調査されている。古墳時代の遺跡としては、高部宇山平遺跡で前期の方形周溝墓や中期の住居跡が出土しており、また、宇山平の台地上には王塚古墳や伊勢塚古墳、三星院古墳が現存している。

特に王塚古墳は、主体部が朝鮮半島に起源が求められる合掌形石室をもち、武器・武具の副葬品を埋納していたことが昭和５年の地元の人々の掘削でわかっている。この地は先述の古墳時代前期の方形周溝墓が確認されていることからも、古墳時代前期から中期にかけての政治的中心地であったのかもしれない。

奈良・平安時代になると、それまで遺物の散布が確認されたのみであった笛吹川右岸にも集落の存在が確認され始める。

上窪遺跡（１・２次調査）ではトレンチ調査により古代水田跡の存在が確認され、生産域が広がっていることが明らかとなった。平田宮第２遺跡（１次調査）では４軒の住居跡が調査され、住居内から斎串状の木製品や機織機部材が出土した。また、集落面の下層には洪水砂に埋もれた畑跡が検出されている。

平田宮第２遺跡の位置する下河東の具体的な古代の記録は残っていないが、歓盛院（下三条）には平安時代半ば頃制作の木造薬師如来坐像が、永源寺（下河東）には平安時代後半頃制作の木造聖観音菩薩立像が所蔵されており、古代的要素を有している。

西へ1.3km離れた小井川、布施では、『中右記』元永２年（1119）の記載に布施荘の名が初見され、『安楽寺院等庄園録案』には、安元２年（1176）に小井川荘が現れる。また、八幡穂見神社の再建棟札（文安６年）には、仁安元年（1166）に造立と記されていたことが『甲斐国志』にみえ、鈴鹿神社の再建棟札にも、仁安２年（1167）造立とみえる。

また、市河郷の中心が市北東部に求められる説（ラインハルト・シェルナー『甲府市史研究』第８号）、『法勝院領目録』安和２年（969）にみえる市川荘内の「甦田」に市西部の大豆生田えを比定する説（『田富町誌』第４章　大豆生田考）もあり、市河荘（郷）の存在も通説ではないが近年主張され始めている。

このように古記録の上では古代史が語られることはあったものの遺構、遺物のほとんどなかった本

市低地域にも古代の資料が蓄積されているところである。

笛吹川左岸は、『和名抄』によると八代郡沼尾郷に属するとされるが、横畑遺跡で10世紀後半以降の住居跡が3軒確認されているのみで、現在まで、沼尾郷に比定される遺跡は見つかっていない。ただし、大福寺（大鳥居）には、木造薬師如来坐像をはじめ計5躯の平安仏像が、延命寺には平安時代後期の作とされる地蔵菩薩立像が安置されるなど古代的要素は多く残されている。

特に大福寺には周辺堂宇から集められたと思われる破損仏群（11～12世紀）もあり、甲斐国古代仏教の中心地の一つであったと考えられている。

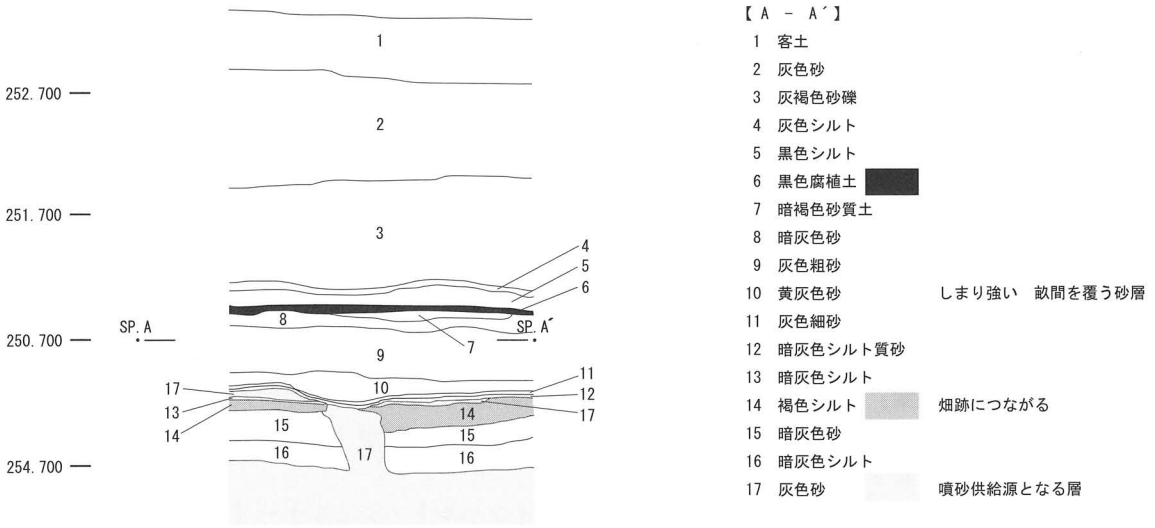
古代末期になると、沼尾郷の大部分が重なるとされる浅利郷が甲斐源氏の一族浅利与一義成の支配することとなる。浅利郷の所在については建久2年（1191）の長講堂領目録にある青島荘の中に位置すると考えられており、青島荘は義成により立荘され、寄進された可能性もある。また、三星院門前の小丘は、戦国時代の武田家家臣三枝土佐守虎吉の館跡といわれる。

同じく戦国時代館跡としては永源寺が加藤梵元の屋敷跡と伝えられる。その梵元の活躍した15世紀は上窪遺跡でも方形に溝で区画された施設が現れ、溝の中からは漆器や土師質土器、すり鉢が出土し、道路状遺構なども検出されるなど、活発な活動の痕跡が残されている。

大きくわければ古記録豊富な笛吹川左岸、記録に乏しい右岸となるが、近年の埋蔵文化財調査により、これまで見えなかった歴史が発掘されてきている。今回の平田宮第2遺跡もその見えなかった部分の歴史であり、今後の中央市の古代イメージを構築するうえで非常に貴重な資料といえる。

引用・参考文献
玉穂町教育委員会『町内遺跡詳細分布調査報告書』1995
田富町教育委員会『町内遺跡詳細分布調査報告書』2002
玉穂町『玉穂町誌』1997
豊富村『豊富村誌』2000

第3章　層位



第3図　調査区西壁土層断面図（S=1／60）

平田宮第２遺跡２次調査地点の層位は、１次調査地点と対応する部分が多い。

第１層客土の下は、厚さ30～40cmの灰色砂（第２層）、厚さ約40cmの灰褐色砂礫（第３層）が続く。第４～５層はシルトであり、第６層の黒色腐植土層上に堆積する。１次調査地点では第６層に相当するレベルで水田跡が検出されているが本調査範囲で水田畦畔は確認されていない。

第７層の暗褐色砂質シルト、第８層の暗灰色砂は、遺物の出土が集中し、第１面として精査を行った面である。第10層は黄灰砂でしまりが強く、畑畝間を埋める砂と考えられる。第11・12層は畑上を薄く覆うシル質砂層であり、畑土に対応する第14層の上に堆積する。第17層が今回確認した最下層で噴砂の供給源にもなっている。噴砂は第14層畑面上に広がっており畑と同時期に地震が起きたことを示している。

第４章　発見された遺構と遺物

第１節　不明遺構及び遺物分布状況（第４図～第６図）

現地表下約240cmで炭化物が面的に広がり、カマドの可能性がある不明遺構が２ヶ所確認された。いずれの不明遺構もカマドあるいはカマドに近い部分である可能性は高いものの、住居プラン自体は把握することができなかったため、炭化物やシルトの広がる範囲を図示する。

炭化物・シルトの広がりの他には、土坑状の落ち込みを確認した以外、遺構は確認できなかった。ただし、遺構は確認できないものの小破片の土器が多く出土したため、その出土位置をドットで図示した。出土遺物の中には、33点の木製遺物が含まれており、製品とはならない木片も多いが杭状に地面に打ち込まれるものが不明遺構に集中する傾向がある。形態・出土状況から３次調査で出土したカマド構築材と酷似するため同遺物として報告する。

なお、遺物の分布が極端に調査区東端に偏っているのは、集落の西端が調査対象となったためと思われる。

１号不明遺構

［形状］　炭化物の広がる範囲は、長方形を呈する。［規模］　250×170cm。［検出状況］　炭化物の広がる長方形の範囲内に、杭状の木製品が地面に打ち込まれた状態で出土した。打ち込まれた木製品は13～20の８点でカマド構築材と考える。［遺物出土状況］　カマド構築材は、13～16の一群と、17～20の一群に分かれる。地面に刺さってはいるものの先端を杭のように鋭利に尖らせるのは、17の１点のみである。他のものは先端を加工してはいるが概して平坦である。ただし、15を含んだ断面図では、カマド構築材は打ち込まれたのではなく、掘り方をもっていることがわかる。他のカマド構築材の断面は記録していないが全てが打ち込まれたものと断定することはできない。なお、炭化物の広がる範囲とそれ以外とで遺物出土量の差はほとんどない。［時期］　10世紀前半。

２号不明遺構

［形状］　炭化物の広がる範囲は、長方形を呈する。［規模］　短辺約120cm。［検出状況］　長方形の範囲内では、木製品の出土はあるが、１号不明遺構で出土したカマド構築材は確認できない。［遺物出土状況］　木製品の他に土器の出土もあるが小破片のみである。［時期］　10世紀前半。

１号土坑

［形状］　長楕円形。［規模］　長辺200cm以上×短辺50cm、深さ26cm。［検出状況］　覆土は、黒褐色砂質シルトを主体とし、上層では炭化物が多く含まれていた。下層は、黒色砂質シルトをブロック状に含んでおり、人為的埋め戻しの可能性もある。遺物も若干含んでいた。［時期］　10世紀前半か。

第4図　第1面遺物分布状況

第２節　畑跡（第７図～第９図）

畑跡は現地表下約300cmから検出された。畑跡は第３図調査区西壁面土層堆積状況第９・10層により埋没していた。砂層に覆われる検出状況は１次調査の畑跡と同様である。

畝の幅は畝間の中心間隔で110cm～125cm、畝の高さは13cm～18cmであった。

畝は、N－32°～46°－Eに軸をもつ一群と、N－15°～26°－Eに軸をもつ一群の二群にわけることができる。これらは、N－58°－Wにのびる幅約100cmの通路状の空間によって隔てられている。

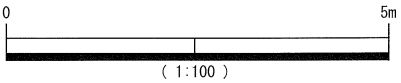
この通路状の空間の南側には、多量の杭が打ち込まれ、畝は杭から長さ約240cm程で終結している。この極端に短い畝は、地震の影響により上下方向、水平方向にずれ、そのずれが起きた部分には噴砂が確認できた。噴砂は一部畑土上で広がっており、畑の存続期間中に起きたものと考えられる。

杭は、畝の終結する側に強く傾いた状態で打ち込まれたものと、それに接するように垂直に打たれたものの組み合わせが多く確認された。樹種については33・34がクヌギ、35・36がコナラとなっている。根をはった状態の自然木（37）も検出されている。１次調査でも自然木は検出されており、同じような間隔で畑畝の収束部分に境界として植栽がされていたことが予想される。

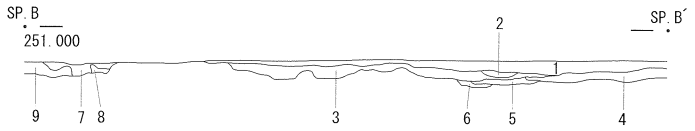
畝の終結は、１次調査区から続くもので畑地の西端を調査したことになった。

畑土中からの遺物の出土はほとんどなかった。

畑の時期としては、１次調査区からの延長ということで10世紀前半と考える。

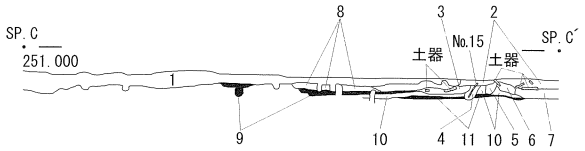


第5図　第1面遺物分布拡大図



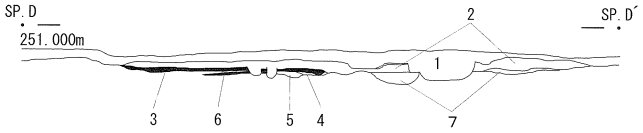
【B － B´】

1　灰褐色砂質シルト　炭化物　少
2　暗褐色砂質シルト
3　暗褐色砂質シルト　炭化物　少、灰色砂　小
4　黒褐色砂質シルト　炭化物　少、遺物含む
5　炭化物層
6　暗灰褐色砂
7　黒褐色砂質シルト　炭化物　少
8　暗灰色砂
9　灰褐色砂



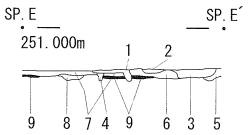
【C － C´】

1　黒褐色砂質シルト
2　暗灰色シルト質砂
3　暗灰褐色シルト質砂
4　暗灰褐色砂質シルト　斎串状木製品の掘り方
5　暗灰褐色砂質シルト　4層と同様の性格か
6　黒褐色砂質シルト　炭化物・灰色砂・暗褐色シルトブロックの混合
7　暗灰褐色砂質シルト　炭化物　少
8　暗灰色砂　灰褐色シルト含む
9　炭化物層
10　灰色砂
11　炭化物層



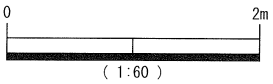
【D － D´】

1　黒褐色砂質シルト　炭化物　少
2　灰褐色砂質シルト　炭化物　少
3　炭化物層
4　灰褐色シルト
5　黒褐色シルト質砂
6　炭化物層
7　灰褐色砂



【E － E´】

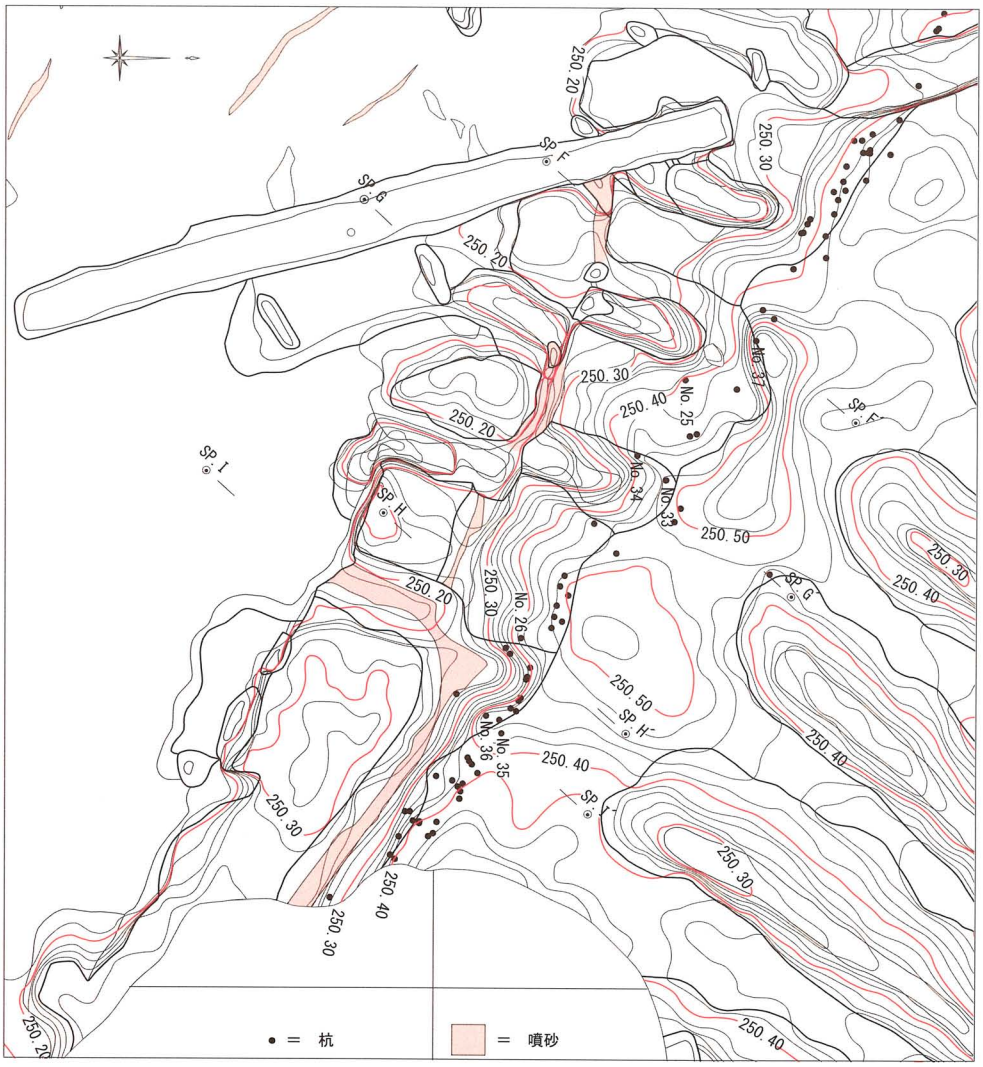
1　黒褐色砂質シルト
2　黒褐色砂質シルト
3　暗灰褐色シルト
4　黒褐色砂質シルト
5　黒灰色砂
6　暗灰褐色シルト
7　黒褐色砂質シルト
8　黒灰色砂　炭化物　小
9　炭化物層

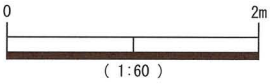


第6図　第1面土層断面図

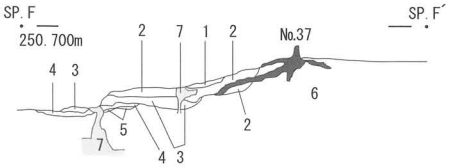
X=44072
X=44062
X=44052
X=44047
Y=3748
Y=3758
Y=3768
Y=3778
Y=3773
SP.A
SP.A´
● = 杭
= 噴砂
0
10m
(1:200)

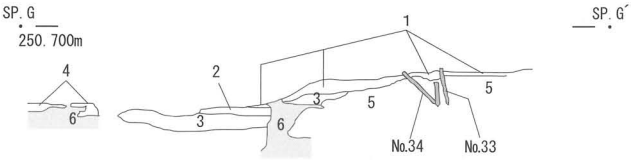
第7図　第2面畑跡





第8図　第2面畑跡杭列拡大図





【 F － F´ 】

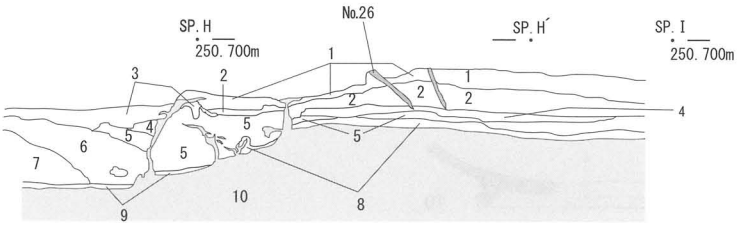
1　暗灰色砂
2　灰褐色砂　　灰色シルトブロック多量、植物遺体含む
3　暗灰色砂
4　暗灰色砂
5　灰色シルト
6　灰色砂
7　灰色砂　　噴砂

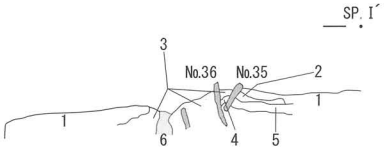
畑

【 G － G´ 】

1　灰褐色砂　　灰色シルトブロック、植物遺体含む
2　灰色シルト
3　暗灰色砂
4　暗灰色シルト
5　暗灰色砂
6　灰色砂　　噴砂

畑





【 H － H´ 】

1　灰褐色砂
2　暗灰色砂
3　褐色シルト
4　暗灰色シルト
5　暗灰色砂
7　灰色砂
8　暗灰色シルト
9　暗褐色シルト質砂
10　灰色砂礫　　噴砂及び噴砂供給源

畑

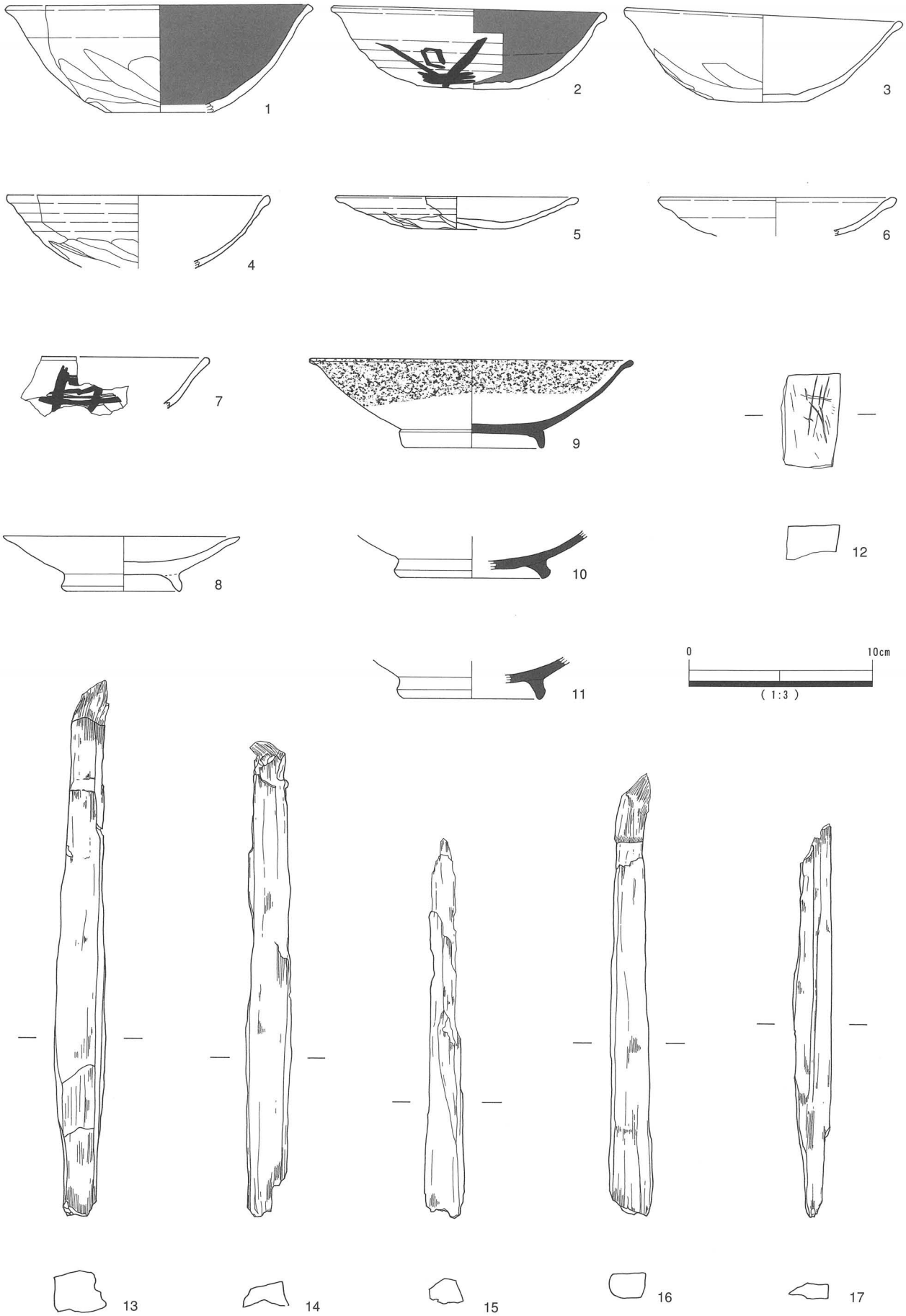
【 I － I´ 】

1　灰褐色砂
2　暗褐色砂
3　灰色砂
4　灰色シルト
5　灰色砂・灰色シルト混合
6　灰色砂　　噴砂

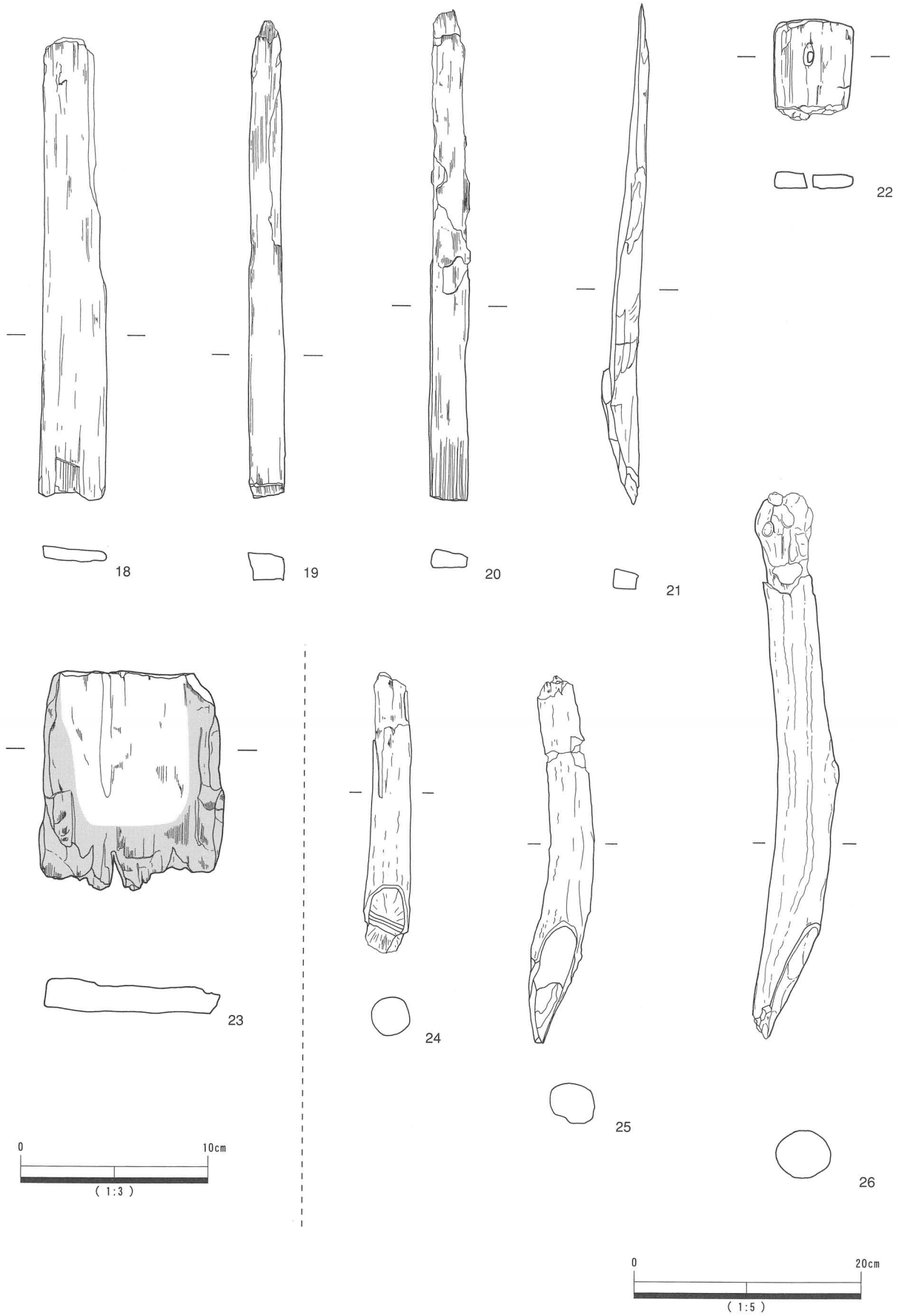
畑

0　2m
（1:60）

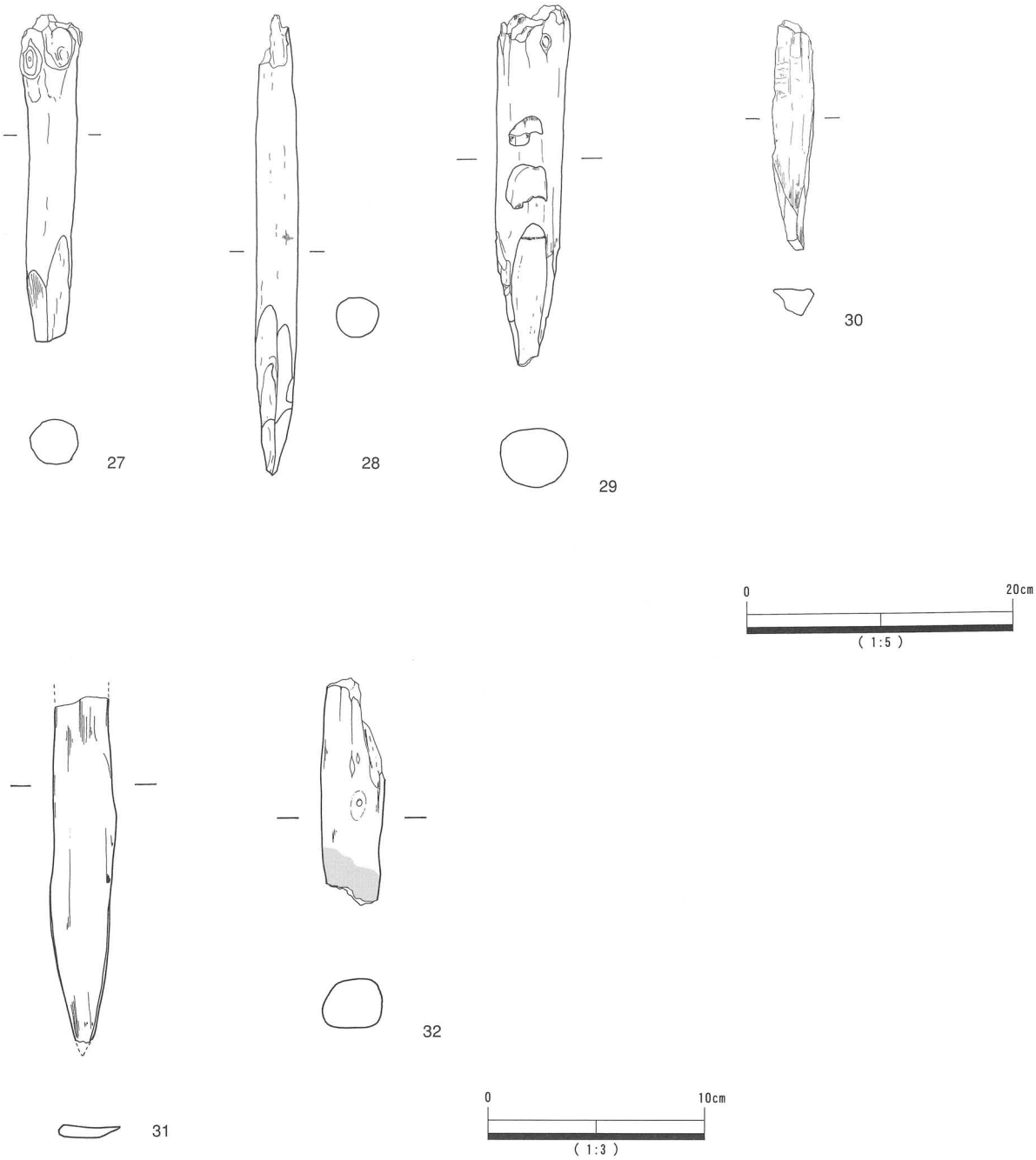
第9図　第2面畑断面図



第10図　２次調査出土遺物（１）



第11図　２次調査出土遺物（２）



第12図　２次調査出土遺物（３）

第１表　平田宮第２遺跡２次調査出土遺物観察表

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
10	1	土師器 坏	暗橙色	白・赤色粒	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(16.1)	(5.8)	5.9	20%	326+224+表土	内面黒色処理
10	2	土師器 坏	橙褐色	赤・白粒	ロクロなで	ロクロなで 立ち上りケズリ	ヘラ削り	(14.5)	(5.5)	4.3	40%	254, 327	墨書＝「春」、内面黒色処理
10	3	土師器 坏	橙色	赤・白粒、角閃石	ロクロなで 立ち上りヘラ削り	ロクロなで	糸切り後 ヘラ削り	14.6	5.4	5.0	70%	表採	
10	4	土師器 坏	暗橙色	白・赤色粒、石英	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(14.0)			口縁部破片	246	体外なで顕著
10	5	土師器 皿	灰褐色	白色粒、角閃石	ロクロなで 底部周辺ケズリ	ロクロなで	糸切り	(12.8)	(5.0)	1.8	10%	35	
10	6	土師器 皿	橙色	白・赤粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで		(12.3)			口縁部破片	163, 167	
10	7	土師器 坏	赤橙色	赤・白色粒、角閃石	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで					口縁部破片	209, 223	墨書＝「日」？
10	8	土師器 高台付皿	外 暗褐色 内 黒色	白粒、角閃石	ロクロなで		糸切り後 高台なでつけ	(12.7)	6.1	3.0	50%	181	
10	9	灰釉陶器 高台付坏	灰褐色	白粒多	ロクロなで 釉薬つけ掛け	ロクロなで 釉薬つけ掛け	糸切り後なで 高台貼り付け	(17.3)	7.4	4.9	30%	216、323、257、211？、表土	
10	10	灰釉陶器 高台付坏	暗灰色	白色粗、長石	ロクロ				(7.6)		底部破片	272	
10	11	灰釉陶器 高台付坏	暗灰色	白色粒、角内石	ロクロ 高台は輪積み				(7.4)		底部破片	125	
10	12	砥石										270	表面に擦痕あり

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
10	13	カマド構築材	29.2	2.8	2.2	先端を削り細くする。鋭利にはならずに平らに整形。末端やや下は圧力がかかったかのようにわずかに窪む。	39
10	14	カマド構築材	26.0	2.5	1.4		38
10	15	カマド構築材	20.7	2.2	1.4	末端が最も細く先端に向かい徐々に幅が広がる。	37
10	16	カマド構築材	24.2	2.4	1.4	15と同様な形態で末端やや下は圧力がかかったかのようにわずかに窪む。	34
10	17	カマド構築材	21.4	2.0	0.8	先端は両側縁を削り鋭くなる。	129
11	18	カマド構築材	24.5	3.4	0.7	板状で先端は平ら。	130
11	19	カマド構築材	25.3	1.9	1.9	先端は平らで切込みが入る。末端は徐々に薄くなり丸みを帯びて収束する。	85
11	20	カマド構築材	26.0	2.0	1.0	先端は平ら。	84
11	21	斎串状木製品	26.6			両端が鋭利に削りだされる。	287
11	22	不明木製品	(4.0)	4.5	0.9	穿孔×1。	281
11	23	不明木製品	11.7	9.6	1.8	1辺を除き縁を被熱。	291
11	24	杭	(24.9)			φ＝3.4cm。先端1面削り。	325
11	25	杭	(32.5)			φ＝4×3.6cm。先端4面削り。	367
11	26	杭	(48.7)			φ＝4.9cm。先端2面削り。	364
12	27	杭	(24.5)			φ＝3.4cm。先端5面削り。	314-1
12	28	杭	(34.6)			φ＝3.0cm。先端5面削り。	314-3
12	29	杭	(27.2)			φ＝4.5cm。先端4面削り。表面に刃物で削られたような痕跡あり。	314-5
12	30	杭	(17.5)			φ＝3.2cm。先端5面削り。	314-4
12	31	不明木製品	(15.6)	2.7	0.6	先端は両側縁を削り鋭くなる。	1土杭
12	32	不明木製品	(10.2)			φ＝2.2cm。被熱。	1土杭

平田宮第２遺跡３次調査

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

本報告の発掘調査は、主要地方道韮崎南アルプス中央線県道橋梁改築工事に係わるものである。

平成17年に実施された平田宮第２遺跡２次調査は、平安時代の集落・畑、平安時代後半から鎌倉時代の水田跡西端を明らかにした。このことにより、平田宮第２遺跡の東への広がりが注目されたが、東側ではすでに上窪遺跡の調査を終え、新山梨環状道路の建設が急ピッチで進められていた。

そのような中、平成17年５月から新山梨環状道路の計画地である山梨大学敷地内南端で実施された県埋蔵文化財センターによる発掘調査では、平安時代後半から鎌倉時代の水田跡、平安時代の祭祀跡、井戸跡、畑跡が検出され、平田宮第２遺跡の広がりが確実なものとなった。

平成17年12月に実施された玉穂町教育委員会（現中央市）による試掘調査では、水田畦畔及び畑畝、土師器片等の平安時代の遺物が出土し、遺跡が広範囲に広がることが予測された。試掘調査の結果を基に、山梨県新環状・西関東道路建設事務所と玉穂町教育委員会で協議をし、工事着手されていない約1,200㎡を対象に発掘調査を実施する結論に至った。

その後、新山梨環状・西関東道路建設事務所長と玉穂町教育委員会教育長は、主要地方道韮崎櫛形豊富線県道橋梁改築工事に伴う「平田宮第２遺跡」発掘調査に関する覚書（平成18年２月10日）を交換し、関係書類を山梨県教育委員会へ提出後、調査に着手した。

発掘調査は、平成18年３月１日から同７月３日までの約４ヶ月間にわたり実施し、整理作業及び調査報告書作成については、別途覚書を交換（平成19年５月１日）した後、平成19年６月18日から平成20年３月31日まで実施した。

（事務手続きの概略）

平成17年12月15日	文化財保護法第94条第１項埋蔵文化財発掘調査の通知
平成18年３月10日	文化財保護法第99条第１項埋蔵文化財発掘調査の報告
平成18年７月４日	埋蔵文化財の発見届け
	発掘調査の終了報告

第２節　発掘調査の概要

平田宮第２遺跡３次調査対象範囲は、新山梨環状道路建設予定地で対象面積は、約1,200㎡である。

重機により深さ約200cmの排水溝を調査区周囲に設定し、排水を行いつつ調査区内の掘削を進め、現地表下約170cmで水田跡を検出した。水田面は洪水砂に覆われていたため、最終的には人力により砂を除去し、水田跡の写真撮影、図化作業を行った。

水田跡調査終了後、約30cmを掘下げ、遺構確認作業を実施したところ合計７軒の住居跡を検出した。各住居跡ごとに精査を行ったが調査期間の関係もあり、精査の終了していない住居跡３軒を残し、他の部分を重機により約30cm掘下げ、畑跡の調査に移った。

畝は水田跡同様洪水砂に覆われていたため、人力により畝間の砂を除去し、写真撮影・平面図作成を行った。畑面への掘下げ中に井戸跡が確認され、同時に精査を進めた。なお、井戸材の残りのいいものは取り上げ、後日保存処理を行っている。

最後に、下層調査のため、調査区中央にトレンチを設定し断面観察を行い、遺構のないことを確認して調査を終了した。

調査終了後ただちに工事の着工が予定されていたため、調査区の埋め戻しは実施していない。

７月３日までに現場事務所、道具等を完全に撤収し調査を終了した。

第3節　調査組織

調査主体　　中央市教育委員会

調査担当者　今村直樹（中央市教育委員会）

調査参加者　新谷和美　新谷博明　河西圭子　田中初子　佐藤あけみ　真道みゆき　野呂瀬英臣　依田和美

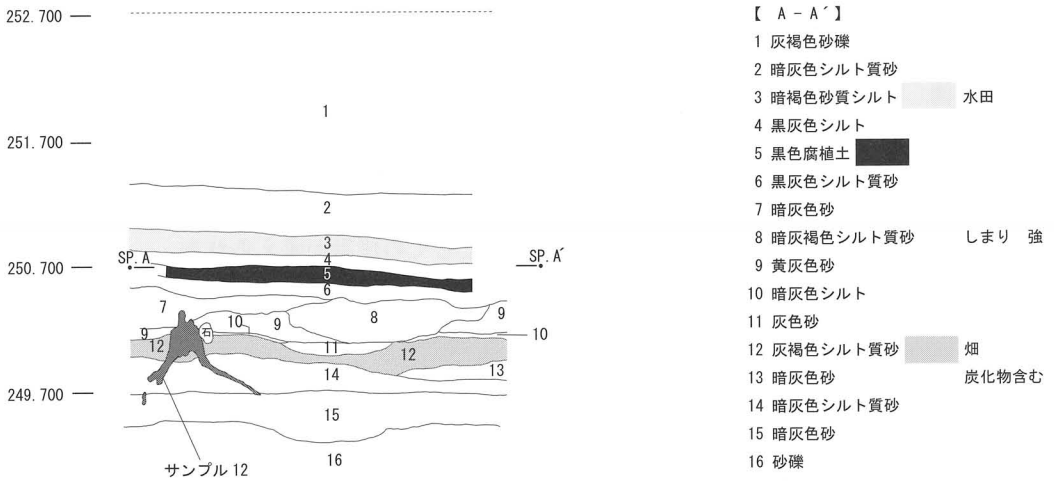
第2章　層位

平田宮第2遺跡3次調査地点の層位は、基本的には1・2次調査地点と対応する部分が多い。

第1層灰褐色砂礫の上層は、掘削前に調査環境を整えるため除去していたため、図化はできなかった。第1層は2次調査区基本土層の第3層に対応する。第2層は、水田跡を覆う砂層で、第3層暗褐色砂質シルトが水田跡である。西に隣接する平田宮第2遺跡1次調査地点で検出された水田面もほぼ同様な標高（250.900m）であった。第4層黒灰色シルトを挟み、第5層黒色腐植土が堆積する。第6層の黒灰色シルト質砂は、住居跡確認面である。

第7～9層は砂層で畑面を覆っている。第10層は第7～9層と畑跡第12層の間に堆積するシルト層である。第13層は暗灰色砂で、1次調査畑跡下層の灰色砂と対応する。

第14層暗灰色シルト質砂は1次調査では確認していない。第15層の暗灰色砂を挟み第16層が砂礫層で今回確認した最下層である。噴砂の供給源となっており、第12層上に噴出している部分も確認できる。畑と同時期におきた地震によるものであり、畝間に堆積する第11層も噴砂に関係する砂の可能性がある。



第13図　調査区北壁土層断面図　S＝1／60

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　水田跡（第14図）

水田跡は、現地表下約170cmで検出された。水田面は、暗灰色シルト質砂で覆われており、周辺調査で確認されている水田跡の出土状況と同様である。

検出された畦畔は、幅42～70cm、高さ14～16cmである。調査区北東隅で不確定な部分もあるが８枚の水田区画を確認した。４辺を確認できたものはないが、南北に長い形態を呈していることは、１次調査成果とあわせることで明らかにできる。

長軸の真北からの振れは、Ｎ－５°－Ｅ～Ｎ－15°－Ｅであり、若干東に振れる畦畔配置となっていた。周辺の畦畔のあり方もあわせた様子は、まとめの項で報告する。

水田面は西へ向かって若干上り、南北はほぼ水平である。

第２節　住居跡（第15図）

住居跡を７軒確認した。１号（古）と２号（新）住居跡、３号（新）と４号（古）住居跡が重複し、５号住居跡は、カマドのみの検出であった。６号住居跡は平面プランをはっきりと確認できたが、７号住居跡は調査区北壁面で断面のみの調査となった。

住居の配置は調査区西半に偏っており、東半は遺物の出土量も極端に減り、遺構の存在は確認できなかった。住居跡出土の土師器坏は、10世紀前半に属するものである。

１次調査区の平安集落の続きである。

１号住居跡（第16図～第19図）

［　形　　状　］　長方形。
［　規　　模　］　長軸425cm×短軸336cm。
［　主　　軸　］　Ｅ－２°－Ｓ。
［　床　　面　］　明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。
［　　壁　　］　壁高約10cm。壁立ち上がりが明確に検出できたのは北壁の一部と東壁。
［　周　　溝　］　なし。
［　カ　マ　ド　］　東壁中央やや南より。灰白色の砂質シルトでソデを構築している。右ソデには、カマド構築材が内側３本、外側１本の計４本打ち込まれていた。粘土を明確に貼り付けたカマドではなく、形状の把握は困難であった。カマド内炭化物層には多量のイネ珪酸体が含まれており、燃焼材としての使用が考えられる。
［遺物出土状況］　遺物はカマド周辺及び住居南側に多かった。木製品も土器と同様な位置から出土している。カマド構築材以外に住居中央付近に２本あるいは３本の塊で杭状木製品が打ち込まれていた。
［時　　期］　10世紀前半。

２号住居跡（第20図～第21図）

［　形　　状　］　長方形か。
［　規　　模　］　短軸321cm。
［　主　　軸　］　Ｅ－24°－Ｓ。
［　床　　面　］　明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。
［　　壁　　］　東壁で約５cmの壁立ち上がりを確認。
［　周　　溝　］　カマド向かって左側壁沿いに周溝。

［ カ マ ド ］ 1号住居跡と重複しているためか、明確なプランは確認できなかった。ソデがわずかに残った状態で、おそらく住居南東隅寄りに位置していると思われる。カマド内には、炭化物が堆積していた。

［遺物出土状況］ 土器はカマド右側に集中していた。木製品の出土もカマド周辺に限定されている。

［ 時　　期 ］ 10世紀前半。

3号住居跡（第22図～第25図）

［ 形　　状 ］ 正方形。

［ 規　　模 ］ 長軸340cm×短軸295cm。

［ 主　　軸 ］ N－21°－E。

［ 床　　面 ］ 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。

［　　壁　　］ 四方の壁の立ち上がりを確認した。掘り込みは10cm前後。

［ 周　　溝 ］ カマド左の120cmを除きほぼ一周する。

［ カ マ ド ］ 北面北東隅。灰白色シルトによりソデを構築している。左右のソデにはカマド構築材が打ち込まれる。左ソデに2本、右ソデに3本。いずれも「ハ」状にカマド内側に傾いていた。構築材の下端は下層の畑跡まで達しており、しっかり固定されている。カマド右ソデには、構築材と直行するように棒状の木製品が横たわっていた。打ち込まれた構築材と組み合わさり、カマドの基礎を構成する材の可能性がある。

［遺物出土状況］ カマド周辺を中心に、住居跡東半分に分布する。木製品の出土も豊富であった。№11の木製品は、長さ9.9cmと短いが、地面に突き刺さった状態で検出されている。

［ 時　　期 ］ 10世紀前半。

4号住居跡（第26図～第27図）

［ 形　　状 ］ 長方形。

［ 規　　模 ］ 長軸358cm×短軸308cm。

［ 主　　軸 ］ N－12°－E。

［ 床　　面 ］ 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。

［　　壁　　］ 3号住居跡に切られていた西壁を除き良好な状態で確認できた。掘り込みは、16～20cm。

［ 周　　溝 ］ なし。

［ カ マ ド ］ 住居跡北面北東隅に位置する。カマド構築材が左ソデに3本、右ソデに2本打ち込まれているが、断面図作成位置を構築材に係わらない部分に設定してしまったため詳細な状況を記録できなかった。

［遺物出土状況］ カマド周辺に集中する。№5は、生焼け状態の須恵質土師器鉢。伏せた状態でつぶれて出土した。木製品の出土も豊富で、№11は大きな木片で片面を被熱し、№21は曲物蓋である。№12・13は杭状木製品。

［ 時　　期 ］ 10世紀前半。

5号住居跡（第28図）

［ 形　　状 ］ 不明。

［ 規　　模 ］ 不明。

［ 主　　軸 ］ 杭状に打ち込まれた木製品をカマド構築材と考えるならば、東西方向に主軸をも

つと思われる。

［ 床　　面 ］ 不明。

［　　壁　　］ 不明。

［ 周　　溝 ］ 不明。

［ カ マ ド ］ 杭状に打ち込まれた木製品をカマド構築材、シルトの分布と炭化物の広がりをカマドと考え、住居跡を想定する。杭状木製品は、２本と３本のまとまりをもって出土した。他住居跡で検出されているカマド構築材と同様の出土状況である。

［遺物出土状況］ 遺物は、カマドの周囲に少量出土している。№１は、墨書土器で「日」の異体字が書かれる。№５は、板状の木製品で端部近くに穿孔され、１号住居跡№18、２次調査№22と類似する。

［ 時　　期 ］ 10世紀前半。

６号住居跡（第29図～第31図）

［ 形　　状 ］ 正方形。住居南東隅が若干内側へ小さくなり、凹凸をもった形状となっている。

［ 規　　模 ］ 長軸346cm×短軸344cm。

［ 主　　軸 ］ Ｅ－19°－Ｓ。

［ 床　　面 ］ 明確に床面と呼べる面は確認できなかったため、カマド炭化物層の広がる面、遺物の出土する面を基準に若干しまりの強い砂層を床面と想定した。

［　　壁　　］ 四方で明確に確認できた。掘り込み20～25cm。

［ 周　　溝 ］ なし。

［ カ マ ド ］ 東壁中央やや南より。カマドソデは確認できなかった。カマド構築材も確認できていない。炭化物は、厚く堆積している。

［遺物出土状況］ 遺物は、カマド周辺から出土している。№６は、刻書土器で「弥？」が刻まれている。カマド南東隅には、№13の板状木製品（棚？）が床面上に横たわった状態で出土。杭状木製品がカマド前面に２本離れた状態で、北東隅には１本打ち込まれていた。

№14は、本住居跡の柱材で、底面は平に削られ、掘り方をもち直立した状態で出土した。埋設状況は、柱径よりひとまわり大きい掘り方の中に柱が据えられ、灰色砂を埋土としていた。版築のような行為は行われていない。この柱材の断面の様子は、写真図版19を参照。

［ 時　　期 ］ 10世紀前半。

７号住居跡（第32図）

［ 形　　状 ］ 不明。

［ 規　　模 ］ 不明。調査区北壁で断面のみ確認。

［ 主　　軸 ］ 不明。東方向を向いていると思われる。

［ 床　　面 ］ カマド炭化物層のレベルと思われる。

［　　壁　　］ 不明確だが20cm程だろうか。

［ 周　　溝 ］ 不明。

［ カ マ ド ］ 断面でのみ確認。炭化物が堆積し、焼土主体の層も確認できる。

［遺物出土状況］ 断面を検出した周辺で少量の遺物を採取したため７号住居跡出土遺物とした。調査区周辺に設定した排水溝掘削により大部分の遺物は失われたと思われる。

［ 時　　期 ］ 10世紀前半。

第３節　畑跡・水田跡（第33図～第34図）

畑跡は、現地表下約250cmから検出され、黄灰色砂により埋没していた。第11層灰色砂が畝間を埋め、畑面上を第10層暗灰色シルトが薄く覆っていた。

畝の幅は、畝間の中心間隔で120cm～150cm、畝の高さは、10cm～16cmであった。

畝は、ほぼ南北にのびながら若干蛇行している。一部地震の影響により形が崩れている部分がある。

調査区北東隅では畑から水田へ土地利用形態が変化しており境界の畦畔には、杭がランダムに打たれていた。杭列には、立ち木が１本含まれており樹種同定の結果は、ヤナギ属であった。１・２次調査でも杭列中には、立ち木が含まれることが確認されている。

この杭列はＮ－48°－Ｗ方向にのびており、１・２次調査の杭列とほぼ平行している。この杭列より東が水田となっているが、畑との標高差はほとんどない。

第４節　井戸跡（第35図～第36図）

畑跡調査のために掘下げを行ったところ、６号住居跡南東３ｍの地点から井戸跡を検出した。当初、第２面の住居跡に対応する井戸と考え調査を進めたが、土層堆積状況の観察から住居以前の井戸跡の可能性が高いとの結論に至った。

土層堆積状況は、畑土（20層）が井戸の中に入り込んではいないが、畑面上に堆積する第９層灰色シルトは、井戸枠の中にまで入っている。また、その上に堆積している第７・８層も井戸枠の中に入り込み、畑面レベルで堆積している。畑が第７～９層に覆われた際には井戸も畑と同レベルまで埋没していたことになり、井戸枠材は畑面から30cmほど突き出ていた状況が推測される。

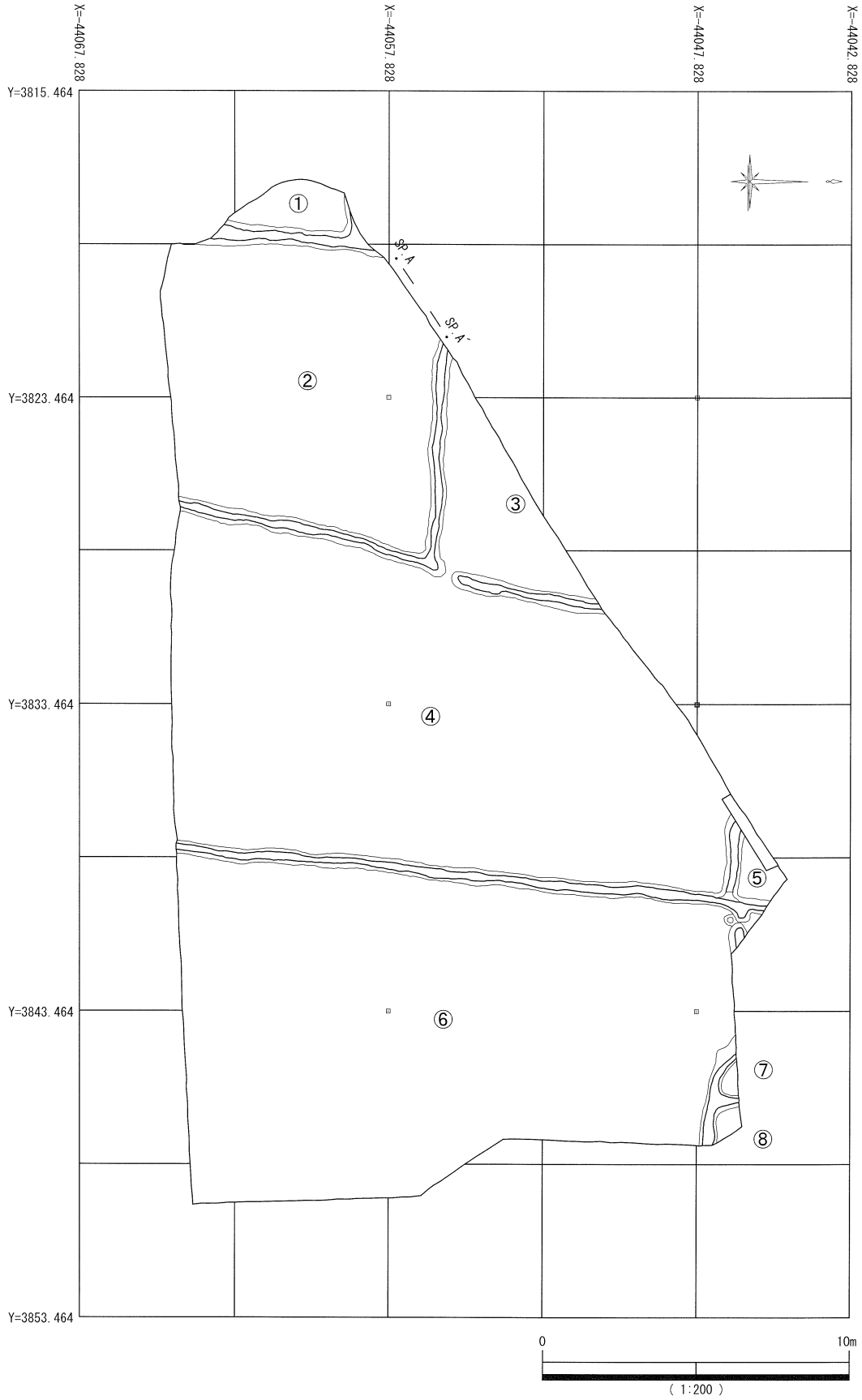
畑面レベル以下の井戸内堆積状況は、単純な層位であり、自然埋没というよりは人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。埋土と思われる12～14層には、遺物が含まれており、特に13層からは、完形の土器が小破片の土器と共に出土している。

平面的には、一辺約65cmの正方形、深さは約60cmである。四隅に基準となる棒状の木材を置き、ホゾ穴を開けて横木を渡している（第35図網掛け部分）。これらの外側に幅10～20cm、厚さ１～2.5cmの長方形の板材が下端を砂礫層（29層）まで達するよう打ち込まれ、固定されていた。上端は、腐食が進んでおり当時の形状はわからない。

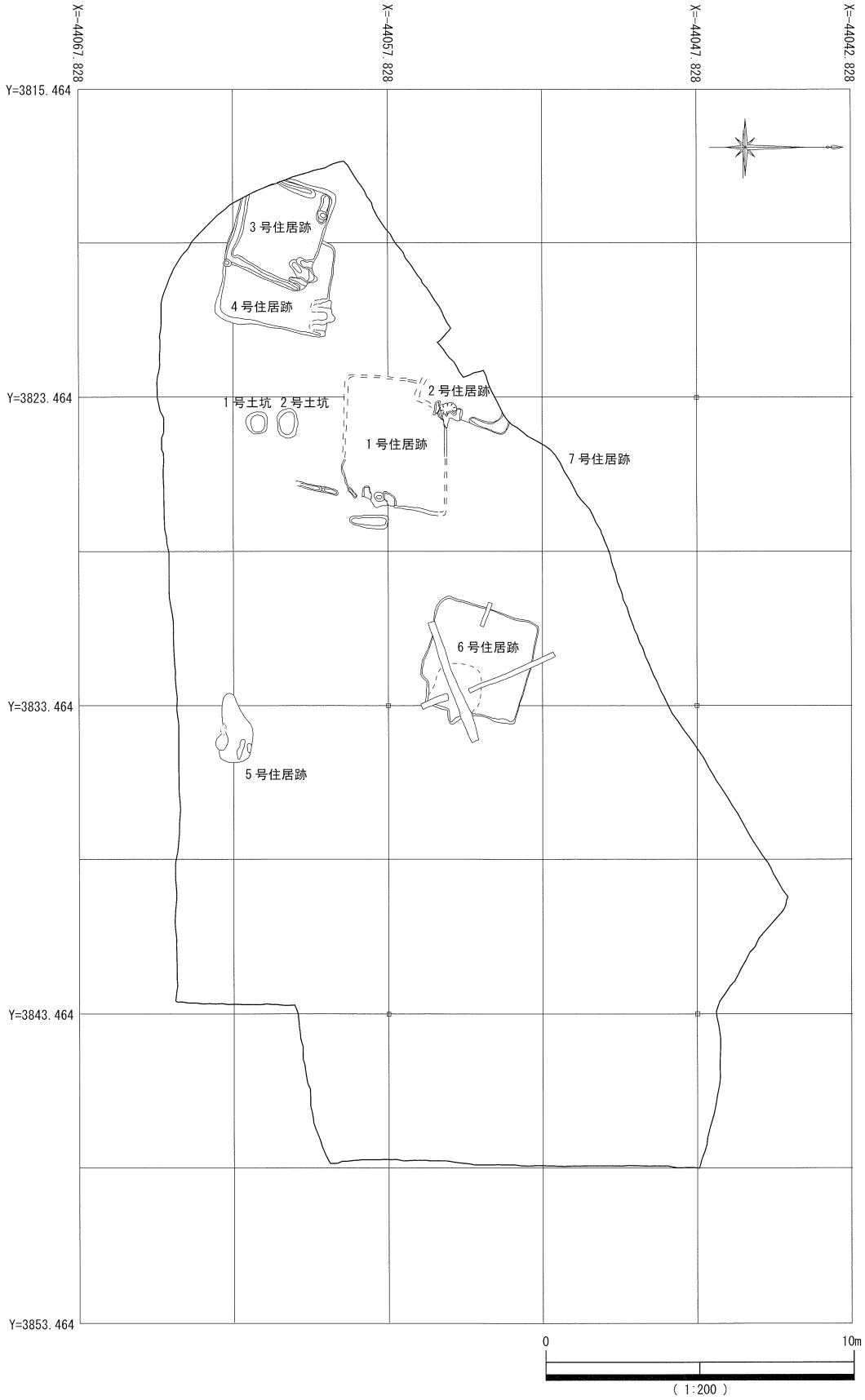
また、本井戸跡は、北西方向から南東方向に力が働き、形態が歪んでしまっている。井戸南側に木材が散っていることもその力が働いたことを示しているのかもしれない。散っている木材は、畑面直上にのっており、畑が使われていた時期に井戸材が散ったことを示すことになる。畑耕作時に地震があり、畑畝に大きな傷跡が残されていることは１次調査でも報告されており、本調査検出の畑跡も一部畝が崩れ、その位置から１次調査地震痕跡と一連のものと推測される。井戸跡が位置するのは、その地震痕跡の延長上である。

井戸掘り方は、おそらく16～18層が相当するものと思われる。17・18層の上層に畑土がのっているのは、本来の掘り方を畑耕作により掘り返してしまったためであろう。

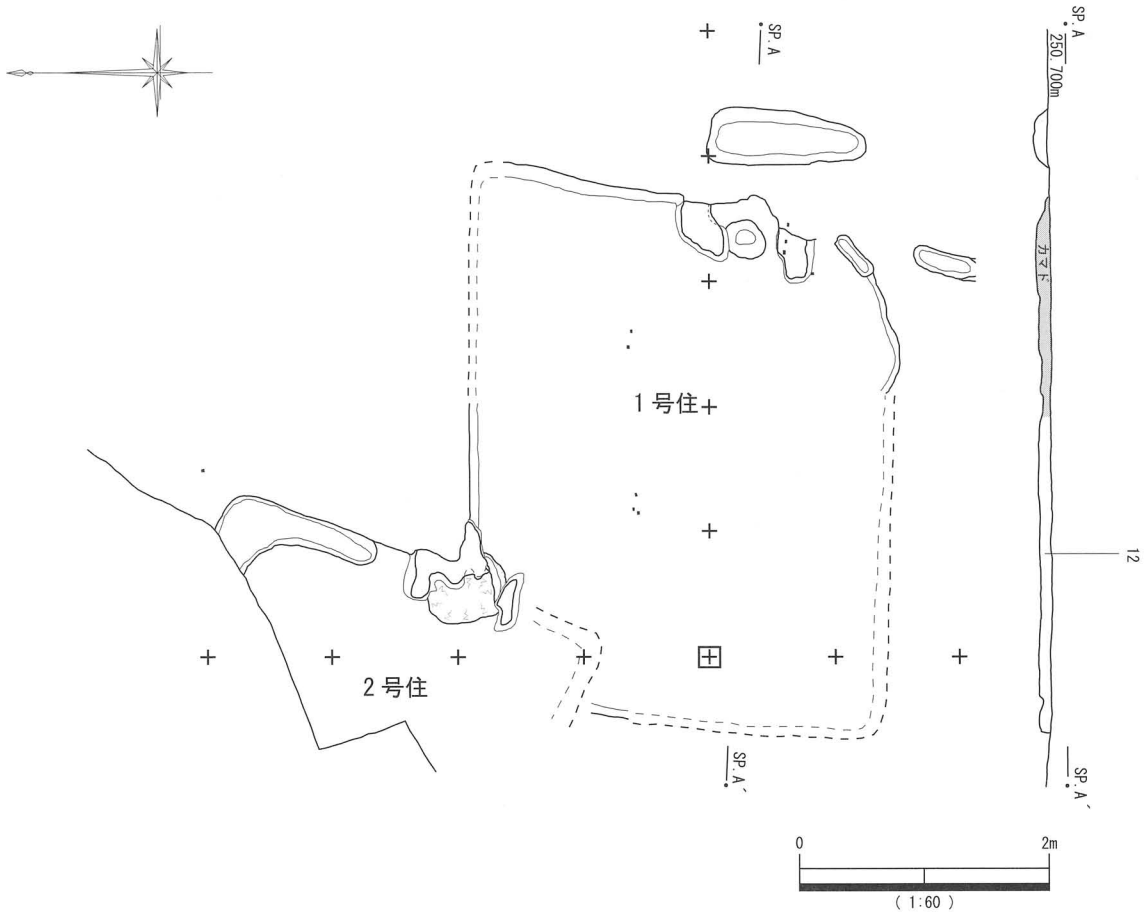
井戸内出土の遺物は、土器・木製品が少量であった。井戸枠材には、様々な木製品が転用されていた。


X=-44067.828
X=-44057.828
X=-44047.828
X=-44042.828
Y=3815.464
Y=3823.464
Y=3833.464
Y=3843.464
Y=3853.464
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
SP.A
SP.A'
0
10m
（1:200）

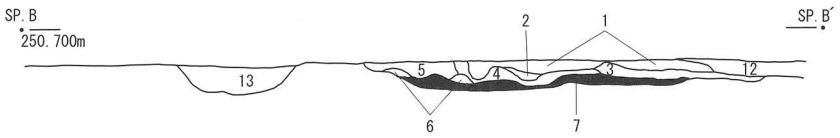
第14図　第1面水田跡



第15図　第2面遺構分布図



第16図　1・2号住居跡

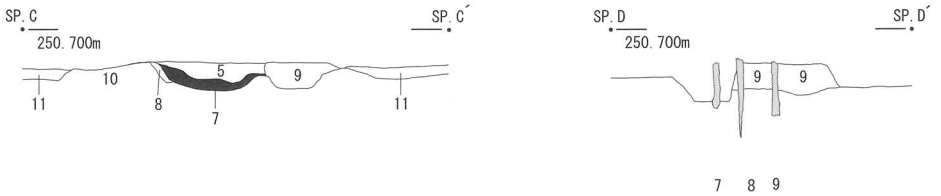


第17図　1号住居跡カマド土層断面図　（S=1／30）

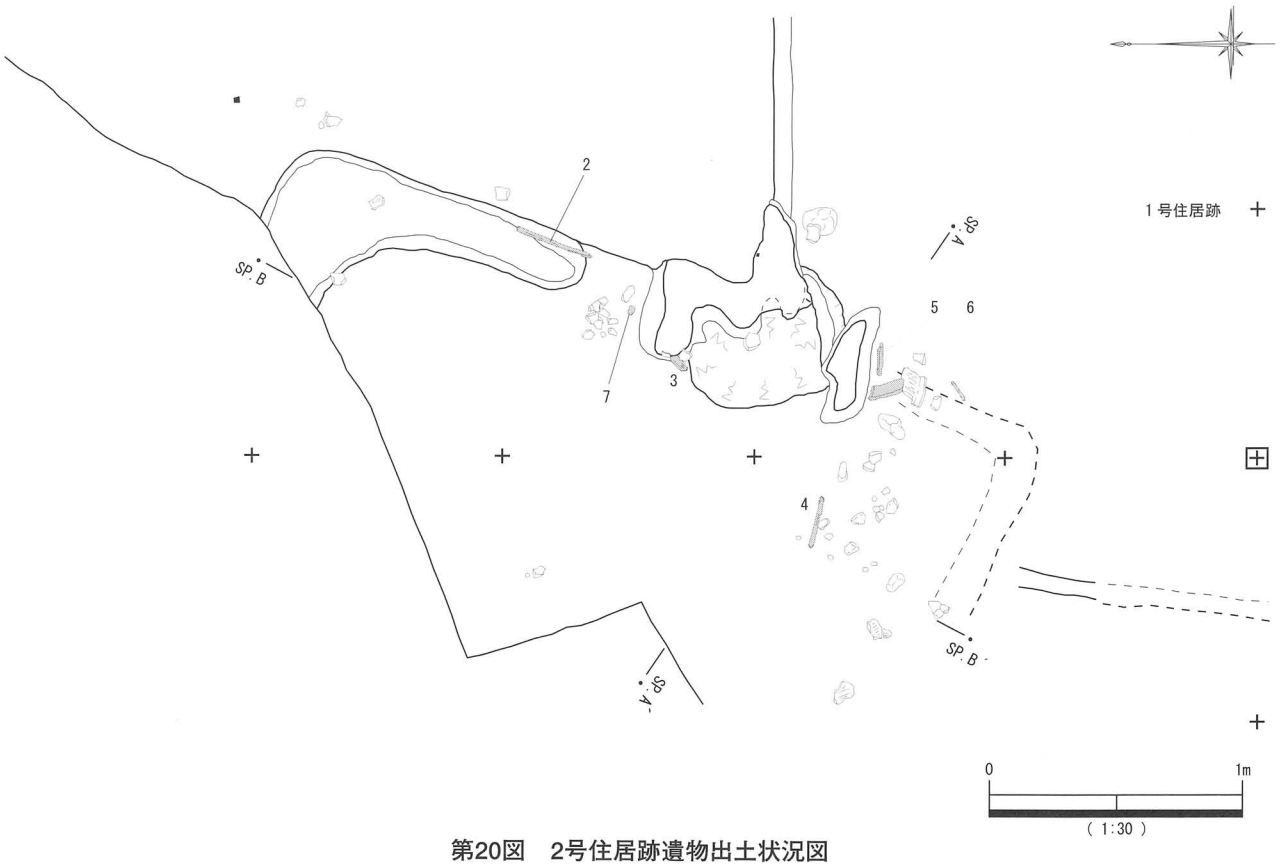
【1号住居跡土層説明】

1	暗灰色砂	炭化物粒、焼土粒	8	黒灰色砂	炭化物粒
2	灰褐色シルト	焼土粒	9	灰白色シルト	カマド袖
3	暗灰色砂		10	黒灰色砂	カマド袖？
4	灰白色シルト	（カマド崩落土）	11	暗灰色砂	炭化物粒
5	暗灰色砂	炭化物粒、焼土粒	12	黒灰色砂	炭化物粒、灰白色砂ブロック
6	黒灰色シルト	灰白色粘土ブロック、炭化物粒、焼土粒	13	黒灰色砂	
7	炭化物層	カマド灰層			

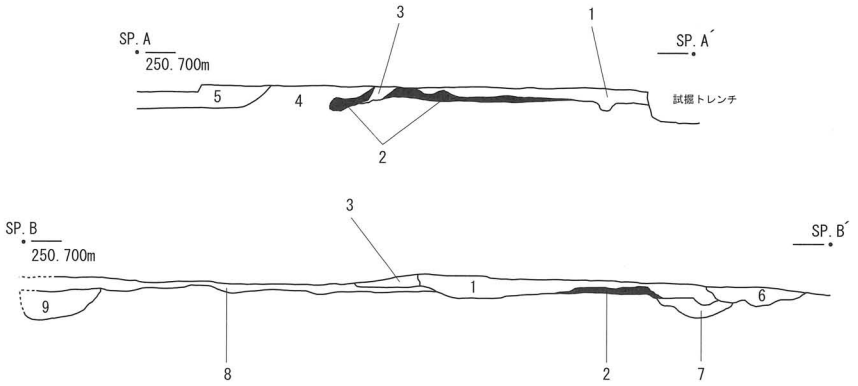
第18図　1号住居跡遺物出土状況図



第19図　1号住居跡カマド土層断面図　（S=1／30）



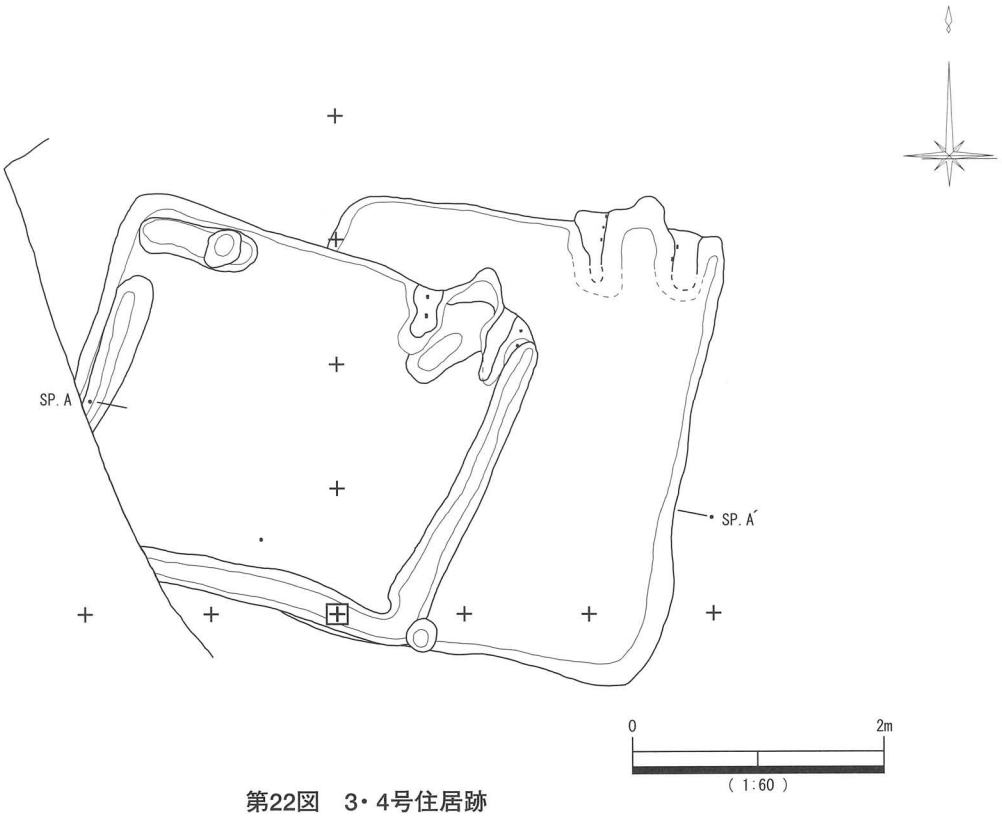
第20図　2号住居跡遺物出土状況図



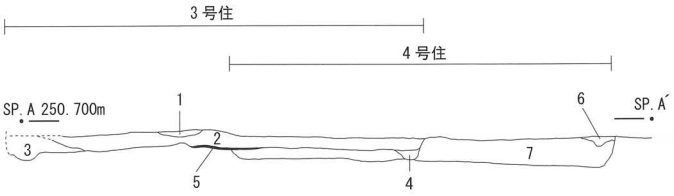
第21図　2号住居跡土層断面図　（S=1／30）

【2号住居跡土層説明】

1 黒灰色砂	炭化物粒		7 灰褐色砂	
2 炭化物層			8 黒灰色砂	
3 灰白色粘土	カマド崩落土？		9 黒灰色砂	炭化物粒
4 暗灰色砂	炭化物粒、灰白色粘土粒（カマド袖？）			
5 暗灰色砂				



第22図　3・4号住居跡



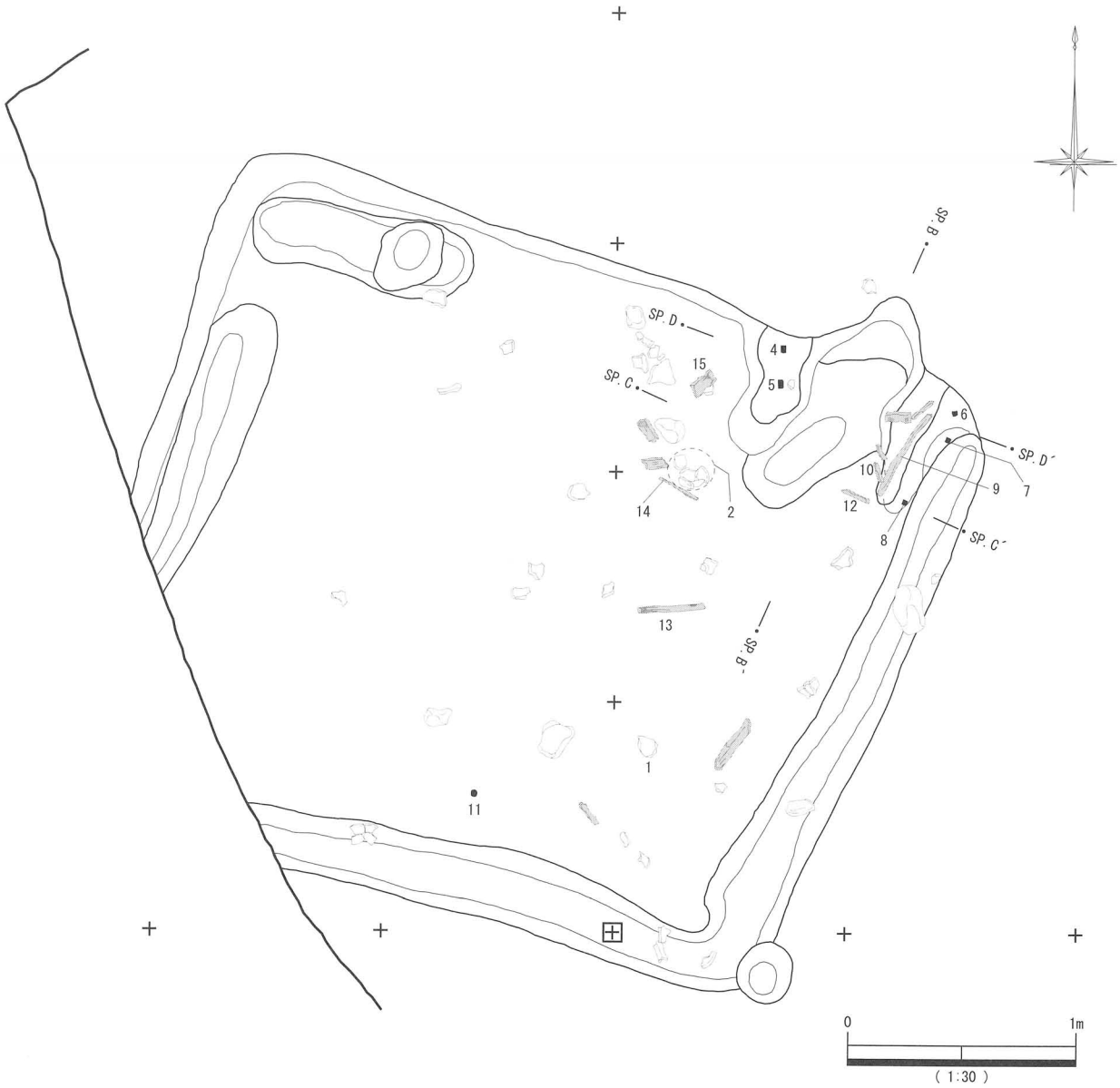
第23図　3・4号住居跡土層断面図　（Ｓ＝1/60）

【3号・4号住居跡土層説明】

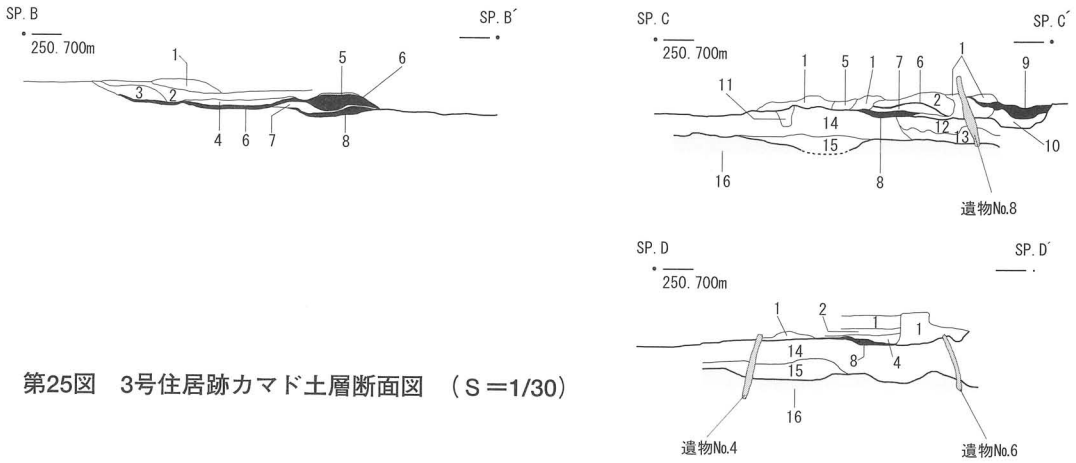
1	黒色砂	炭化物粒　多	5	炭化物層	
3	黒灰色砂		6	黒色砂	炭化物粒　多
2	暗灰色砂	炭化物粒	7	暗灰色砂	炭化物粒・暗灰色砂質シルトブロック　多
4	黒灰色砂				しまり　強

【3号住居跡土層説明】

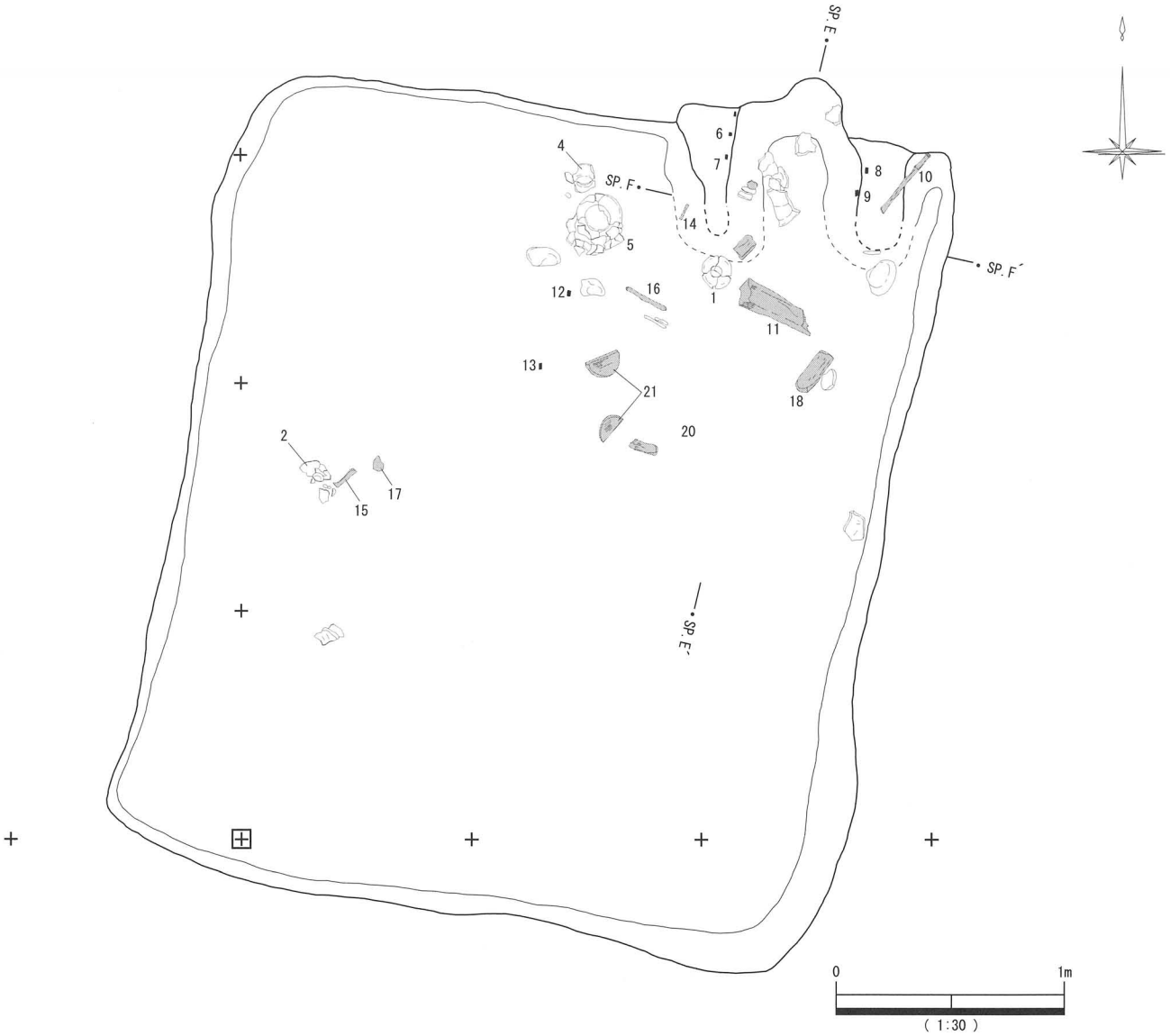
1	灰白色シルト	（カマド構築土・崩落土）	12	黒色砂	炭化物粒　多
2	黒灰色砂	炭化物粒・焼土粒	13	暗褐色砂	
3	暗灰褐色シルト質砂	灰白色シルト・焼土粒　多、炭化物粒	14	黒灰色砂	炭化物粒
4	暗灰褐色シルト質砂	灰白色シルト・焼土粒　多、炭化物粒	15	黄灰色砂	畝間を埋めるしまりの強い砂層
5	暗灰色砂		16	暗褐色砂質土	畑
6	炭化物				
7	黒灰色砂				
8	炭化物				
9	炭化物				
10	黒灰色砂	炭化物粒　多			



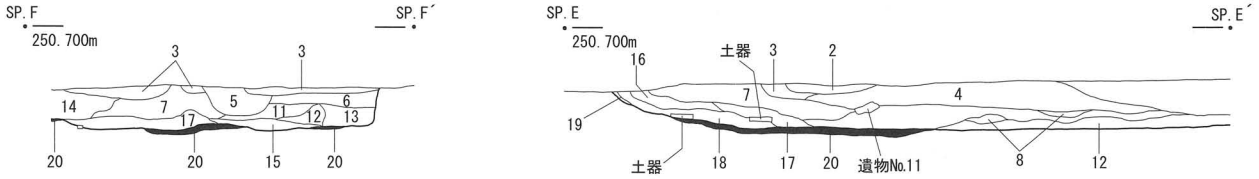
第24図　3号住居跡遺物出土状況図



第25図　3号住居跡カマド土層断面図　（S＝1/30）



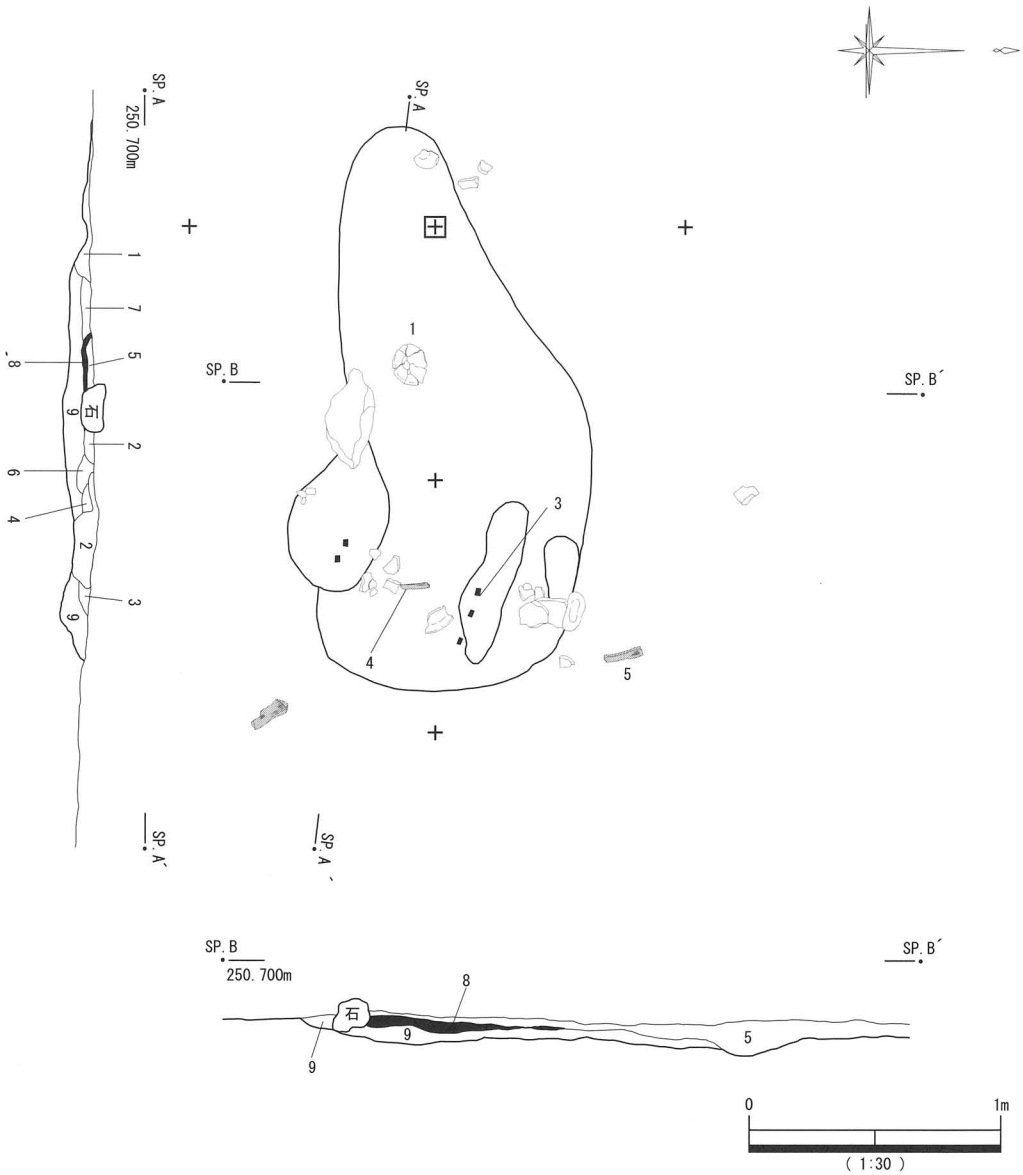
第26図　4号住居跡遺物出土状況図



第27図　4号住居跡カマド土層断面図　（S＝1/30）

【4号住居跡土層説明】

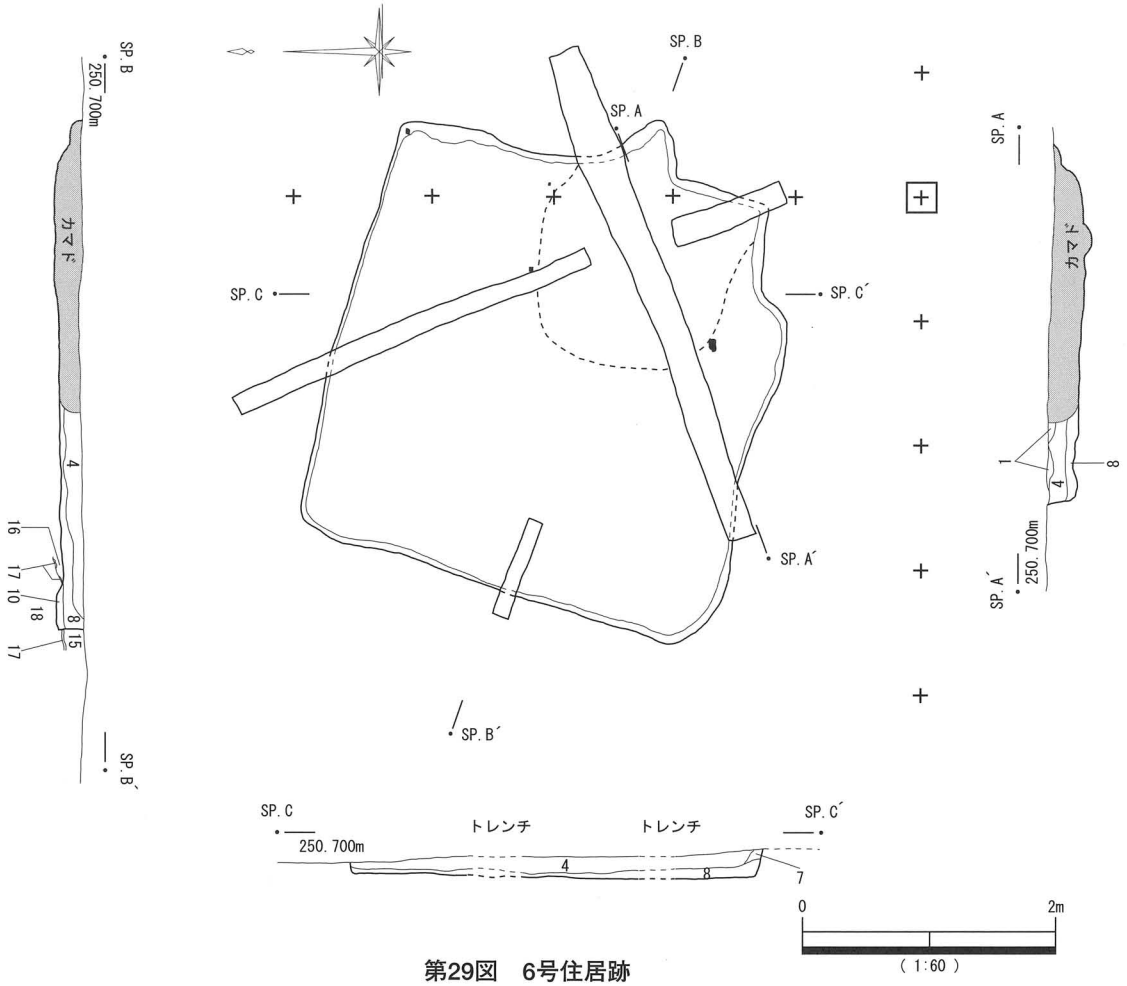
1	暗灰色砂	炭化物粒・暗灰色砂質シルトブロック　多 しまり　強
2	暗灰色砂	焼土粒・シルトブロック　多
3	黒灰色砂	
4	暗灰色砂	炭化物粒、シルトブロック
5	暗灰色シルト	
6	暗灰色砂	炭化物粒
7	暗灰色シルト主体	炭化物粒（カマド崩落土か）
8	暗灰色シルト主体	炭化物
9	黒灰色砂	暗灰色シルトブロック　多、炭化物
10	黒灰色砂	
11	暗灰色シルト質砂	暗灰色シルト、炭化物粒、焼土粒
12	暗灰色シルト主体	炭化物粒
13	黒灰色砂	暗灰色シルトブロック
14	暗灰色砂	炭化物粒
15	黒灰色砂	
16	暗灰色砂	炭化物
17	暗灰色砂質シルト	（カマド崩落土か）
18	黒灰色砂	暗灰色シルト、炭化物粒、焼土粒
19	暗灰色シルト	
20	炭化物層	



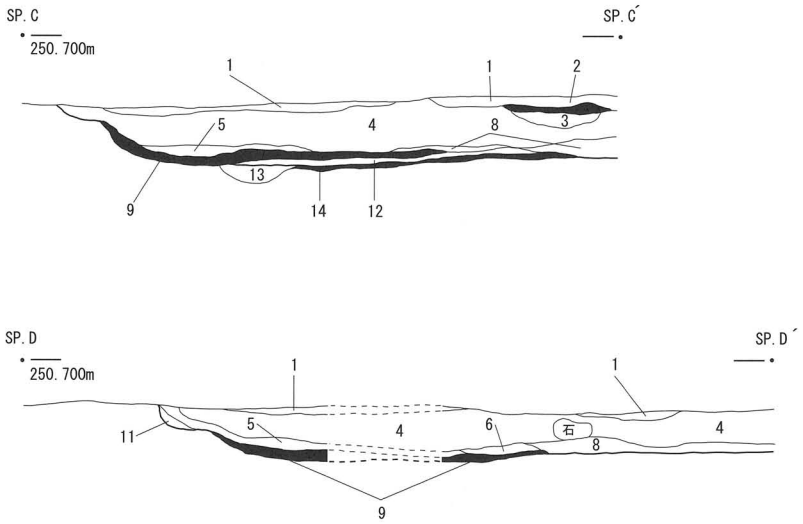
第28図　5号住居跡遺物出土状況図

【5号住居跡土層説明】

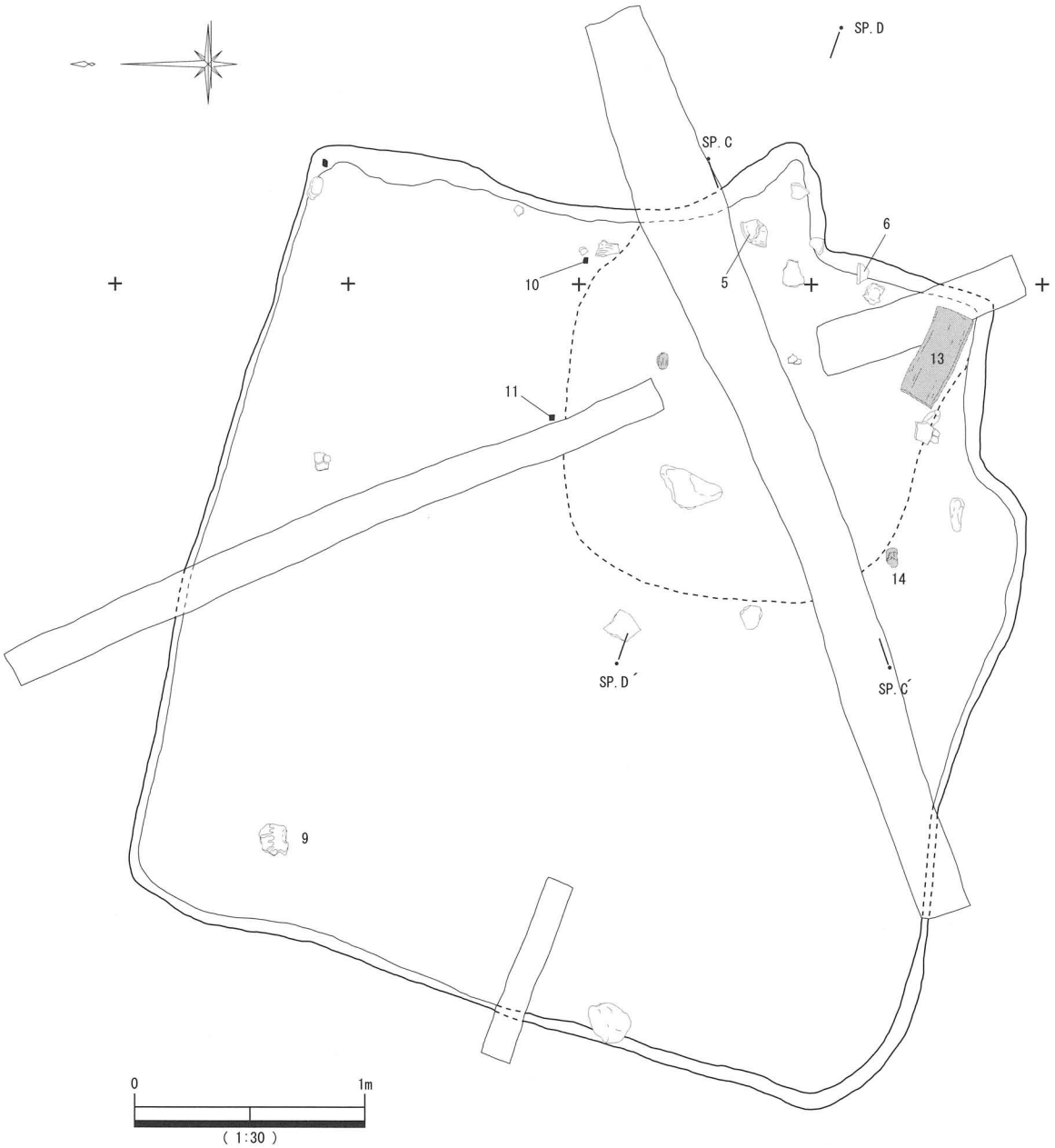
1	黒灰色砂	炭化物粒	6	暗灰色砂	炭化物粒、焼土粒
2	黒灰色シルト質砂	灰白色シルト、炭化物粒、焼土粒	7	暗灰色シルト	炭化物粒
3	黒灰色砂		8	炭化物層	
4	暗灰色シルト		9	暗灰色砂	
5	暗灰色砂	炭化物粒			



第29図　6号住居跡



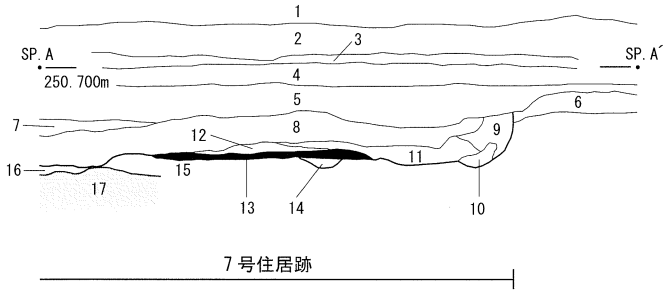
第30図　6号住居跡カマド土層断面図　（S＝1／30）



第31図　6号住居跡遺物出土状況図　（S=1／30）

【6号住居跡土層説明】

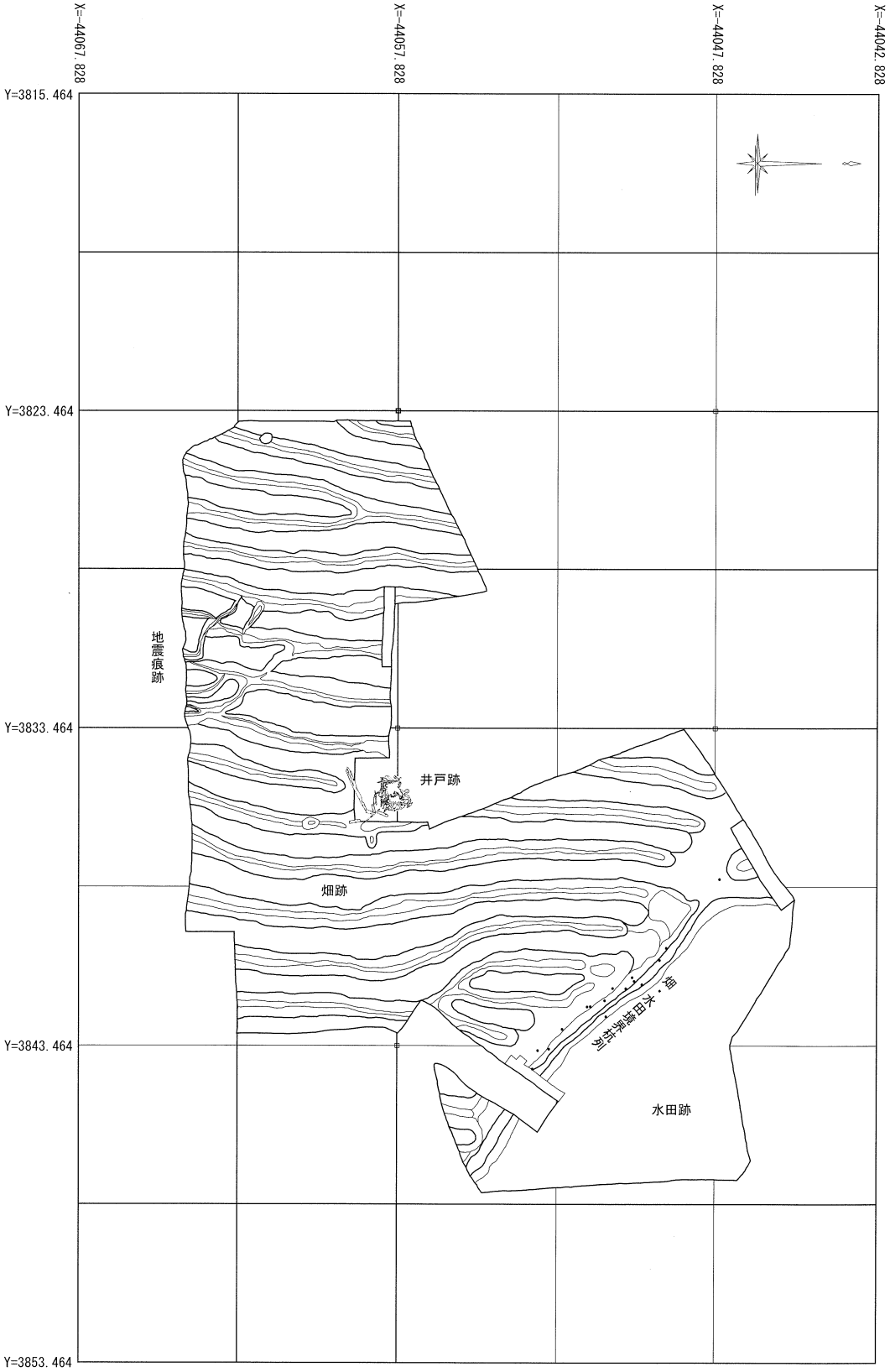
１	黒灰色砂	炭化物粒
２	炭化物	
３	赤褐色砂質シルト	炭化物・焼土　多
４	暗灰色砂	炭化物、暗灰色シルト質砂ブロック
５	暗灰褐色シルト質砂	暗灰色シルト、炭化物・焼土　多
６	暗灰色砂	木細粉（床面直上に堆積する木のクズを含む層）
７	灰褐色砂	
８	暗灰褐色砂	炭化物粒
９	炭化物	
１０	暗褐色砂	暗灰色シルト質砂ブロック
１１	暗灰色砂	
１２	暗灰色砂質シルト	
１３	暗灰褐色シルト	焼土、炭化物
１４	炭化物	
１５	黄灰色砂	
１６	黄灰色砂	15層より粗くしまる（畝間を埋める層）
１７	暗灰色シルト質細砂	（畑面直上に堆積する層）
１８	暗褐色砂質シルト	畑土



第32図　7号住居跡土層断面図　（S=1／30）

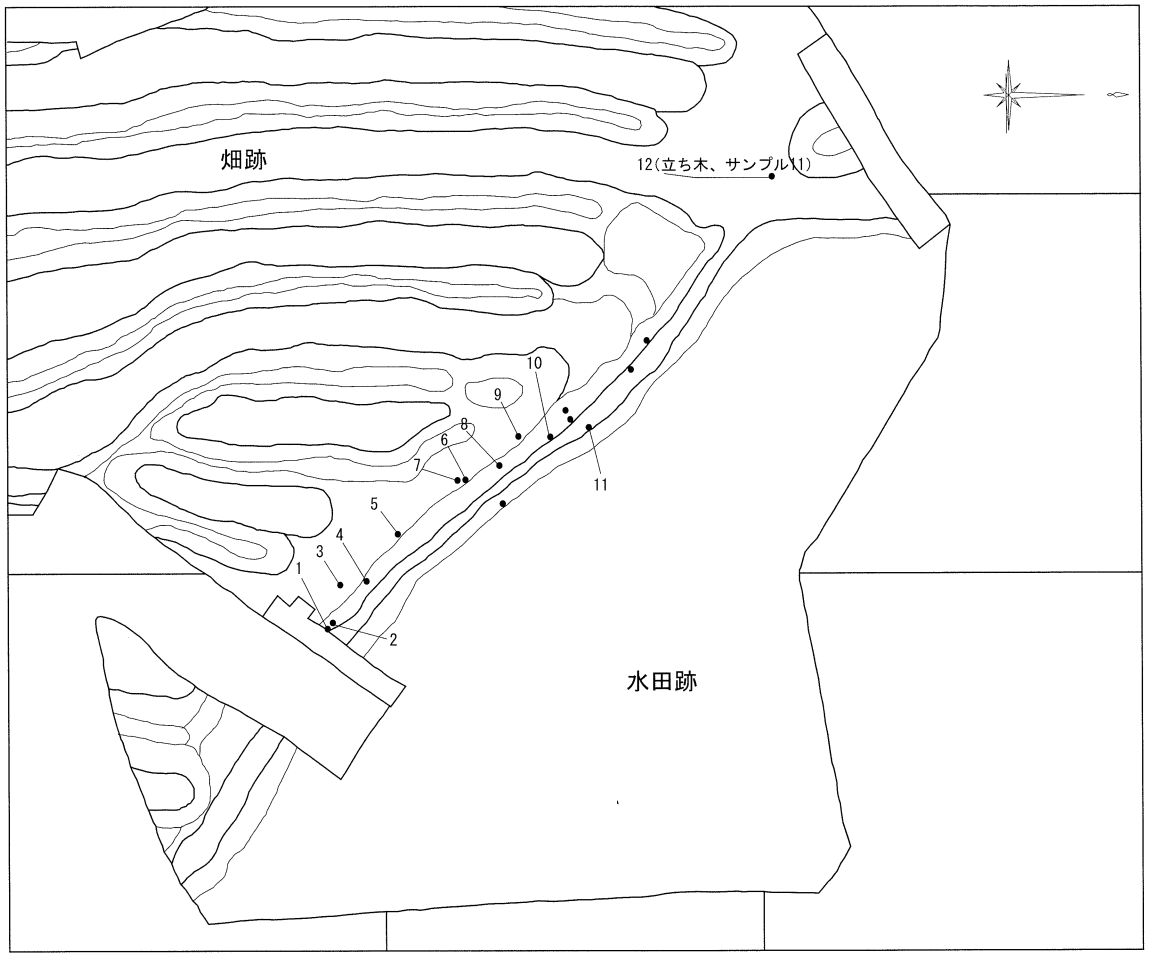
【7号住居跡土層説明】

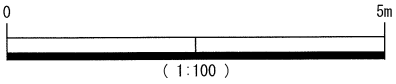
１	黄灰色砂質シルト	
２	暗灰色シルト	植物遺体
３	黒色シルト	植物遺体
４	黒色腐植層	植物遺体　多
５	黒灰色砂	植物遺体、炭化物粒
６	黒灰色砂	炭化物粒
７	灰色砂	
８	暗灰色砂	炭化物　多
９	黒褐色砂	炭化物粒・焼土粒　多
１０	黒灰色砂	
１１	焼土層	焼土主体
１２	灰色シルト質砂	
１３	炭化物層	
１４	暗灰色砂	
１５	黄灰色砂	（畑を覆う層）
１６	暗灰色シルト質砂	
１７	灰褐色シルト質砂	畑



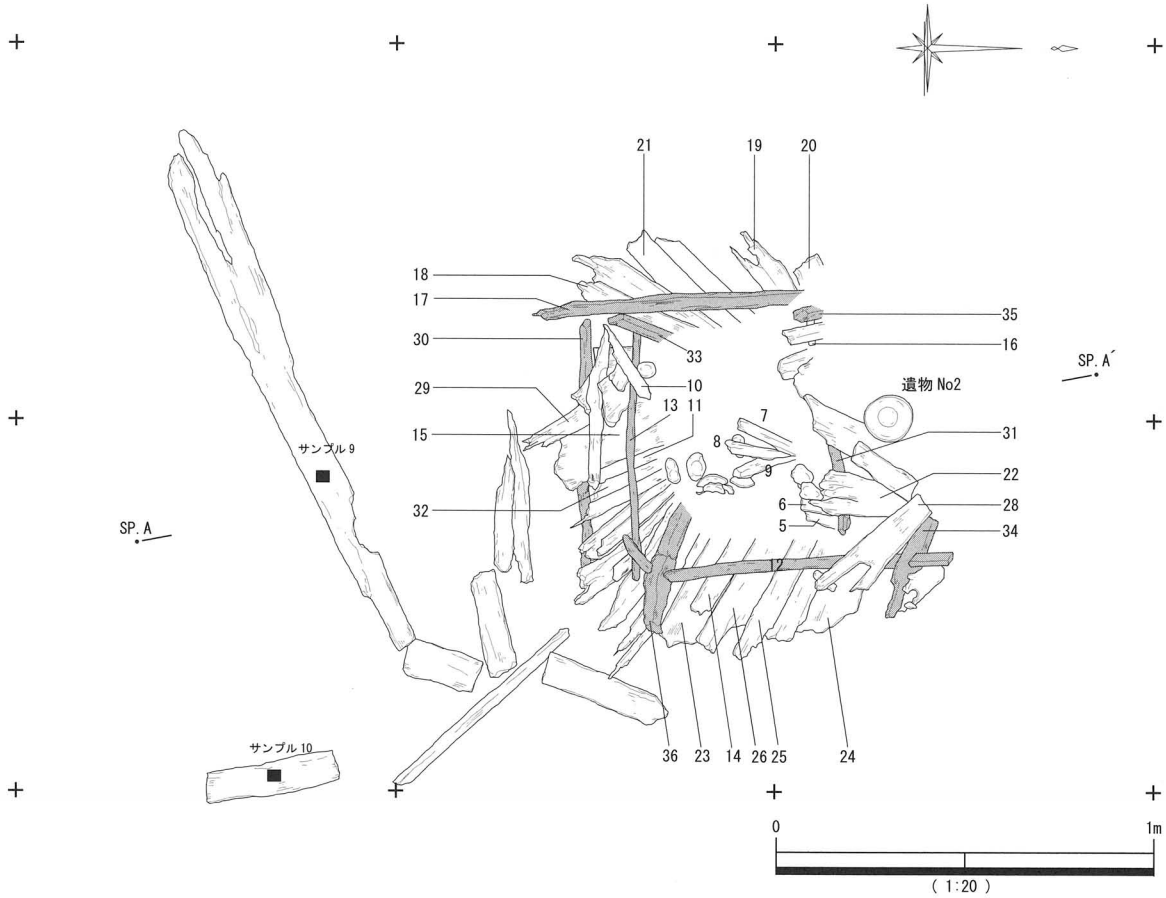
第33図　第3面畑跡

0　10m
（1:200）

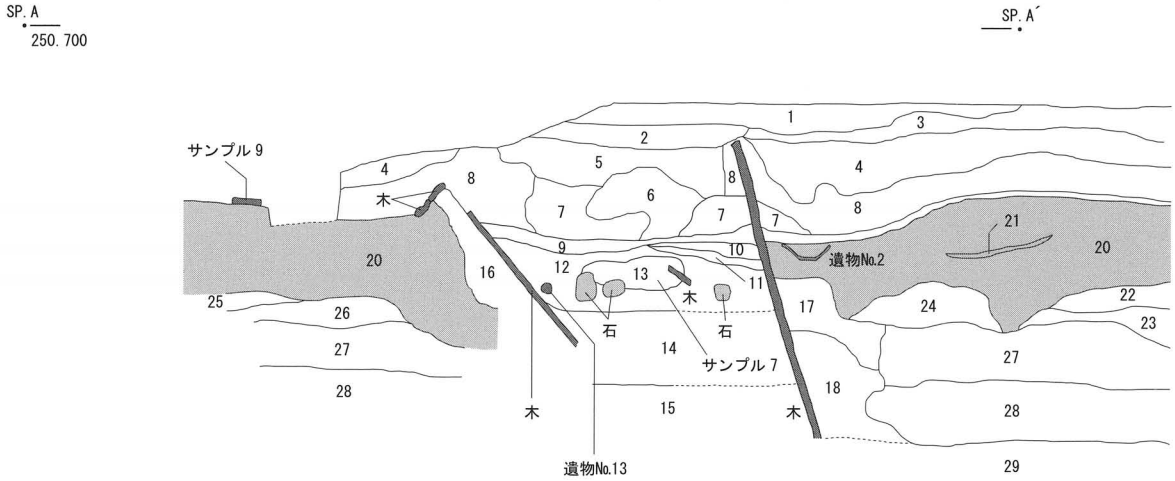




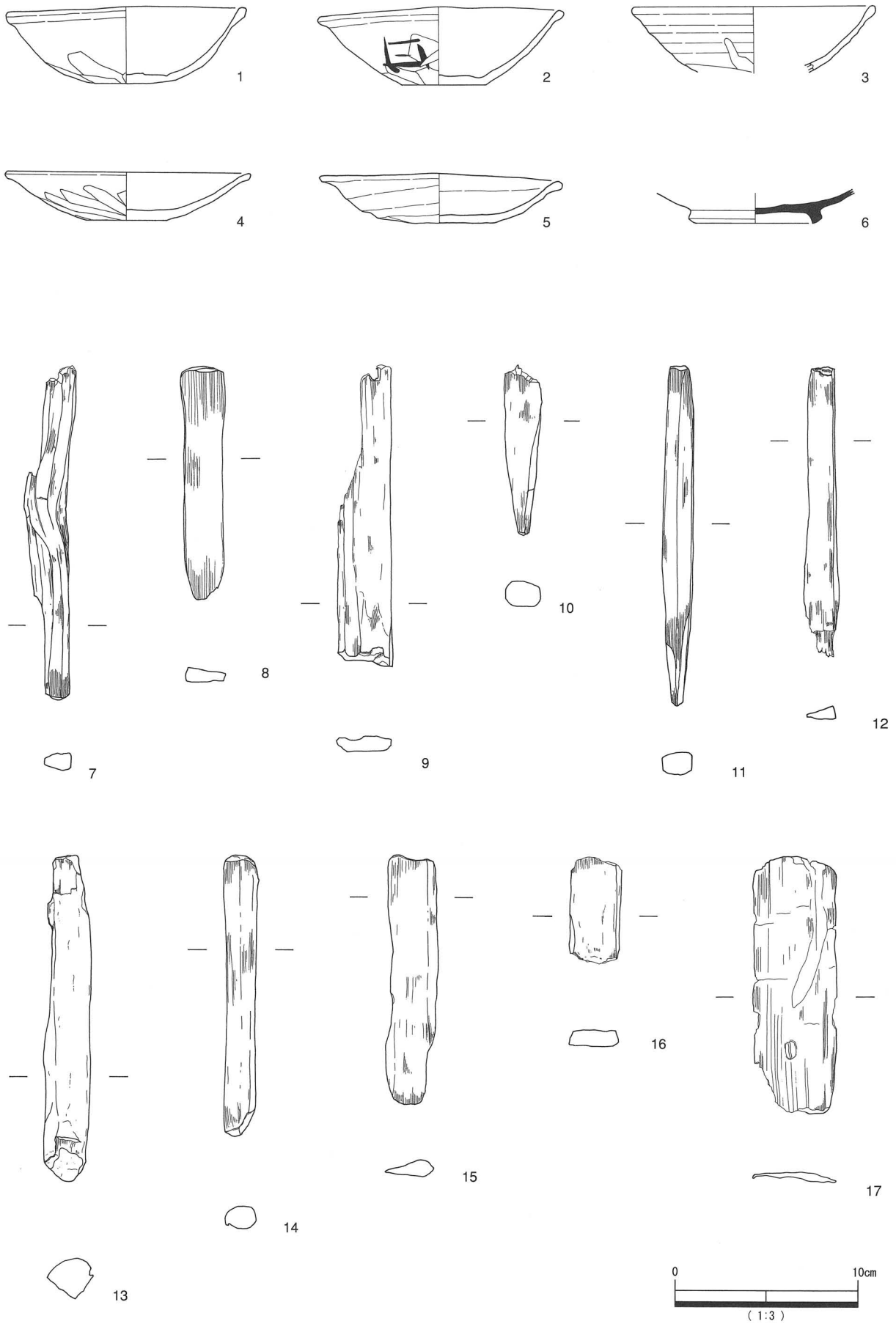
第34図　第3面田畑境界拡大図



第35図　井戸跡

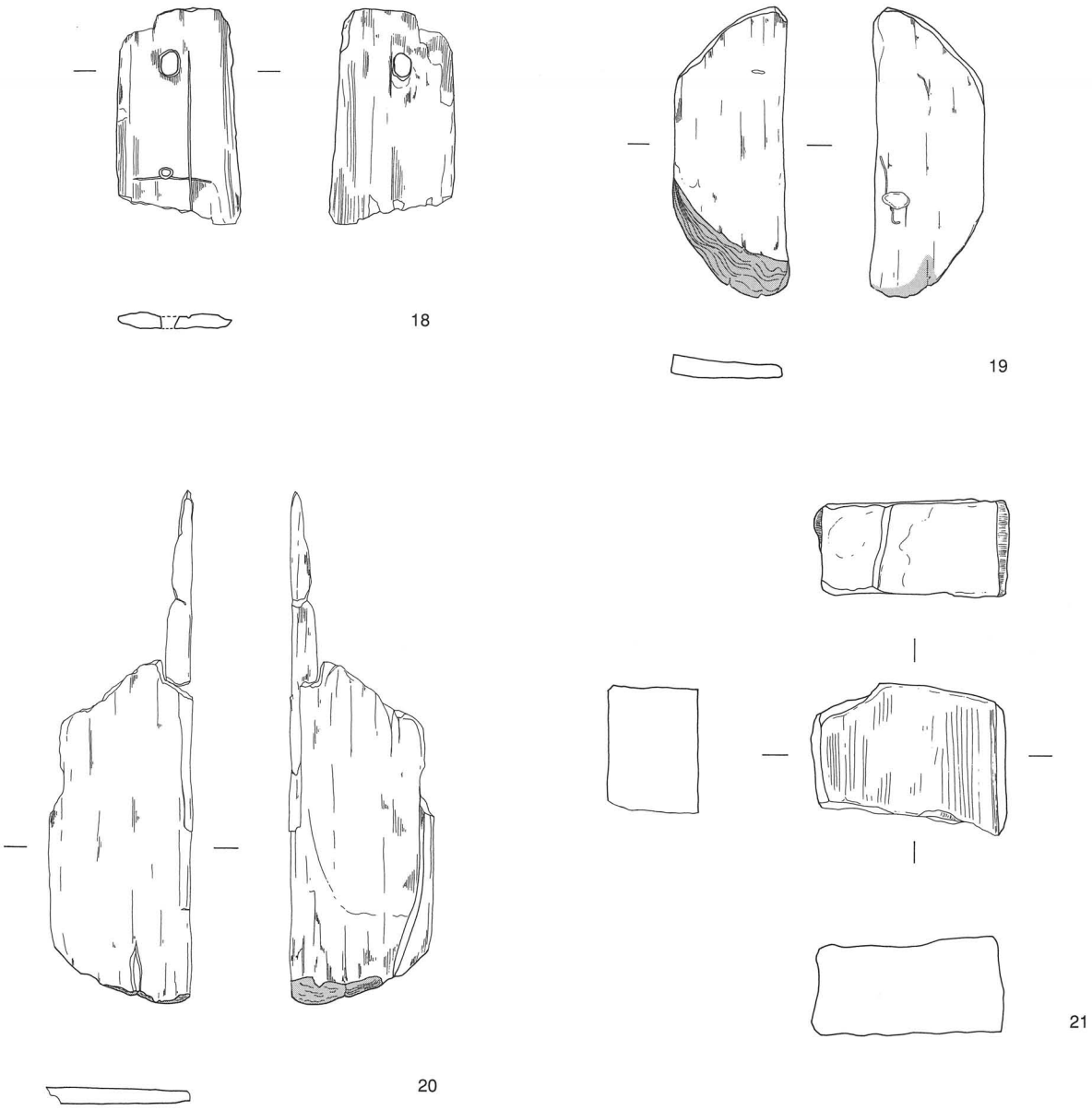


第36図　井戸跡土層断面図　（S=1／20）



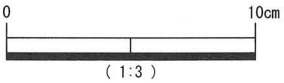
第37図　1号住居跡出土遺物　（1）

（3次）



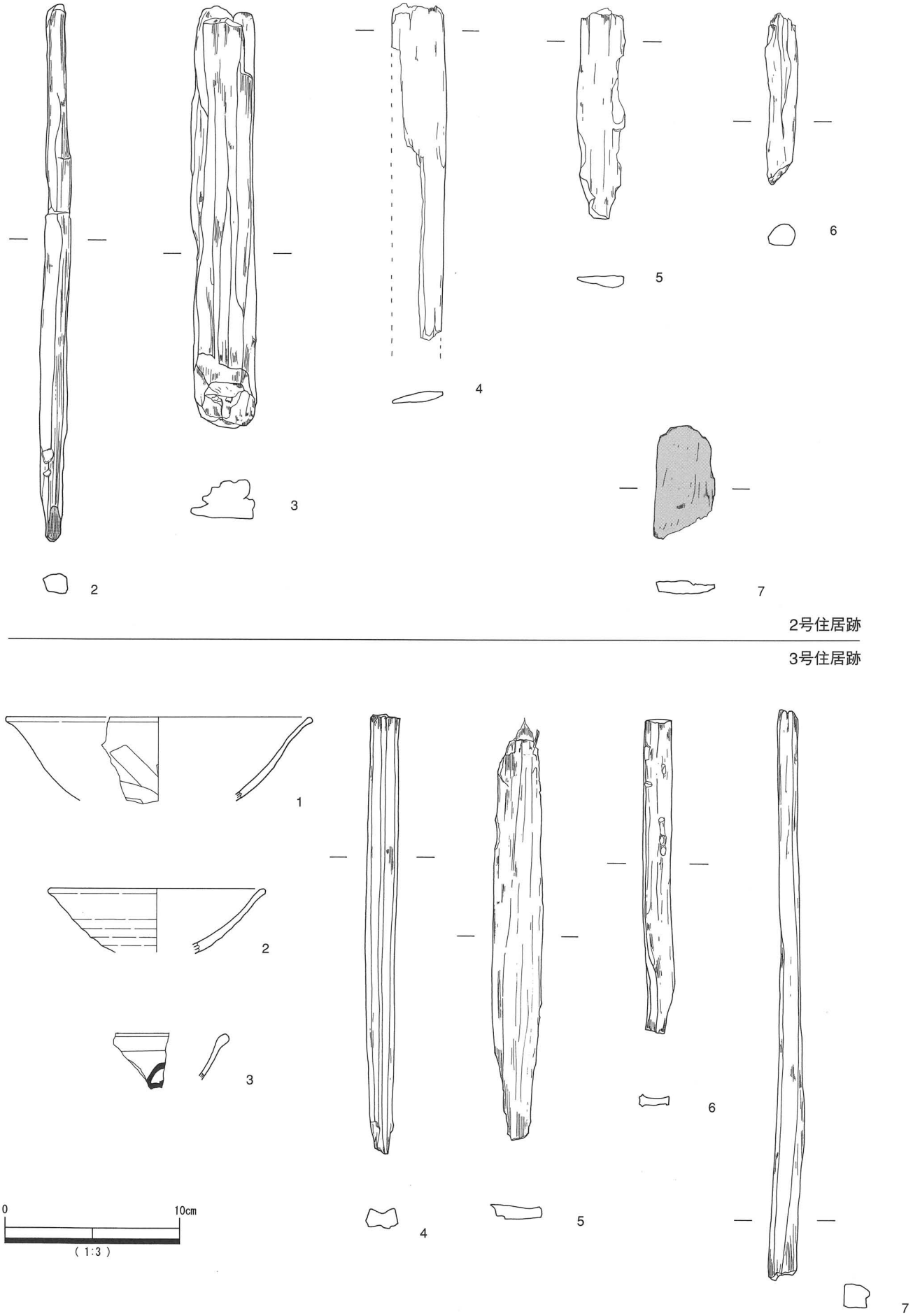
1号住居跡

2号住居跡



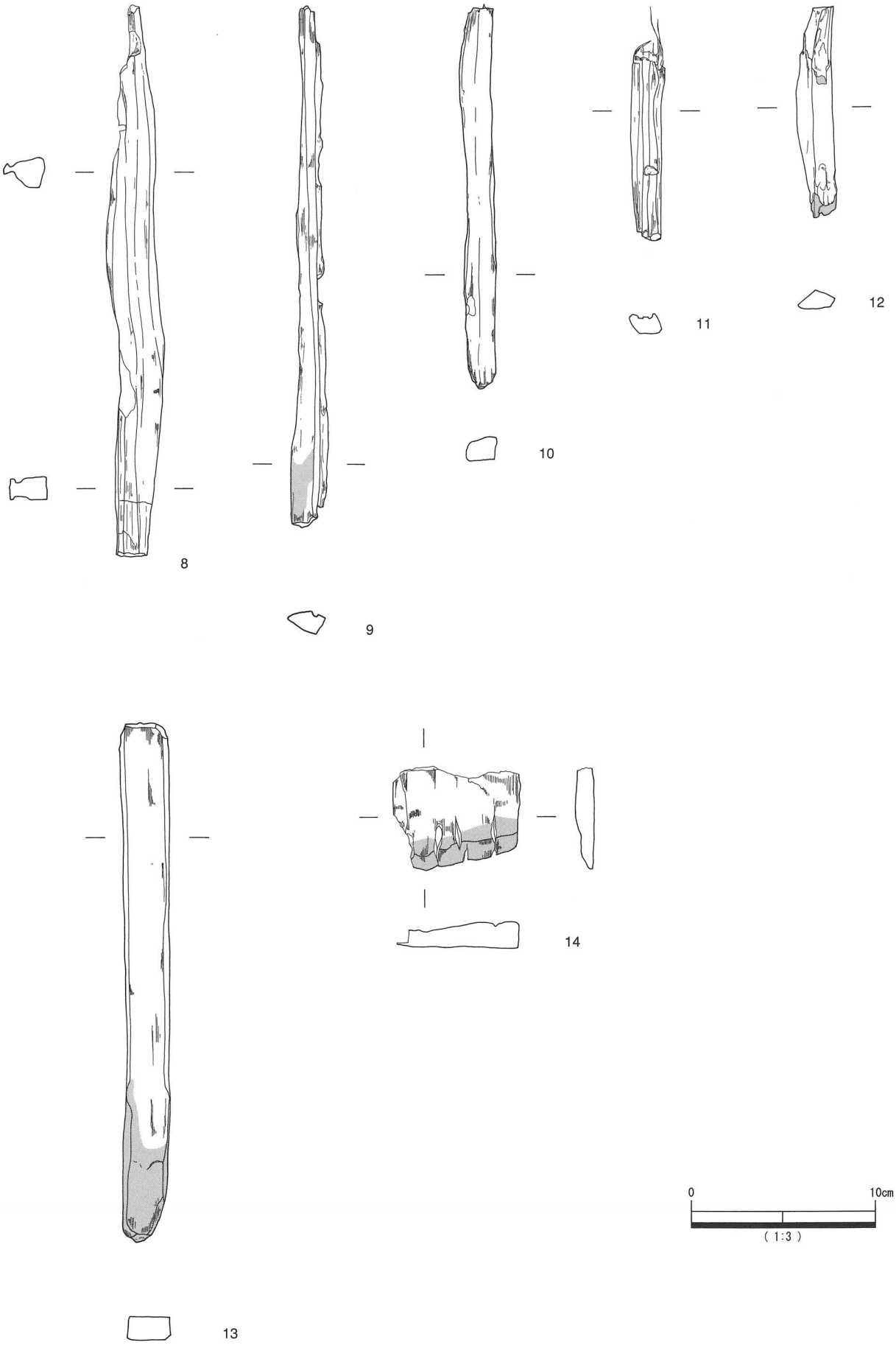
第38図　1号住居跡出土遺物　（2）、2号住居跡出土遺物　（1）

（3次）

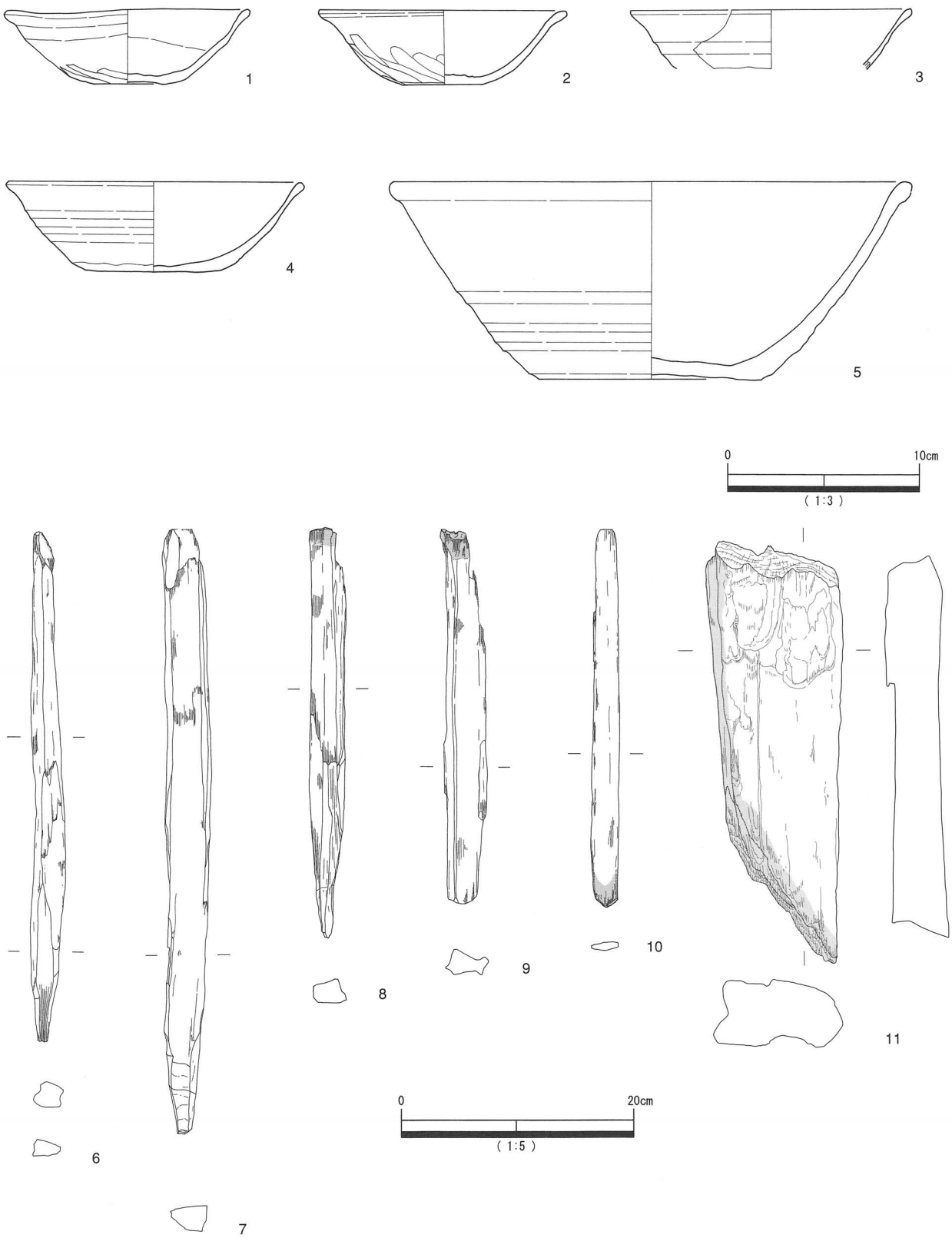


第39図　2号住居跡出土遺物　（2）、3号住居跡出土遺物　（1）

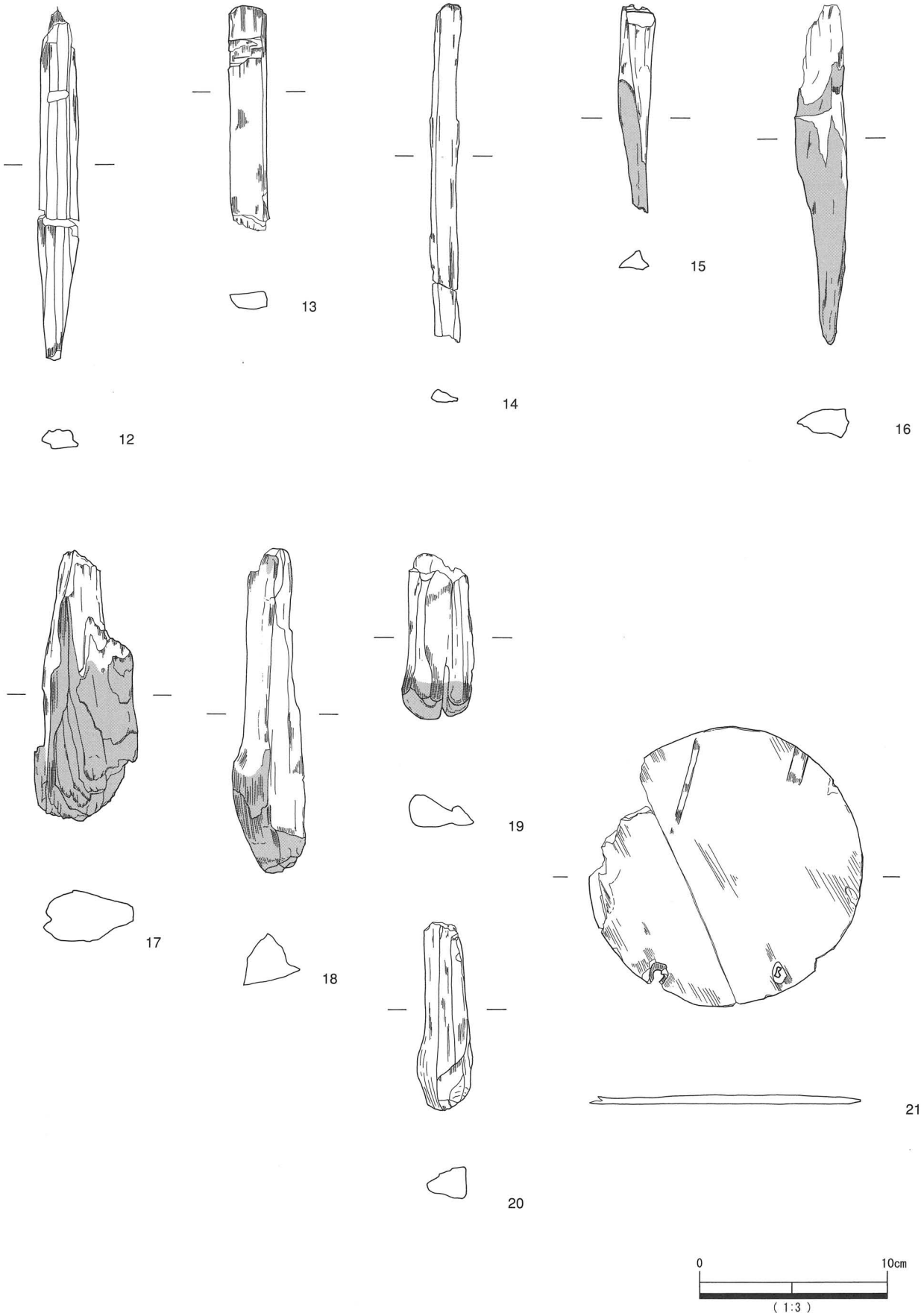
（3次）



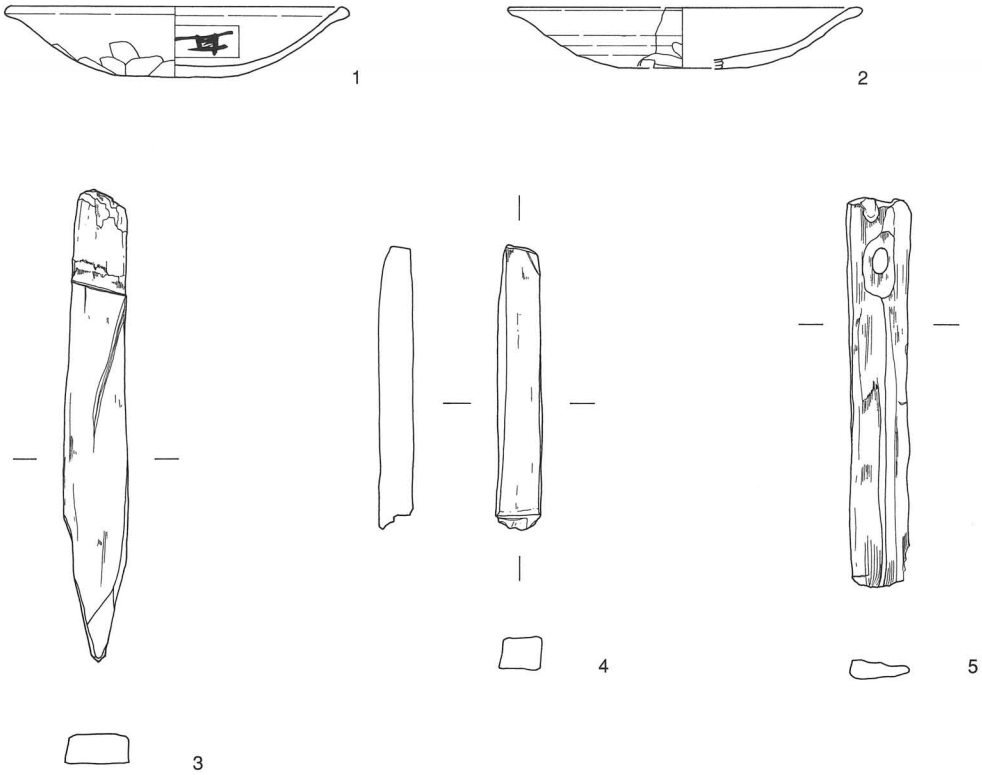
第40図　3号住居跡出土遺物　（2）



第41図　4号住居跡出土遺物　（1）

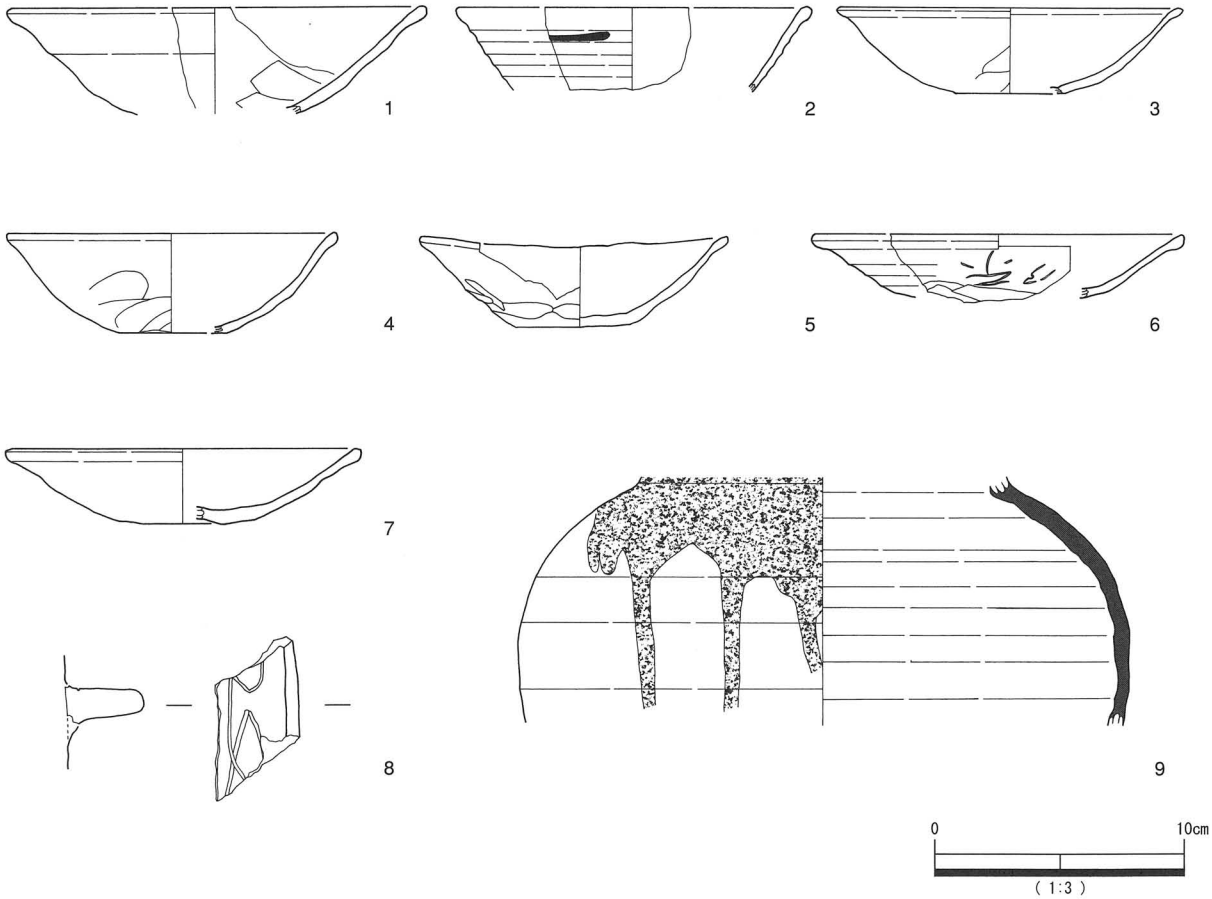


第42図　4号住居跡出土遺物　（2）

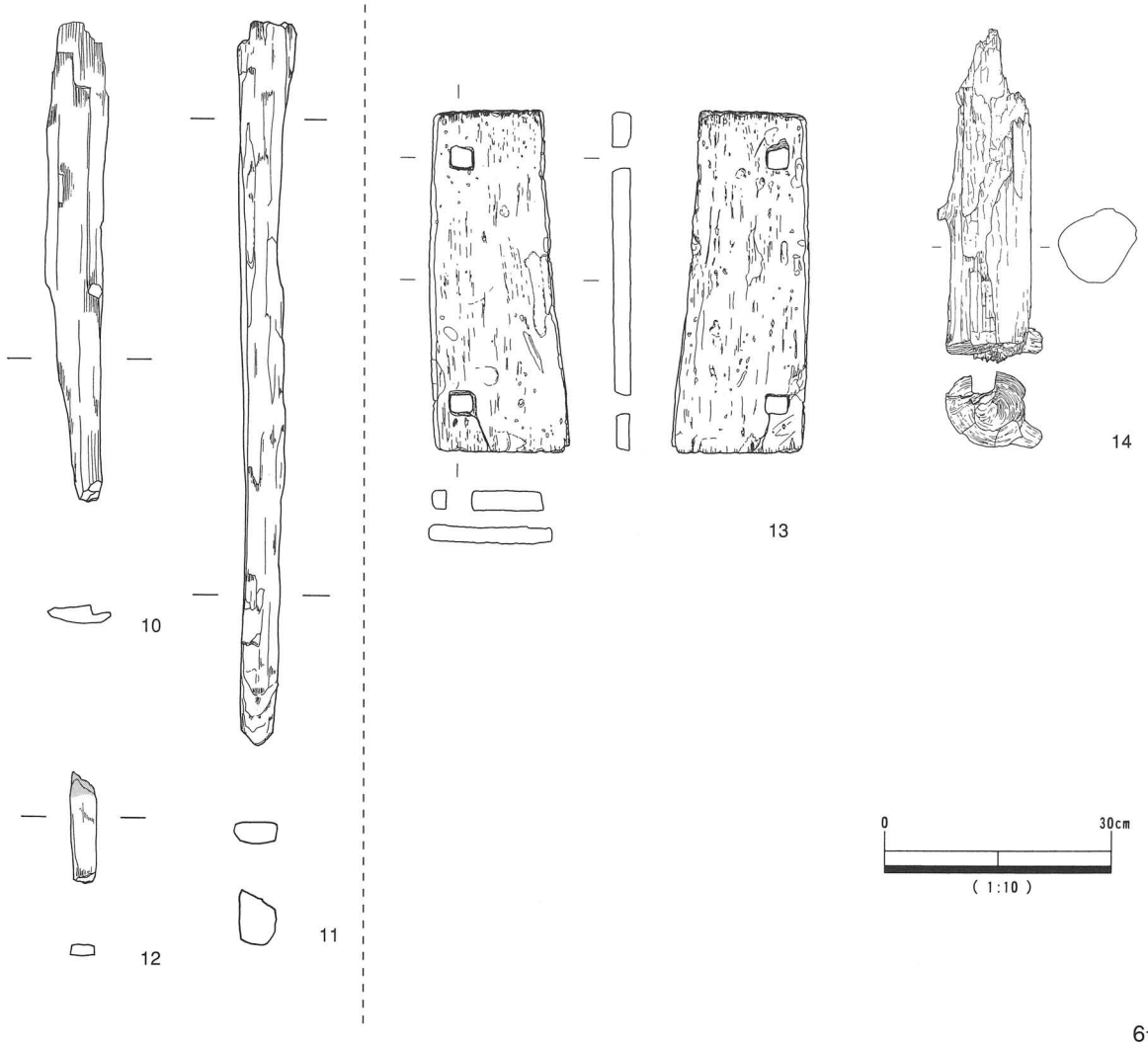


5号住居跡

6号住居跡

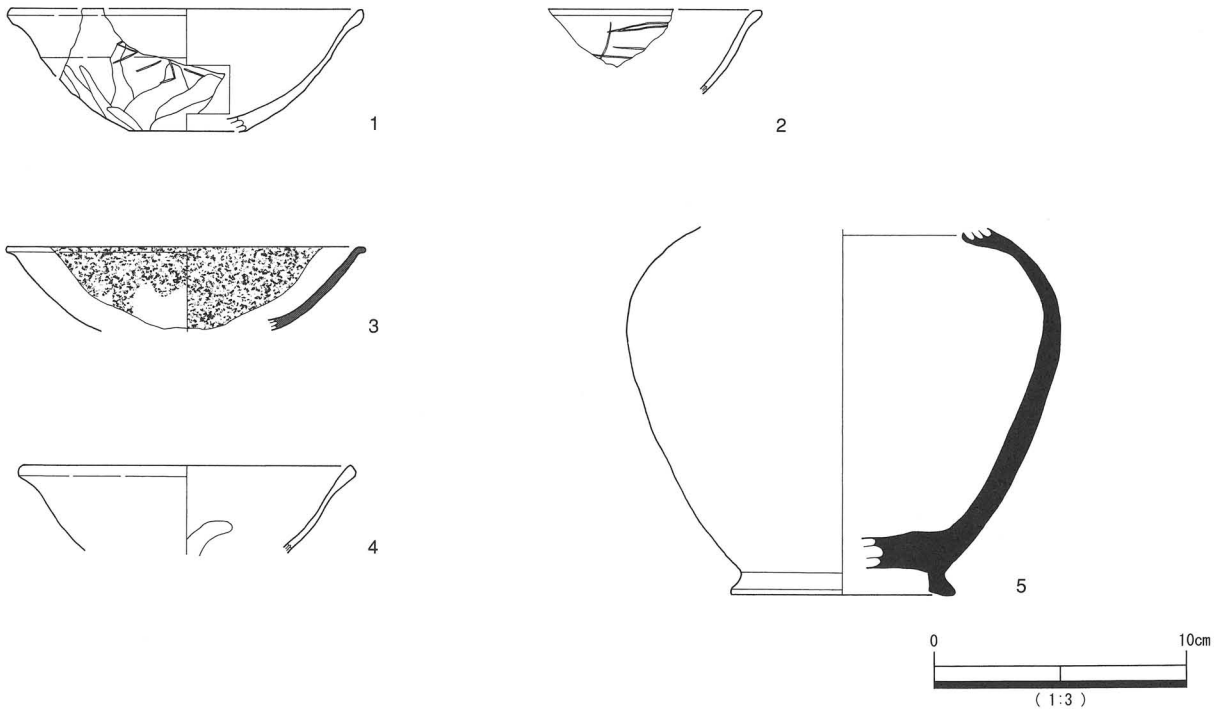


第43図　5号住居跡出土遺物、6号住居跡出土遺物（1）

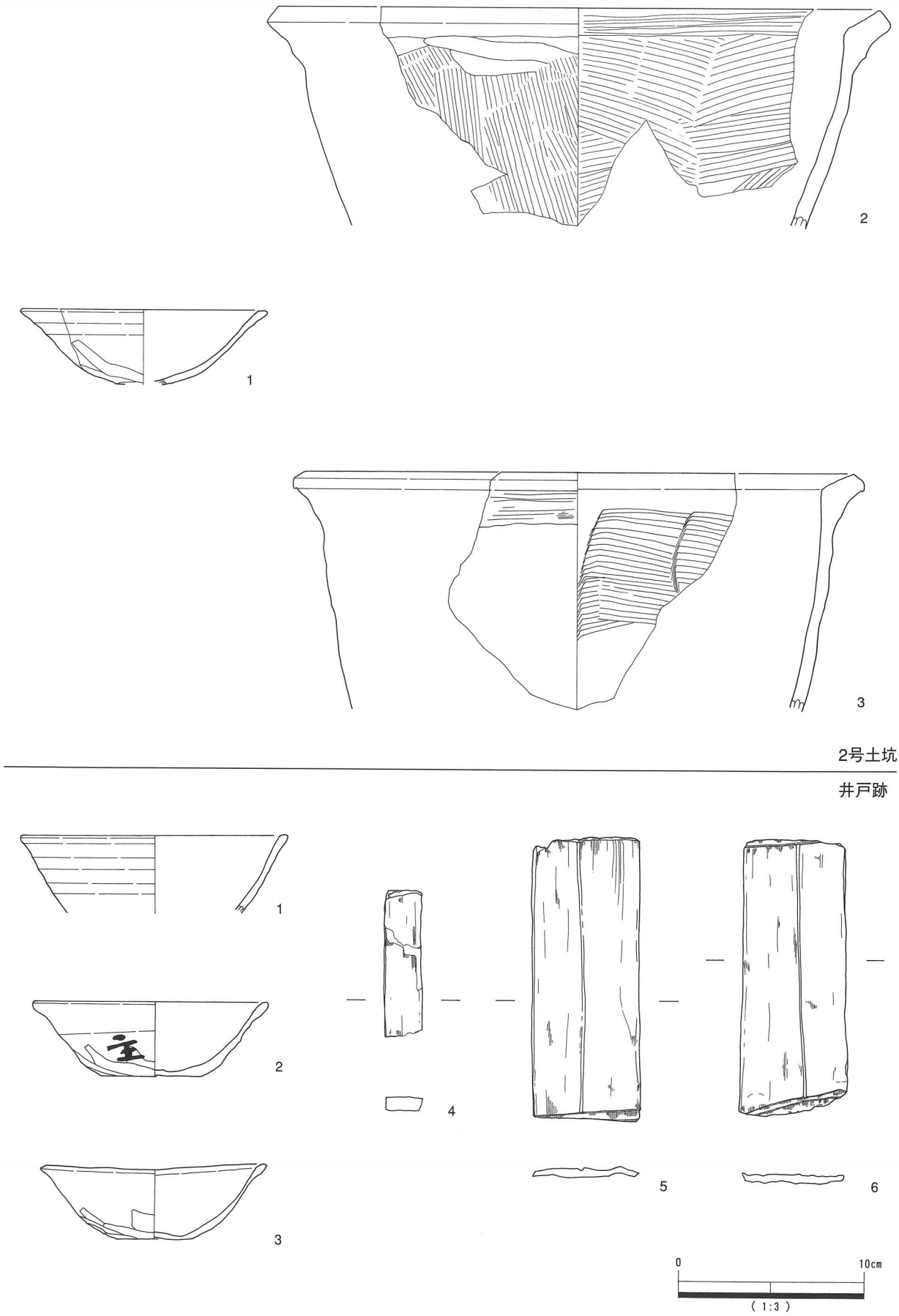


6号住居跡

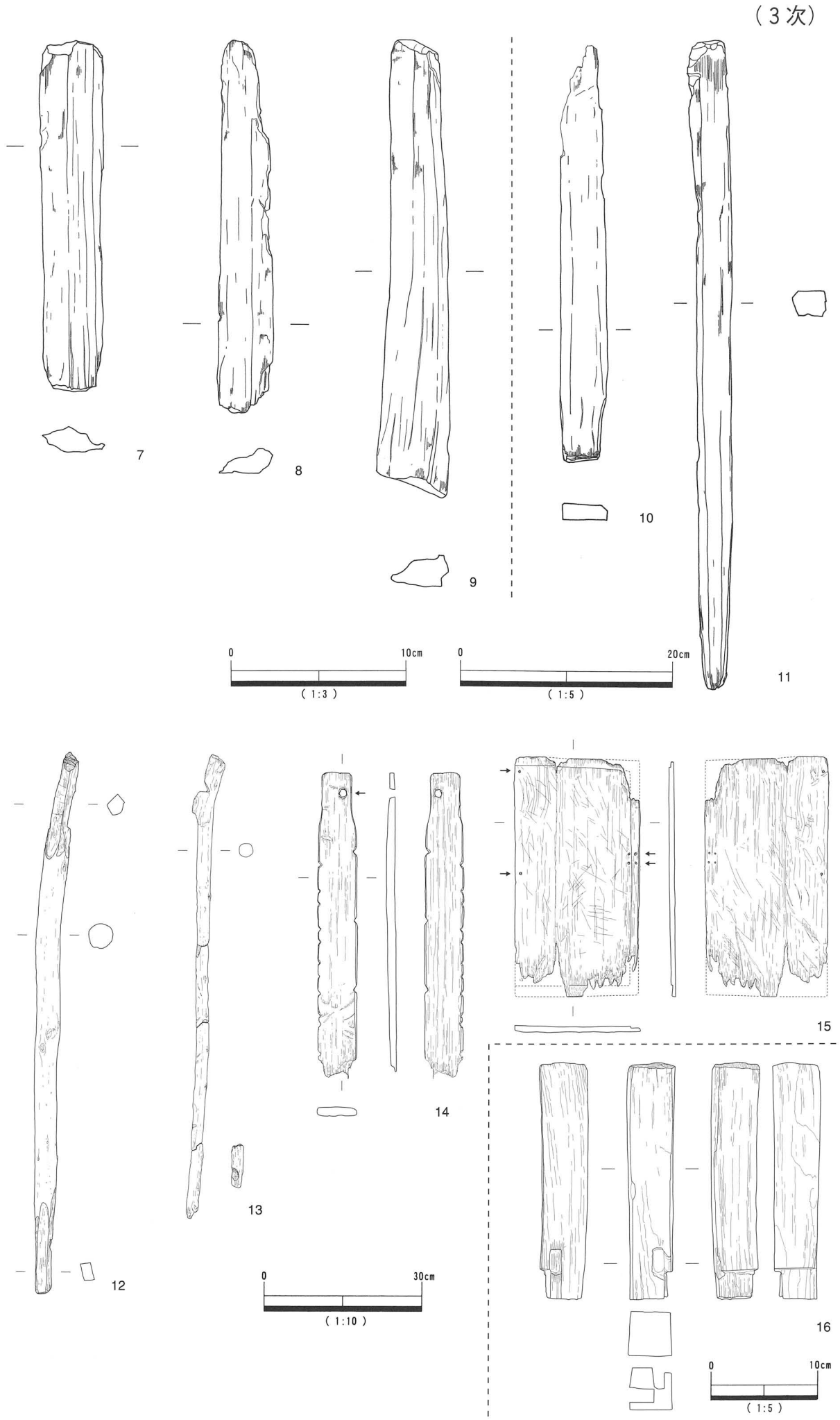
7号住居跡



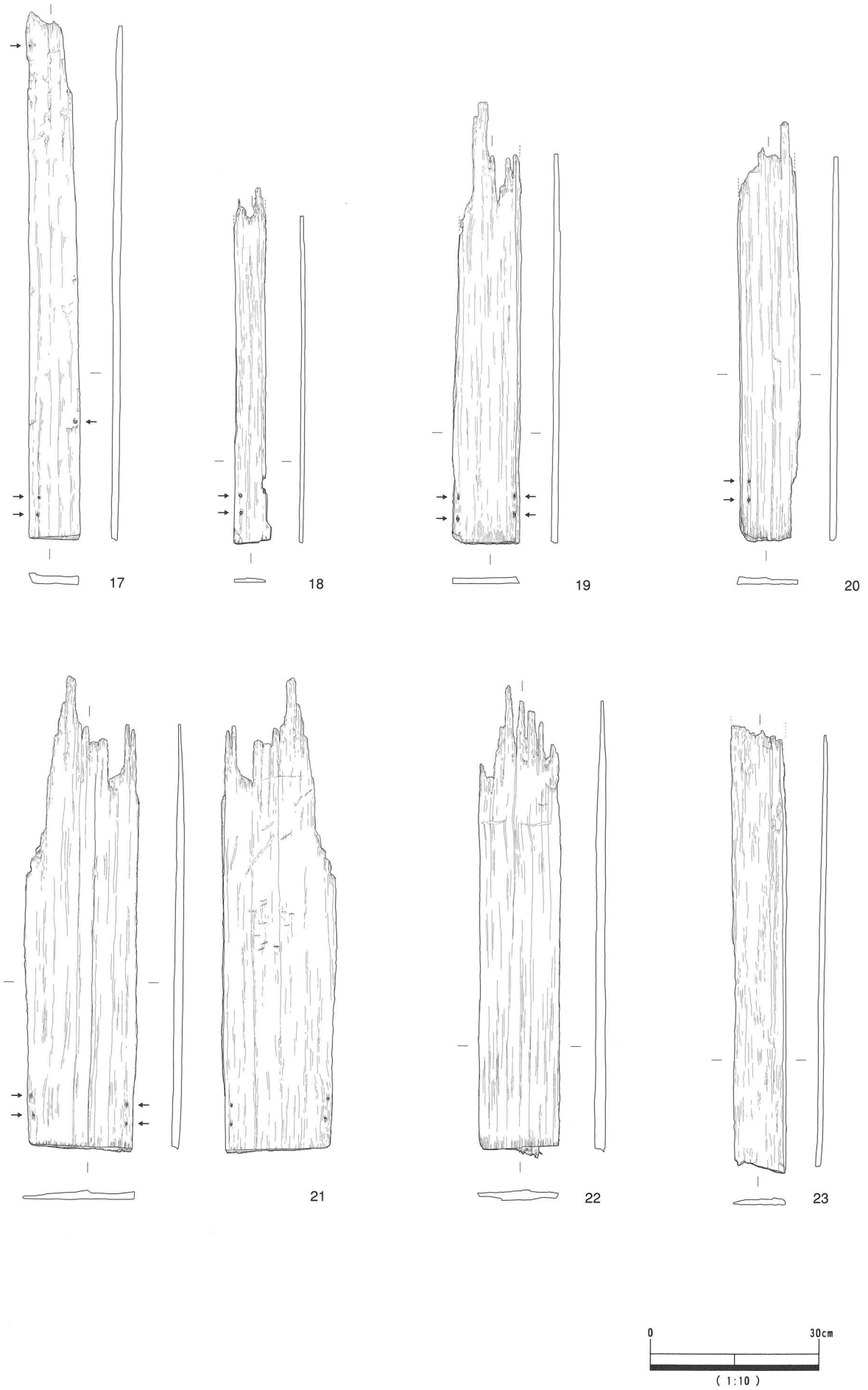
第44図　6号住居跡出土遺物（2）、7号住居跡出土遺物



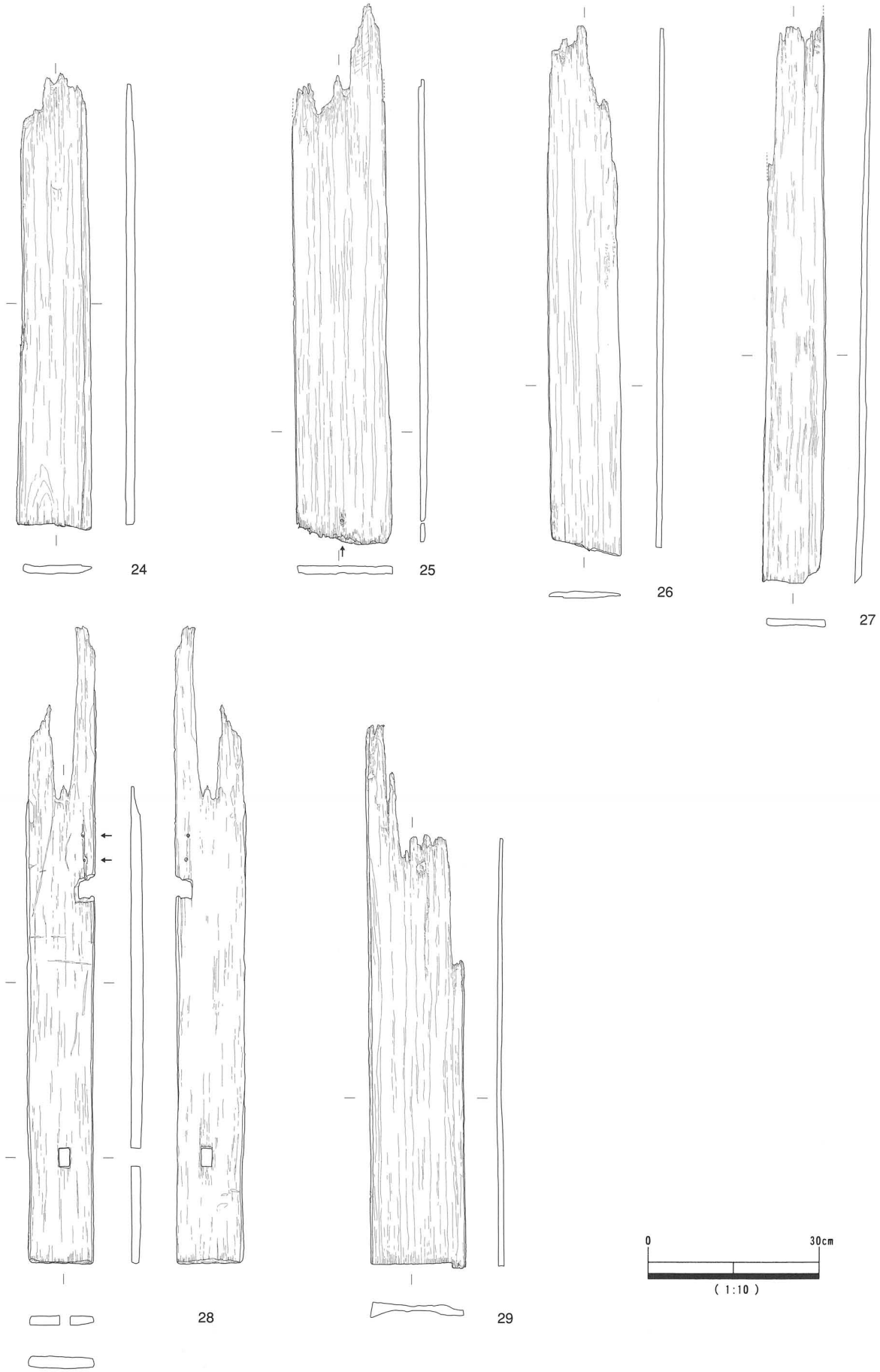
第45図　2号土坑出土遺物、井戸跡出土遺物（1）



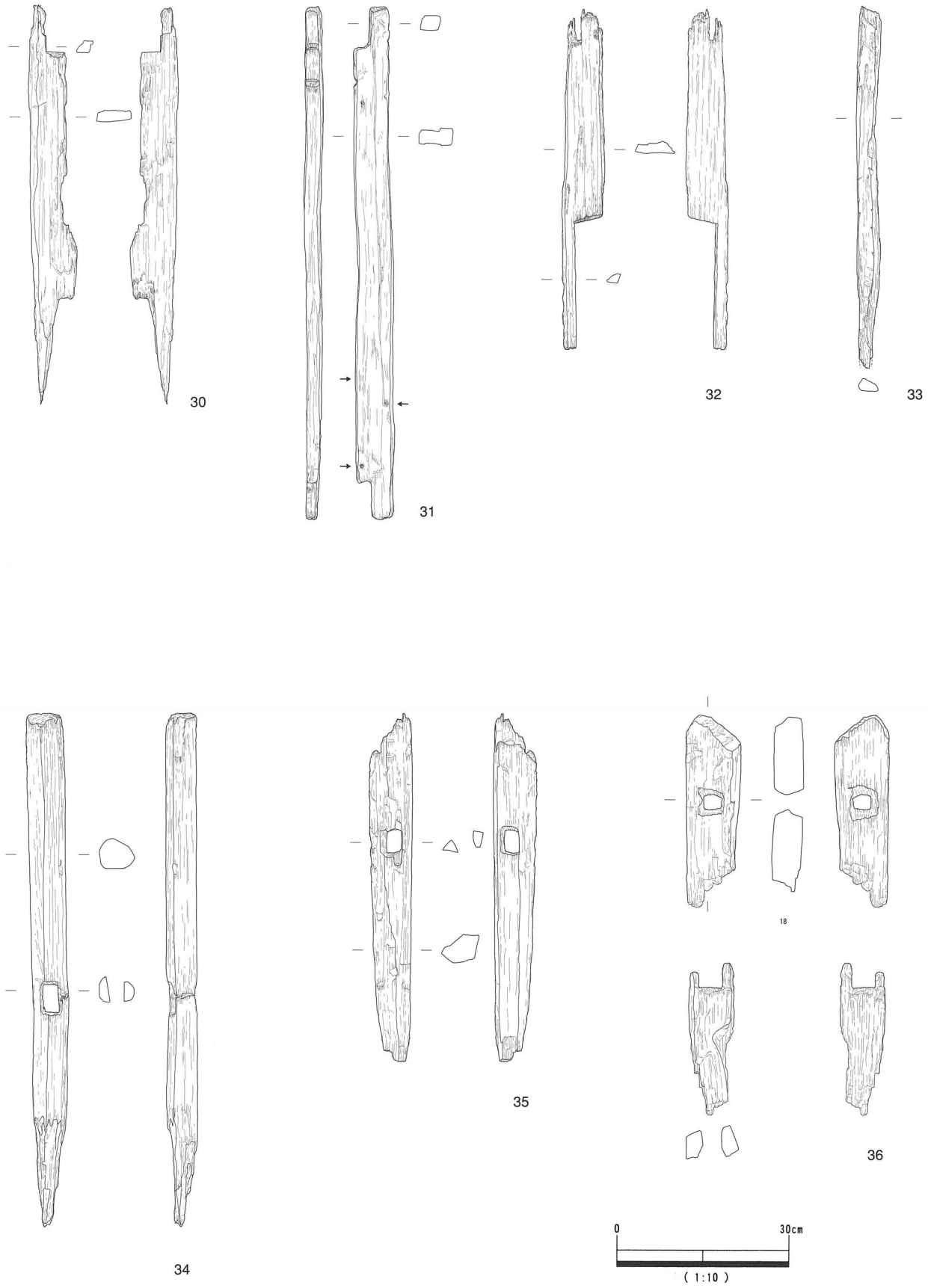
第46図　井戸跡出土遺物（2）



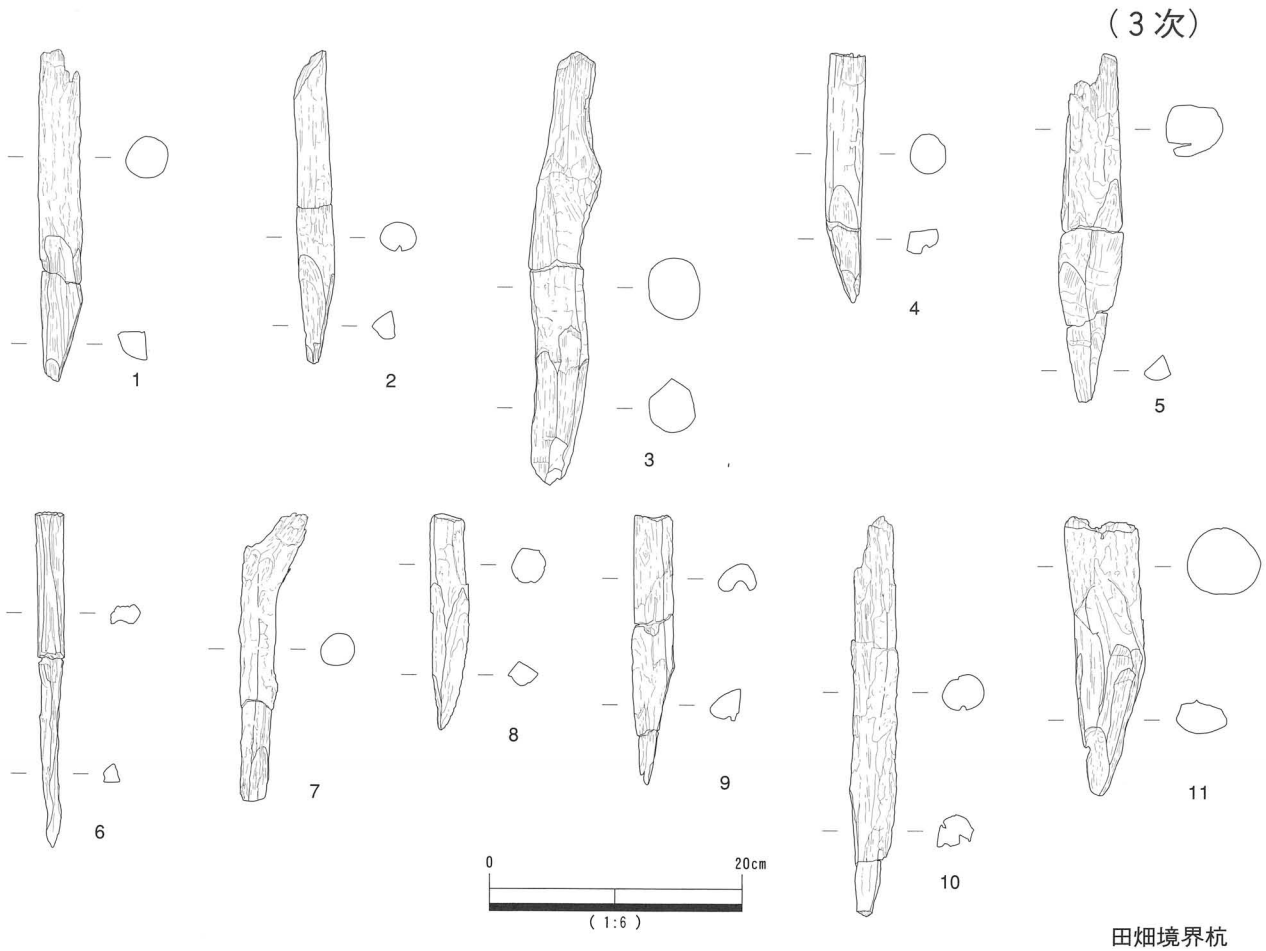
第47図　井戸跡出土遺物（3）



第48図　井戸跡出土遺物（4）

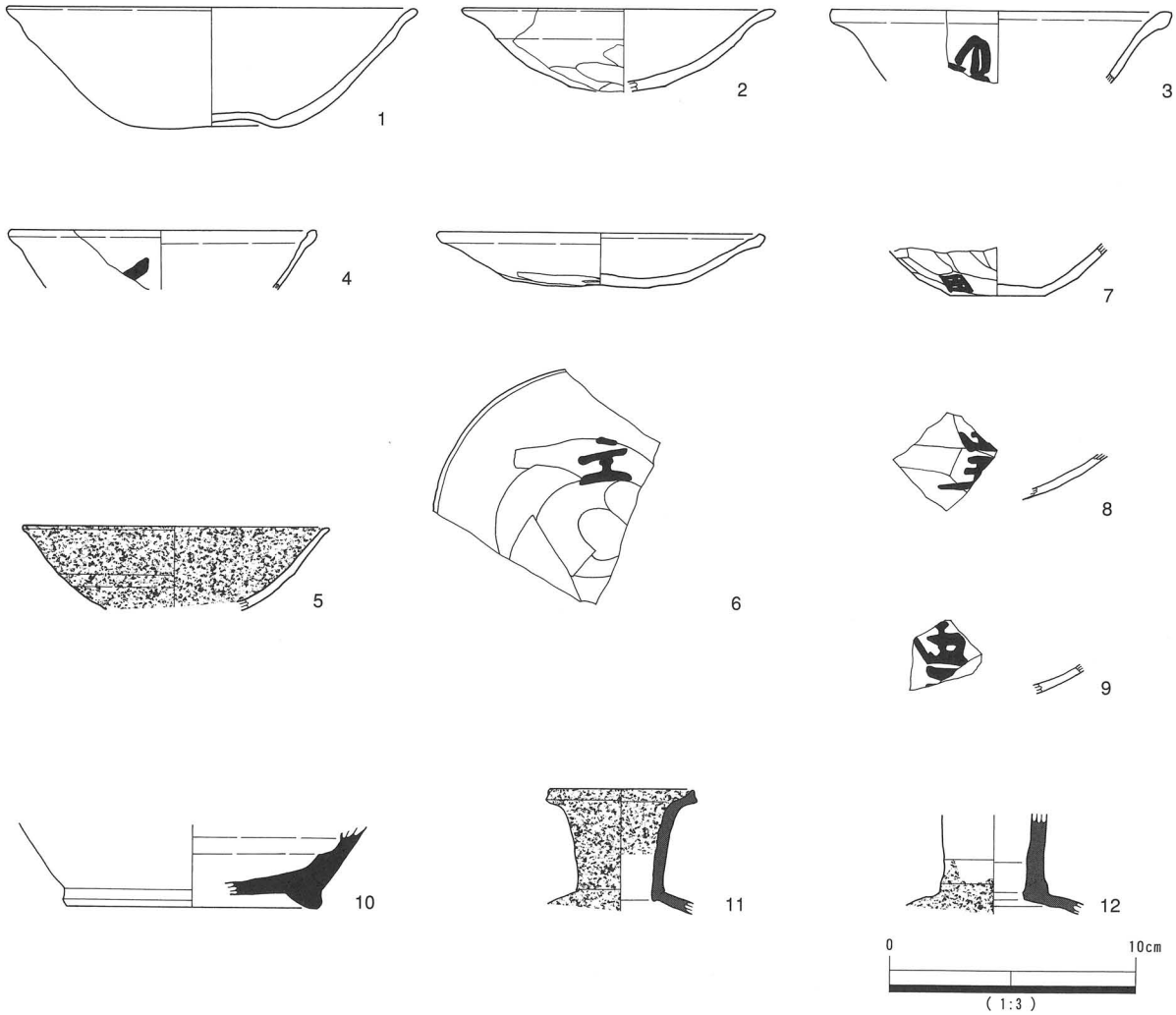


第49図　井戸跡出土遺物（5）

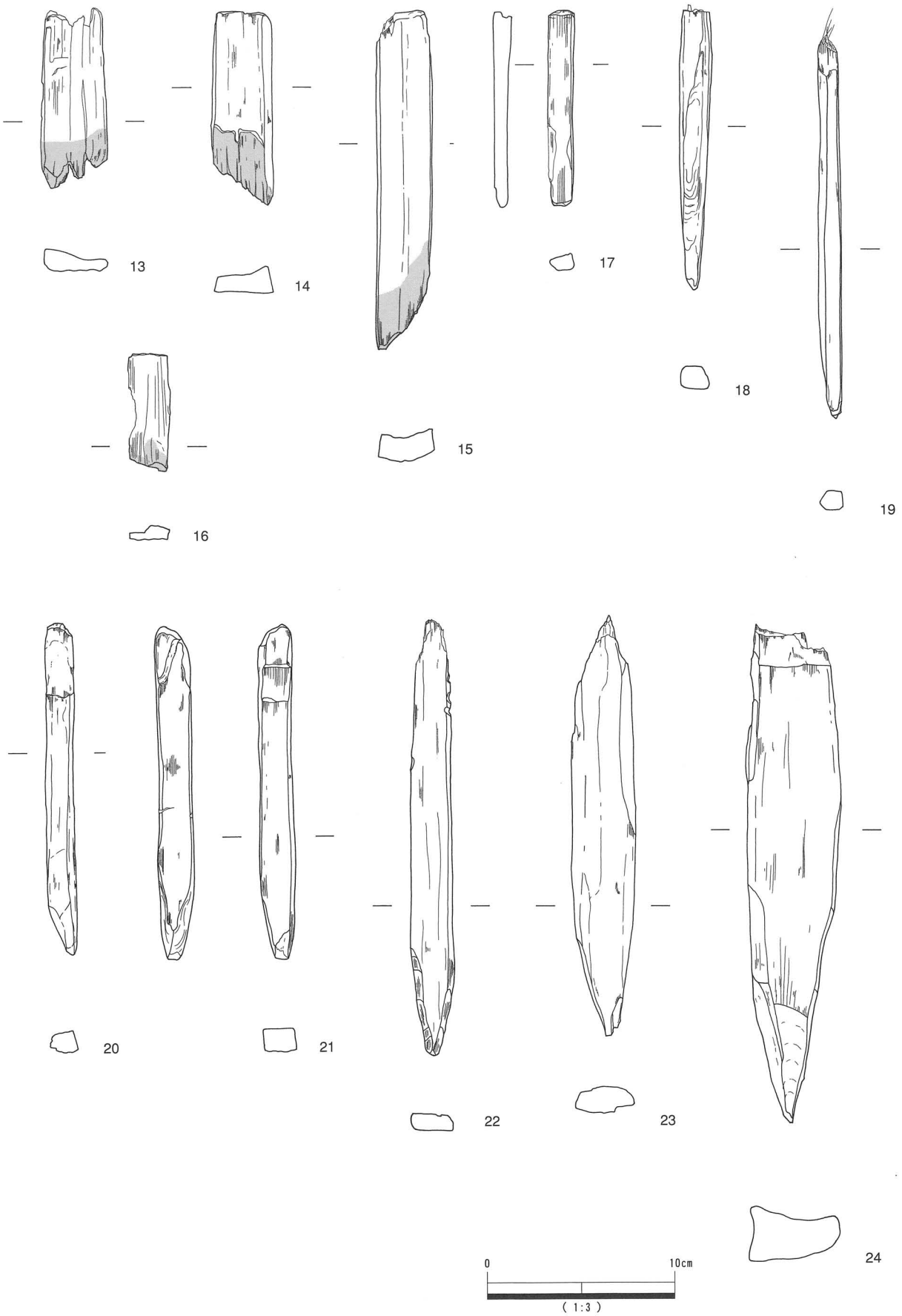


田畑境界杭

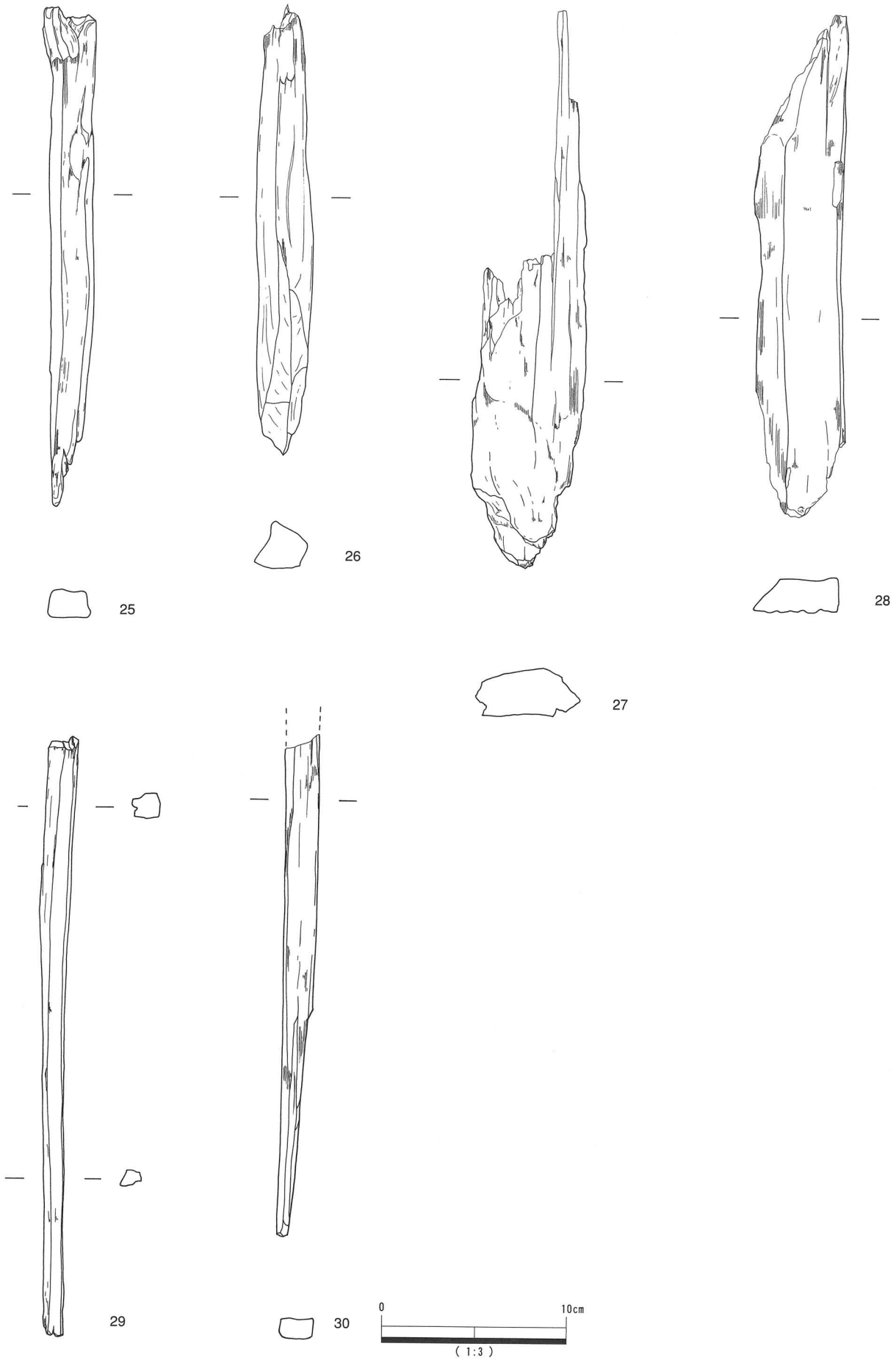
出土位置不明



第50図　田畑境界杭、出土位置不明遺物（1）



第51図　出土位置不明遺物（2）



第52図　出土位置不明遺物（3）

第2表　平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表（1）

1号住居跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
37	1	土師器 坏	橙褐色	赤・白粒	ロクロなで 下半ヘラ	ロクロなで	糸切り後周辺ヘラ	12.5	4.1	4.1	90%	95、97、 99、101	体部外面煤ける
37	2	土師器 坏	橙褐色	赤・白粒、石英 やや粗い	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで	ヘラ削り	12.2	4.5	4.2	80%	103	墨書＝「日」
37	3	土師器 坏	橙色	白・赤色粒 角閃石、石英	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(12.6)			10%	61	
37	4	土師器 皿	灰褐色	白・赤色粒、石英 角閃石、粗い胎土	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで	糸切り ヘラケズリ	(12.9)	4.3	2.6	50%	62	外面煤ける
37	5	土師器 皿	橙褐色	赤・白粒、石英 小石、粗い	ロクロなで	ロクロなで	糸切り後ケズリ	12.6	?	2.7	100%	51	いびつ
37	6	灰釉陶器 高台付坏	暗灰色	白色粒	ロクロなで	ロクロなで	糸切り 高台貼付け		6.3		底部	102	

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
37	7	カマド構築材	17.9	2.3	0.9	自然木に近い状態。先端は若干細くなる。	杭1
37	8	カマド構築材	12.5	2.3	0.8	先端を薄く加工。中央やや上の幅が若干細くなる。	杭2
37	9	カマド構築材	16.2	2.9	0.8	細長い板状。先端平に加工。上端は破損しているが穿孔の痕跡残る。	杭3
37	10	杭状木製品	(9.1)	1.9	1.3	削りを確認できるのは1面のみで後は丸みを帯びる。	杭9
37	11	杭状木製品	18.2	1.7	1.2	先端4面削り。	杭8
37	12	杭状木製品	15.5	1.6	0.8	細長い板状。先端は破損。	杭7
37	13	斎串状木製品	17.5	2.5	2.2	先端削り1面。	53
37	14	斎串状木製品	15.0	1.9	1.3	先端加工。中央部は磨り減ったように若干細くなる。	73
37	15	斎串状木製品	13.4	2.6	0.9	細長い板状。先端被熱。	23
37	16	不明木製品	(5.6)	2.6	0.9	細長い板の破片。両側縁のみ形状を留める。	140
37	17	不明木製品	13.8	4.5	0.4	薄い板状。	141
38	18	不明木製品	(9.2)	5.2	0.7	両側縁が薄くなる板状。上端から1.5cm下に穿孔。	139
38	19	不明木製品	12.4	4.6	0.8	両側縁は直線的。端部被熱。	15
38	20	不明木製品	(22.0)	6.1	0.7	端部被熱。一部段差あり。	100
38	21	不明木製品	8.3	5.7	4.1	上端は段差が残る。他の面も破損面を除き直線的に加工される。	64

2号住居跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
38	1	土師器 坏	橙色	赤・白粒							口縁部破片	2号住	墨書

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
39	2	斎串状木製品	30.3	1.6	1	先端削り、被熱。完形。	122
39	3	不明木製品	23.9	3.6	2.1	先端は丸みを帯び2cm上にキザミあり。先端被熱。完形。	121
39	4	不明木製品	(19.1)	2.9	0.5	細長い板状。	112
39	5	木片	11.9	2.7	0.6		106
39	6	木片	9.7	1.8	1.2		104
39	7	不明木製品	(6.4)	3.3	0.8	全体被熱。	119

第3表　平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表（2）

3号住居跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
39	1	土師器 坏	薄橙色	白・赤色粒 角閃石、石英	ロクロなで	ロクロなで		(17.0)			10%	184	
39	2	土師器 坏	橙色	白・赤色粒、石英	ロクロなで	ロクロなで		(12.0)				190、191	
39	3	土師器 坏	暗橙色	白・赤粒 角閃石	ロクロなで	ロクロなで					口縁部破片	3住	墨書

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
39	4	カマド構築材	24.8	1.7	1.1	先端細くなる。上端平に加工。完形。	杭25
39	5	カマド構築材	21.6	2.8	0.8	板状で先端は両側縁を削ることで鋭くする。	杭24
39	6	カマド構築材	17.8	1.6	0.6	先端破損。上端は強い力で押されたように若干つぶれている。	杭27
39	7	カマド構築材	32.2	1.6	1.3	断面正方形の棒状。	209
40	8	カマド構築材	29.7	2.6	1.7	先端若干細くなり端は平ら。	207
40	9	カマド構築材	28.1	2.0	1.3	両端加工。先端の方が幅広くなり被熱。完形。	206
40	10	斎串状木製品	20.5	1.7	1.2		195
40	11	杭状木製品	9.9	1.6	1.1	先端被熱か。	杭22
40	12	斎串状木製品	11.4	1.9	1	両端加工。先端被熱。完形。	201
40	13	斎串状木製品	27.7	2.3	1.3	先端被熱。完形。	187
40	14	不明木製品	(5.6)	(6.8)	1.4	先端は徐々に薄くなり鋭くなる。薄くなった部分が被熱。	189

4号住居跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
41	1	土師器 坏	暗褐色	赤・白粒、石英	ロクロなで 底部立ち上がりケズリ	ロクロなで	糸切り後 周辺ケズリ	12.2	3.7	3.8	100%	235	
41	2	土師器 坏	暗橙色	赤・白粒、石英	ロクロなで 下半ヘラ	ロクロなで	ヘラ	12.3	3.9	3.9	80%	247	
41	3	土師器 坏	灰褐色	白・赤色粒	ロクロなで	ロクロなで		(14.0)			口縁部破片	4住	
41	4	土師器 坏	橙色	赤・白粒、石英	ロクロ 底部立ち上がりなで	ロクロなで	糸切り後 周辺ヘラ削り	(14.7)	6.9	4.6	50%	244	
41	5	末焼成の鉢	灰褐色	小石を含む以外は緻密 白・赤色粒は含まない	ロクロなで ロクロの痕跡残る	ロクロなで	糸切り後 ヘラ削り	(26.2)	(11.1)	10.1	60%	245	

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
41	6	カマド構築材	43.8	2.8	2.2	先端4面削り。上端わずかに被熱。完形。	杭20
41	7	カマド構築材	52.1	3.7	2.2	先端5面削り。上端なめらかに収束。完形。	杭19
41	8	カマド構築材	35.2	3.0	2.0	先端は両側縁を削る。上端は被熱。	杭32
41	9	カマド構築材	32.2	3.7	2.2	先端破損。上端被熱。	杭31
41	10	斎串状木製品	32.2	2.3	0.7	先端被熱。若干圭頭状のようにも見える。	253
41	11	不明木製品	36.5	11.3	5.5	縁辺を被熱。	236
42	12	杭状木製品	18.3	2.1	1.0	先端4面削り。	杭34
42	13	杭状木製品	11.8	2.0	0.9	上端2cm下にキザミあり。	杭33
42	14	斎串状木製品	17.9	1.5	0.6		246
42	15	斎串状木製品	11.1	1.8	1.0	先端加工・被熱。	248
42	16	斎串状木製品	18.0	2.7	1.6	先端はなめらかに鋭く。大部分が被熱	243

第4表　平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表（3）

4号住居跡

図	番号	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	特徴	注記番号
42	17	不明木製品	14.2	5.3	2.2	大部分被熱。	249
42	18	不明木製品	17.1	3.8	2.7	両端被熱。中央部が被熱痕ないのは被熱後に削られているため。	238
42	19	不明木製品	8.8	3.5	1.7	先端被熱。	234
42	20	不明木製品	9.9	2.9	1.7		239
42	21	曲物	φ=14.8		0.4	底板。	240,241

5号住居跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴 体外	体内	底部	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	注記番号	備考
43	1	土師器 坏	橙色	赤・白粒、角閃石	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで	前面ヘラ削り	12.9	4.7	2.8	80%	5住	墨書=「日」の異体字
43	2	土師器 皿	灰褐色	白・赤色粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで		(13.6)	(5.0)	(2.4)	口縁部破片	166	表面粗い

図	番号	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	特徴	注記番号
43	3	カマド構築材	18.6	2.5	1.2	細長い板状。先端両側縁を削り鋭くする。上端3㎝下にキザミあり。	杭18
43	4	斎串状木製品	11.3	1.8	1.3	両端被熱。先端は段差を作るように加工。上端は徐々に細くなる。完形。	169
43	5	不明木製品	15.3	2.5	0.8	上端2.5㎝下に穿孔。完形。	154

6号住居跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴 体外	体内	底部	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	注記番号	備考
43	1	土師器 坏	暗橙色	赤・白色粒、石英	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで	ヘラケズリ	(16.4)			20%	6住	
43	2	土師器 坏	内　黒色 外　暗橙色	白・赤粒	ロクロなで (陵残る)	ロクロなで		(14.0)			口縁部破片	6住	墨書
43	3	土師器 坏	黒色	白色粒	ロクロなで	ロクロなで		(13.2)	(6.2)	(2.9)	口縁部破片	6住	
43	4	土師器 坏	暗橙色	赤・白粒、石英	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(13.0)	(4.2)	3.9	20%	6住	
43	5	土師器 坏	橙色	赤・白粒、小石	ロクロなで 凹凸が明瞭に出ている	ロクロなで ロクロなで	ヘラ削り	12.0	3.6	4.5	70%	6住	いびつ
43	6	土師器 皿	橙色	赤・白粒、石英 やや粗い、小石	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(14.4)			10%	212	刻書=「弥」
43	7	土師器 坏	赤橙色	赤・白粒 赤多い	ロクロなで 雑	ロクロなで		(14.0)	(3.4)	2.9	30%	220	
43	8	土師器 羽釜	橙色	白色粒、石英、角閃石							羽の破片	6住	螺旋の文様あり
43	9	灰釉陶器 壺	暗灰色	白色粒 1cm以下の小石	ロクロなで 胴下半はケズリ	ロクロ痕顕著		胴部径 (24.0㎝)			胴部破片	228	

図	番号	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	特徴	注記番号
44	10	杭状木製品	19.1	2.3	1.3	先端削り。	杭28
44	11	杭状木製品	28.9	2.2	2.2	先端削り。	杭29
44	12	不明木製品	4.4	1	0.4	端部被熱。	
44	13	板材	45.4	17.5	2.6	正方形の板を半分に割ったよう。3×3㎝の方形の孔が2箇所開く。棚板か。	214
44	14	柱材	(45.2)		φ=10	自然木の底面を平に加工する。	216

第5表　平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表（4）

7号住居跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
44	1	土師器 坏	赤橙色	白・赤粒	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで	周辺ケズリ	(13.8)	(4.5)	4.8	10%	7住	刻書＝「弥」
44	2	土師器 坏	赤橙色	白・赤粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで					口縁部破片	7住	刻書＝「日」？
44	3	灰釉陶器 坏	暗灰色	白・黒色粒	ロクロなで	ロクロなで		(14.0)			口縁部破片	7住	
44	4	土師器 坏	灰褐色	白赤色粗ロクロなで		ロクロなで		(12.8)			口縁部破片	7住	
44	5	須恵器 壺	黒灰色	白色粒、角閃石？	ロクロ	ロクロ			(8.7)		20%	7住	表面、内面に漆付着

2号土坑

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
45	1	土師器 坏	赤橙色	白・赤色粒、小石、石英	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(12.8)	(3.0)	(3.9)	10%	89	
45	2	土師器 甕	赤橙色	雲母、白色粒、赤色粒	縦ハケ	横ハケ		(32.0)			口縁部破片	86、87	
45	3	土師器 甕	赤橙色	金雲母、石英、長石	なで	体部は横ハケ		(29.2)			口縁部破片	89	

井戸跡

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
45	1	土師器 坏	橙色	白・赤色粒	ロクロなで	ロクロなで		(14.0)			10%	井戸中層	内外面とも仕上げ雑
45	2	土師器 坏	橙褐色	赤・白粒、石英	ロクロなで 下半ヘラ	ロクロなで	糸切り	12.3	5.4	4	100%	井戸1	墨書＝「主」 出土位置は井戸枠の外側
45	3	土師器 坏	黒色	赤・白粒、石英	ロクロなで 下半ヘラ	ロクロなで	糸切り後ヘラ	11.7	4.0	4.1	100%	井戸中層	

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
45	4	不明木製品	7.0	2.0	0.8	この大きさで完結している。完形。	井戸中層
45	5	不明木製品	15.4	5.7	0.5	薄い板状。先端は矧ぎ割っている。完形。	井戸17
45	6	不明木製品	15.4	5.4	0.5	薄い板状。先端は矧ぎ割っている。完形。	井戸16
46	7	不明木製品	20.0	3.4	1.5	両端加工。完形。	井戸1
46	8	不明木製品	21.3	2.9	1.4	両端加工。完形。	井戸2
46	9	不明木製品	26.1	4.1	1.8	両端加工。完形。	井戸3
46	10	不明木製品	39.5	4.3	1.6	先端6cmは若干細くなる。	井戸11
46	11	不明木製品	61.5	3.5	2.3	上端4cm下に帯状の窪みが残る。	井戸46
46	12	棒状木製品	103.2	4.5	4.7	断面円形の木の両端を削り断面方形のホゾを作り出している。	24
46	13	棒状木製品	(88.2)	2.6		自然木を利用し一部切込みを入れている。	36
46	14	不明木製品	(58.0)	7.3	1.7	板状で幅の狭くなる端部に径＝1.3cmの孔を開ける。両側縁にはキザミが複数施される。	26
46	15	板材	45.6	23.5	1.1	長方形の外周を1辺を除き1段低く削っている。穿孔×7。膳の転用か。表面には擦ったような痕跡あり。	47
46	16	角材状木製品	22.3	4.2	4.2	角材の端部がホゾ状に加工されている。	57
47	17	板材	(95.0)	8.8	1.4	先端矧ぎ割り。穿孔×4。	32
47	18	板材	(64.2)	6.5	0.7	先端削り。側縁に方形の削り。穿孔×2。	33
47	19	板材	(79.5)	12.0	1.0	先端剥ぎ割り。穿孔×4　(2対)。	34

第6表　平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表（5）

井戸跡

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
47	20	板材	(75.5)	10.8	1.4	先端矧ぎ割り。穿孔×2。	52
47	21	板材	(86.2)	19.8	1.6	先端矧ぎ割り。穿孔×4（2対）。	35
47	22	板材	(79.3)	14.5	1.8	先端矧ぎ割り。	13
47	23	板材	(80.2)	9.7	1.2	先端平に削る。	28
48	24	板材	(80.7)	13.0	1.6	先端矧ぎ割り。	21
48	25	板材	(95.3)	16.6	1.5	先端近く中央に穿孔×1。	25
48	26	板材	(93.4)	12.4	1.2	先端矧ぎ割り。	27
48	27	板材	(99.7)	10.4	1.3	先端加工。	29
48	28	板材	(113.3)	11.8	2.0	ホゾ穴状の方形の穴を2箇所。穿孔×2。	12
48	29	板材	(95.5)	16.5	2.8	先端平に削る。	40
49	30	角材状木製品	(70.7)	8.0	2.0	両端を4×8、4×20cm以上切り取って段をつける。	49
49	31	角材状木製品	90.6	6.0	3.0	両端を2.5×6.5、2.5×7.0cm切り取って段をつける。穿孔×3。キザミあり。完形。	53
49	32	角材状木製品	(60.4)	6.8	2.1	5×22cmを切り取り段をつける。	45
49	33	棒状木製品	(64.2)	4.0	2.0	先端は削りにより鋭くなる。	15
49	34	棒状木製品	90.9	6.6	5.2	先端杭状に鋭くなる。ホゾ穴が中央やや下に開く。	19
49	35	棒状木製品	(61.7)	7.7	5.0	ホゾ穴×1。先端は徐々に細くなる。	54
49	36	角材状木製品	—	9.6	5.2	角材状で上端2面を削る。ホゾ穴2箇所開く。ホゾ穴は前後から分けて穴を開けたようで中心部で最も狭くなる。	18

田畑境界杭

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
50	1	杭	26.4	3.4	3.3	1面削り。	1-1
50	2	杭	24.8	2.3	2.3	3面削り。	1-2
50	3	杭	34.4	4.7	4.9		2
50	4	杭	19.9	2.9	3.1	4面削り。	3
50	5	杭	29.7	5.0	4.1	3面削り。	4
50	6	杭	28.6	2.4	1.5		5
50	7	杭	22.9	4.1	2.8		6
50	8	杭	17.1	3.0	2.7	4面削り。	7
50	9	杭	21.4	3.3	2.5	1面削り。	8
50	10	杭	31.8	3.6	2.8	4面削り。	10
50	11	杭	22.1	5.7	5.2	2面削り。	9

第7表　平田宮第2遺跡3次調査出土遺物観察表（6）

出土位置不明

図	番号	器種	色調	胎土	整形技法・特徴			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
					体外	体内	底部	口径	底径	器高			
50	1	土師器 坏	黒褐色	白粒（赤粒はわずか） 角閃石	ロクロなで	ロクロなで	糸切り後なで	(16.1)	4.7	4.9	50%	3	底部は強く押したのかくぼんでいる。
50	2	土師器 坏	橙色	白・赤色粒、角閃石	ロクロなで 下半ケズリ	ロクロなで		(12.2)			20%	252	
50	3	土師器 坏	橙色	白・赤色粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで （口唇直下強いなで）		(13.5)			口縁部破片	表採	墨書
50	4	土師器 坏	橙色	白・赤色粒、角閃石	ロクロなで	ロクロなで （口唇直下強いなで）		(12.0)			口縁部破片	表採	墨書
50	5	灰釉陶器 坏	暗灰色	白色粒	ロクロなで 下半ヘラ調整	ロクロなで		(12.0)			口縁部破片	26、表採	
50	6	土師器 坏	赤褐色	赤・白粒、角閃石	ロクロなで 立ち上りケズリ	ロクロなで	糸切り後 周辺削り	(12.7)	(4.0)	2.1	30%	表採	墨書＝「主」
50	7	土師器 坏	暗橙色	赤・白粒、角閃石	ロクロなで 立ち上り部分ケズリ	ロクロなで	ヘラ削り		(3.8)		底部破片	表採	墨書＝「田」
50	8	土師器 坏	橙色	白・赤粒 長石	ケズリ						体部下半破片	表採	墨書
50	9	土師器 坏	薄橙色	白・赤粒 角閃石	ロクロなで	ロクロなで					体部下半破片	表採	墨書
50	10	須恵器 甕	暗灰色	白色粒	ロクロへらなで	ロクロなで	へら調整		(10.0)		底部破片	表採	
50	11	灰釉陶器 壺	暗灰色	白色粒、黒色粒	ロクロなで	ロクロなで		(5.6)			頸部破片	24	頸部径（3.4）
50	12	灰釉陶器 壺	暗灰色	混入物のほとんどない緻密な胎土	ロクロなで施釉	ロクロなで					頸部破片	表採	頸部径（4.0）

図	番号	器種	法量(cm)			特徴	注記番号
			長さ	幅	厚さ		
51	13	不明木製品	9.6	3.5	1.2	板状。先端斜めに削り被熱。	11
51	14	不明木製品	10.3	3.1	1.4	板状。先端斜めに削り被熱。完形。	13
51	15	不明木製品	18.1	2.9	1.3	板状。先端斜めに削り被熱。完形。	5
51	16	不明木製品	6.3	2.1	0.8	先端被熱。	32
51	17	斎串状木製品	10.4	1.3	1.0	上端段差を持つ。先端に向け薄くなる。完形。	
51	18	斎串状木製品	14.9	1.7	1.2	先端鋭利。	155
51	19	斎串状木製品	20.2	1.2	1.0	先端鋭利。	7
51	20	斎串状木製品	17.8	1.6	1.2	先端鋭利。完形。	10
51	21	斎串状木製品	18.7	1.9	1.3	先端鋭利。上端から3cmに窪み。完形。	6
51	22	斎串状木製品	(23.2)	2.3	0.9	先端は両側縁を削り鋭利に。上端から5cm以内の両側縁にキザミあり。	12
51	23	斎串状木製品	(22.5)	3.3	1.4	両端を鋭利に加工。	9
51	24	杭？	(26.7)	5.0	2.9	先端4面削り。	8
52	25	斎串状木製品	(26.9)	2.3	1.5	先端鋭利。	3
52	26	斎串状木製品	(24.5)	3.0	2.6	先端鋭利。2面削り。	21
52	27	不明木製品	(30.0)	5.9	2.5		4
52	28	不明木製品	(27.1)	4.6	1.8	側縁が斜めに削られる。	185
52	29	斎串状木製品	32.1	1.6	1.4	上端に段をもつ。	209
52	30	斎串状木製品	(26.9)	1.9	1.1	先端は徐々に厚みを減じて鋭くなる。	2

平田宮第２遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

本報告では、平田宮第２遺跡２・３次調査の発掘調査成果から課題とされた、平安時代の古環境（植生）推定、水田跡および畑跡における栽培植物及び植物利用の検証を目的として自然科学分析調査を実施する。

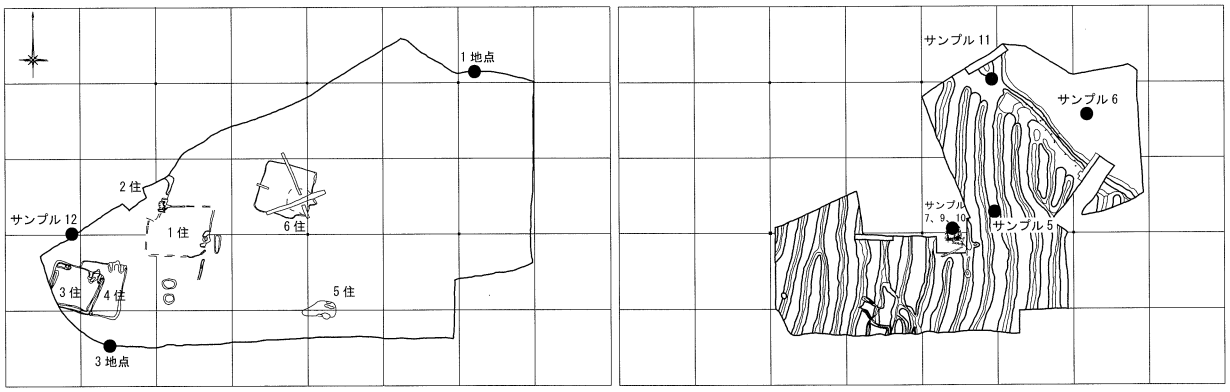
１．試料

試料は、土壌試料および遺構等から出土した木製品、自然木などからなる。以下に、各試料の概要を示す。また、分析対象試料および分析項目を表８に、試料採取地点を図53に示す。

表８．分析試料及び分析項目一覧

遺構名／地点名	試料名	試料の質	分析項目*					備考
			P	PO	灰像	微細	W	
１地点	サンプル１	土壌	1	1				畝検出面直下
１地点	サンプル２	土壌	1	1				
３地点	サンプル３	土壌	1	1				畝間
３地点	サンプル４	土壌	1	1				畝
畑跡	サンプル５	土壌	1	1				畝
水田跡	サンプル６	土壌	1	1				
井戸跡	サンプル７	土壌	1	1		1		第36図第13層
１号住	カマド炭化物層	土壌（炭化物混じり）			1	1		
３号住	カマド炭化物層	土壌（炭化物混じり）			1	1		
４号住	カマド炭化物層	土壌（炭化物混じり）			1	1		
６号住	カマド炭化物層	土壌（炭化物混じり）			1	1		
１号不明遺構 カマド？炭化物	サンプル８	土壌（炭化物混じり）			1	1		２次調査区
井戸材	サンプル９	木材（土壌混じり）					1	第35図
井戸材	サンプル10	木材（土壌混じり）					1	第35図
畦上自然木	サンプル11	木材					1	第34図　№12
自然木	サンプル12	木材					1	第13図
１号住	杭材他	生材					11	
３号住	杭材他	生材					7	
４号住	杭材他	生材					8	
６号住	杭材他	生材					4	
田畑境界杭	杭材	生材					2	
杭列	杭材	生材					4	２次調査区　第８図
井戸	板材他	生材					14	

＊P：花粉分析、PO：植物珪酸体分析、灰像：灰像分析、微細：微細物分析、W：樹種同定



第53図　分析試料採取地点

（１）土壌試料

１）１地点

１地点は、調査区北東隅に相当する。

試料は、灰色を呈する細粒砂～シルト最上部（サンプル１）、灰色を呈する粘土～シルト（サンプル２）より採取している。

２）３地点

３地点は、調査区南壁西側に相当する。

試料は、畝および畝間に相当する灰色の砂混じりシルト～極細粒砂上部よりサンプル３、最下位の粘土～シルトよりサンプル４を採取している。

３）水田跡、畑跡

試料は、調査担当者によって水田・畑跡の任意の地点から採取された土壌サンプル５、サンプル６である。

４）住居跡カマド炭化物、井戸覆土

試料は、住居跡カマド（１・３・４・６号住）に認められた炭化物混じり土壌、２次調査区の１号不明遺構より採取された炭化物混じり土壌（サンプル８）、井戸跡覆土13層に相当する土壌（サンプル７）である。

（２）木製品、自然木

１）木製品

試料は、住居跡内から出土した杭材や木製品、井戸跡の構築部材、２次調査区の杭列を構成する杭材、３次調査区の水田跡と畑跡の境界より検出された杭列を構成する杭材の計52点である。これらの試料については、加工方法等に関わる情報を得るため、試料採取とともに木取観察を合せて実施している。

２）自然木

試料は、調査区西側北壁に認められた自然木（サンプル12）と畦上より出土した自然木（№12）の２点である。

３．結果

（１）花粉分析

結果を表９、図54に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を＋で表示するに留めている。以下に、各地点の検出状況を記す。

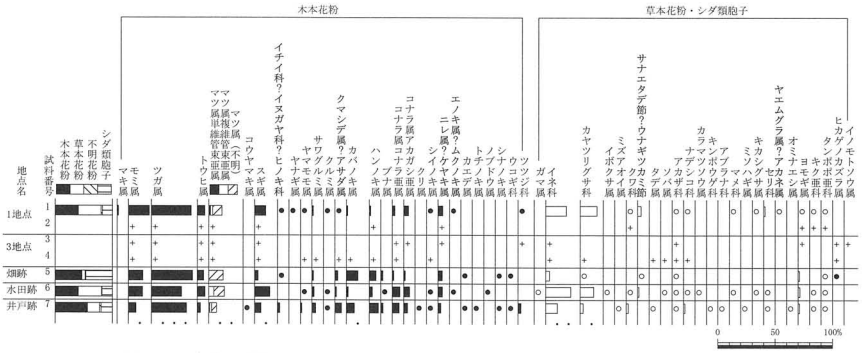


図54. 花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

１）１地点

サンプル２（畝）は、花粉化石の産出状況は不良である。産出した種類は、木本花粉ではモミ属やツガ属、マツ属等が、草本花粉ではヨモギ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節、キク亜科、タンポポ亜科が僅かに検出されるのみである。

サンプル１（畝直下）は、花粉化石が豊富に産出するが、保存状態はやや不良であり、花粉外膜が破損・溶解しているものが比較的多い。花粉化石群集組成は、木本花粉と草本花粉が、同程度の割合で産出する。木本花粉は、ツガ属が最も多く産出し、モミ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科やカヤツリグサ科が多産し、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属、タンポポ亜科等が検出される。

２）３地点

サンプル４（畝）、サンプル３（畝間）は、いずれも花粉化石の産出状況は悪く、保存状態も不良である。産出する花粉化石群集は類似し、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、アカガシ亜属等が、草本花粉ではイネ科、タデ属、アカザ科等が検出される。サンプル４からは、栽培種であるソバ属に由来する花粉もわずかながら認められる。

・畑跡

サンプル５（畝）は、花粉化石が産出するが、保存状態はやや不良である。花粉化石群集組成は、木本花粉の割合が高く、シダ類胞子も多産する。木本花粉では、ツガ属が最も多く産出し、モミ属、トウヒ属、マツ属、カバノキ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉は少ないながらも、イネ科、ヨモギ属等が認められる。

・水田跡

サンプル６（水田面）は、花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。花粉化石群集組成は、木本花粉と草本花

表９．花粉分析結果

種　類	１地点		３地点		畑跡	水田跡	井戸跡
サンプルNo.	1	2	3	4	5	6	7
木本花粉							
マキ属	3	-	-	-	-	-	-
モミ属	47	6	3	12	20	38	16
ツガ属	90	16	5	23	57	81	75
トウヒ属	17	3	1	2	9	21	7
マツ属単維管束亜属	4	-	-	-	-	-	2
マツ属複維管束亜属	5	-	-	-	-	14	4
マツ属（不明）	21	13	7	15	20	28	11
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	1
スギ属	25	1	4	3	5	41	14
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	-	-	-	1	-	5
ヤナギ属	1	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	2	-	-	2	-	2	3
サワグルミ属	3	-	-	1	2	6	8
クルミ属	1	-	-	-	-	3	1
クマシデ属－アサダ属	1	-	-	1	4	4	14
カバノキ属	3	-	-	1	16	5	17
ハンノキ属	3	1	-	1	9	8	19
ブナ属	-	-	-	-	3	3	5
コナラ属コナラ亜属	6	-	3	2	2	21	15
コナラ属アカガシ亜属	11	-	1	-	2	16	8
クリ属	-	-	-	-	-	-	1
シイノキ属	1	-	-	1	-	3	2
ニレ属－ケヤキ属	11	2	1	-	6	12	6
エノキ属－ムクノキ属	1	-	-	-	-	1	-
カエデ属	-	-	-	-	1	-	1
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	1
ノブドウ属	-	-	-	-	-	1	-
シナノキ属	-	-	-	-	1	-	1
ウコギ科	-	-	-	-	1	-	1
ツツジ科	2	-	1	-	-	-	6
草本花粉							
ガマ属	-	-	-	-	-	1	-
イネ科	113	-	10	26	11	165	43
カヤツリグサ科	92	-	-	1	1	89	11
イボクサ属	-	-	-	-	-	2	-
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	3
クワ科	2	1	-	-	-	4	7
サナエタデ節－ウナギツカミ節	19	-	-	-	1	8	-
タデ属	-	-	-	5	-	-	1
ソバ属	-	-	-	1	-	1	-
アカザ科	3	-	1	7	1	2	4
ナデシコ科	6	-	-	1	-	4	5
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	1	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	-	-	1
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	2
マメ科	1	-	-	-	-	1	-
ミソハギ属	-	-	-	-	-	-	1
キカシグサ属	1	-	-	-	-	3	-
セリ科	7	-	-	-	-	7	3
ヤエムグラ属－アカネ属	1	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	4	2	1	-	4	12	5
キク亜科	1	1	-	-	-	3	3
タンポポ亜科	4	1	-	-	1	6	2
不明花粉	15	1	1	3	4	6	11
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	-	-	1	1	2	-	-
イノモトソウ属	-	-	1	-	-	-	-
他のシダ類胞子	112	128	25	75	156	139	86
合　計							
木本花粉	259	42	26	64	159	308	244
草本花粉	254	5	12	41	19	309	92
不明花粉	15	1	1	3	4	6	11
シダ類胞子	112	128	27	76	158	139	86
総計（不明を除く）	625	175	65	181	336	756	422

粉が、同程度の割合で産出する。木本花粉では、ツガ属が多産し、モミ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属を伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多く産出し、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、セリ科、ヨモギ属、タンポポ亜科等が認められる。わずかではあるが、ガマ属、イボクサ属等の水湿地生植物の花粉や、ソバ属の花粉も検出される。

・井戸跡

サンプル７は、花粉化石の産出状況・保存状態とも、比較的良好である。木本花粉では、ツガ属が多産し、モミ属、マツ属、スギ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属等が認められる。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、クワ科、ナデシコ科、ヨモギ属等が認められる。

（２）植物珪酸体分析

結果を表10、図55に示す。各資料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど保存状態は不良である。以下に各地点の産出状況を示す。

１）１地点

サンプル２は、植物珪酸体含量は1,400個／g程度と少ない。ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属等が検出される。栽培植物では、栽培植物のイネ属の頴珪酸体が僅かに検出されるのみである。

サンプル１は、植物珪酸体含量は約4,400個／gである。栽培植物では、イネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、籾殻に形成される頴珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体は約700個／g、機動細胞珪酸体は約800個／g、頴珪酸体は100個／g未満である。この他の分類群は、サンプル２と同様の組成を示す。

２）３地点

植物珪酸体含量は、畝間に相当するサンプル３は約9,400個／g、畝に相当するサンプル４は約6,700個／gである。２試料とも、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、頴珪酸体が検出される。イネ属の植物珪酸体含量は、サンプル３の短細胞珪酸体は約3,100個／g、機動細胞珪酸体は約1,400個／g、頴珪酸体は約1,100個／g、サンプル４の短細胞珪酸体は約1,000個／g、機動細胞珪酸体は約1，200個／g、頴珪酸体は100個／g未満である。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科等が検出される。

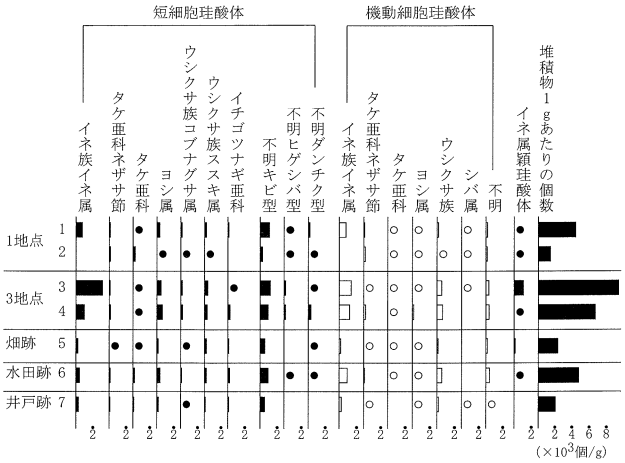


図55. 植物珪酸体含量
堆積物１ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g未満の種類を示す。

３）畑跡

サンプル５は、植物珪酸体含量は約2，400個／gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、頴珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体は200個／g程度、頴珪酸体は約100個／gである。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科等が検出される。

４）水田跡

サンプル６は、植物珪酸体含量は約4,800個／gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、頴珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体は約400個／g、機動細胞珪酸体は約900個／g、頴珪酸体は100個／g未満である。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科等が検出される。

５）井戸跡

サンプル７は、植物珪酸体含量は約2,000個／gである。栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。これらの植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体はそれぞれ300個／g程度である。この他の分類群では、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科等が検出される。

表10．植物珪酸体含量

（個／g）

種　　類	1地点		3地点		畑跡	水田跡	井戸跡
サンプルNo.	1	2	3	4	5	6	7
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	700	-	3,100	1,000	200	400	300
タケ亜科ネザサ節	100	100	100	200	＜100	100	100
タケ亜科	＜100	300	＜100	＜100	＜100	200	100
ヨシ属	300	＜100	500	600	200	400	200
ウシクサ族コブナグサ属	200	＜100	200	200	＜100	100	＜100
ウシクサ族ススキ属	200	＜100	400	300	200	200	100
イチゴツナギ亜科	100	-	＜100	300	100	200	100
不明キビ型	1,100	300	1,200	900	500	900	500
不明ヒゲシバ型	＜100	＜100	200	200	-	＜100	-
不明ダンチク型	200	＜100	＜100	300	＜100	＜100	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	800	-	1,400	1,200	200	900	300
タケ亜科ネザサ節	100	200	＜100	200	＜100	100	＜100
タケ亜科	＜100	＜100	＜100	＜100	＜100	＜100	-
ヨシ属	＜100	＜100	＜100	200	＜100	＜100	-
ウシクサ族	200	＜100	500	600	100	500	200
シバ属	＜100	＜100	＜100	-	-	-	＜100
不明	200	100	300	400	200	400	＜100
珪化組織片							
イネ属穎珪酸体	＜100	＜100	1,100	＜100	100	＜100	-
合　　計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,100	1,000	5,800	4,100	1,600	2,700	1,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1,300	500	2,500	2,600	600	2,000	600
珪化組織片	0	0	1,100	0	100	100	0
総　計	4,400	1,400	9,400	6,700	2,400	4,800	2,000

1）各運類群の植物珪酸体含量は、10の位で丸め100単位としている。合計は、丸める前の数字を合計した後、100単位としている。
2）「＜100」は、100個／g未満を示す。

（3）灰像分析

結果を表11に示す。各住居跡カマドの炭化物層および2次調査区1号不明遺構（カマド？炭化物のサンプル8）からは、いずれもイネ属に由来する珪化組織片が検出され、特に短細胞列の産出が顕著である。また、3号住カマド炭化物は、籾殻に形成される穎珪酸体の産出が顕著である。この他に、ヨシ属やススキ属などの珪化組織片が検出される。

表11．灰像分析結果

種　　類	1号住カマド炭化物層	3号住カマド炭化物層	4号住カマド炭化物層	6号住カマド炭化物層	（2次調査区）カマド？炭化物1
検出された種類					
イネ属穎珪酸体	＋	＋＋＋	＋	＋	＋
イネ属短細胞列	＋＋＋	＋＋＋	＋＋＋	＋＋＋	＋＋＋
イネ属機動細胞列	－	＋	＋	＋＋	＋
ヨシ属短細胞列	＋	＋	＋	＋＋	＋
ススキ属短細胞列	＋	＋	－	－	－
ウシクサ族機動細胞列	－	－	－	＋	－
想定される種類	稲籾殻，稲藁，ヨシ属，ススキ属	稲籾殻，稲藁，ヨシ属，ススキ属	稲籾殻，稲藁，ヨシ属	稲籾殻，稲藁，ヨシ属	稲籾殻，稲藁，ヨシ属

凡例：＋＋＋（非常に多い），＋＋（多い），＋（検出），－（非検出）

（4）微細物分析

結果を表12に示す。住居跡カマド炭化物層、不明遺構炭化物（カマド？炭化物）、井戸跡覆土からは、被子植物の木本1分類群1個、草本37分類群3,929個、計3,930個の種実と部位・種類不明の種実6個、木材、炭化材、木の芽、昆虫、土器が検出された。

検出された種実のうち、栽培植物は、イネ胚乳38個、穎2,415個、アワ－ヒエ2個、ヒエ近似種4個、アサ21個、マメ類5個、エゴマ11個、ナス科（栽培種に由来する可能性がある一部の大型種子）8個、ヒョウタン類3個の計2,507個である。

1）検出状況

・井戸跡（サンプル7）

草本17分類群（イネ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、チドメグサ属、エゴマ、ナス科、メナモミ属）601個の種実が検出され、このうちナデシコ科が419個と多い。この他に、不明種実5個、炭化材8個（0.01g未満）、多量の昆虫（2cc）が検出された。このうち、栽培植物は、イネの穎（11個）、エゴマ（1個）が確認された。

・1号住カマド炭化物層

木本1分類群（ブドウ属）1個、草本20分類群（オモダカ科、イネ、エノコログサ属、ヒエ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ツユクサ、イボクサ、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、スベリヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、クサネム近似種、マメ類、サクラソウ科、イヌコウジュ属、エゴマ）567個、計568個の種実と、炭化材2.5cc（0.3g）、木材7個、木の芽2個、昆虫1個、土器1個が検出された。このうち、栽培植物は、イネの胚乳（5個）・穎（287個）、ヒエ近似種（1個）、マメ類（1個）、エゴマ（1個）が確認された。

・３号住カマド炭化物層

草本22分類群（ヘラオモダカ、イネ、エノコログサ属、アワ－ヒエ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、アサ、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、クサネム近似種、マメ類、セリ科、イヌコウジュ属、エゴマ、ナス科（大型）、ナス科、ヒョウタン類、メナモミ属）1,264個の種実と、炭化材４cc（0.7g）が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（15個）・穎（856個）、アワ－ヒエ（１個）、アサ（21個）、マメ類（２個）、エゴマ（７個）、ナス科（大型）（８個）、ヒョウタン類（３個）が確認された。

・４号住カマド炭化物層

草本11分類群（イネ、アワ－ヒエ、ヒエ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、マメ類、マメ科、ナス科）720個の種実と、炭化材15cc（2.8g）が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（４個）・穎（653個）、アワ－ヒエ（１個）、ヒエ近似種（３個）、マメ類（２個）が確認された。

・６号住カマド炭化物層

草本12分類群（ヘラオモダカ、オモダカ属、イネ、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、クサネム近似種、セリ科、タウコギ）737個の種実と不明種実１個、炭化材10cc（2.0g）、木材42個、昆虫８個が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（13個）、穎（583個）が確認された。

・１号不明遺構カマド？炭化物　サンプル８

草本５分類群（イネ、イネ科、アカザ科、エゴマ、ナス科）40個の種実と炭化材５cc（1.5g）、木材４個が検出された。このうち、栽培植物は、イネ胚乳（１個）・穎（25個）、エゴマ（２個）が確認された。

２）種実の記載

種実の状態は比較的良好で、イネ胚乳や穎の一部、アワ－ヒエ、ヒエ近似種、マメ類等の栽培植物と、イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部、マメ科の種子については炭化が認められた。以下に、本分析で得られた種実の形態的特徴等を、木本、草本の順に記す。

〈木本〉

・ブドウ属（*Vitis*）　ブドウ科

種子が検出された。灰褐色、長さ４mm、径３mm程度の広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には長さ２mm程度の楕円形の深く窪んだ孔が存在する。背面にはさじ状の凹みがある。種皮は薄く硬く、表面は粗面。

〈草本〉

・ヘラオモダカ（*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche）　オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡灰褐色、長さ２mm、幅1.5mm程度の楕円形で偏平、基部は切形。背部に深い縦溝が１本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、径１mm程度の倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・オモダカ属（*Sagittaria*）　オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、径2.5mm程度の歪な倒卵形で偏平。果皮は薄く翼状。翼の外形は欠損する。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けてみられる。種子は茶褐色、径１mm程度の倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・オモダカ科（Alismataceae）

種子が検出された。淡-黒褐色、長さ1.5mm、幅0.8mm程度の倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳と穎（果）が検出された。穎（果）は淡-茶褐色、胚乳と一部の穎は炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ3.5-５mm、幅2.5-3.5mm、厚さ１-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、２-３本の隆条が縦列する。表面に穎が付着した個体もみられる。穎は長さ６-7.5mm、幅３-４mm、厚さ１-２mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と１対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は５脈、内穎は３脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

・エノコログサ属（*Setaria*）　イネ科

果実が検出された。黄褐色、長さ２-2.5mm、径1.5mm程度の半狭卵体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・アワ－ヒエ（*Setaria itarica* (L.) P.Beauv.- *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno）　イネ科エノコログサ属－ヒエ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、径1.2mm程度のやや偏平な広卵体で、背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上

表12. 微細物分析結果

分類群(●：栽培植物)	部位	状態		井戸跡 サンプル7	1号住 カマド 炭化物層	3号住 カマド 炭化物層	4号住 カマド 炭化物層	6号住 カマド 炭化物層	2次調査区 カマド？ 炭化物1
木本									
ブドウ属	種子			-	1	-	-	-	-
草本									
ヘラオモダカ	果実			-	-	2	-	2	-
オモダカ属	果実			-	-	-	-	3	-
オモダカ科	種子			-	1	-	-	-	-
● イネ	胚乳	炭化	完形	-	2	8	1	7	1
			破片	-	3	7	3	6	-
	穎		完形	1	5	-	-	6	-
			破片	8	129	396	190	220	3
		炭化	破片	2	153	460	463	357	22
エノコログサ属	果実			43	1	6	-	-	-
● アワ－ヒエ	胚乳	炭化		-	-	1	1	-	-
● ヒエ近似種	果実	炭化		-	1	-	3	-	-
イネ科	果実			40	43	33	-	-	-
		炭化		-	4	11	7	-	1
ホタルイ属	果実			-	7	4	1	1	-
カヤツリグサ科	果実			29	196	209	35	123	-
		炭化		-	1	3	-	2	-
ツユクサ	種子			-	1	-	-	-	-
イボクサ	種子			-	3	1	-	-	-
ミズアオイ属	種子			3	-	-	-	1	-
● アサ	種子		完形	-	-	1	-	-	-
			破片	-	-	20	-	-	-
サナエタデ近似種	果実			3	2	3	-	-	-
タデ属	果実			3	2	13	1	2	-
アカザ科	種子			6	4	34	6	1	10
スベリヒユ科	種子			-	2	-	-	-	-
ナデシコ科	種子			419	1	18	-	2	-
キンポウゲ属	果実			-	1	-	-	-	-
アブラナ科	種子			15	-	-	-	-	-
キジムシロ類*	核			4	-	-	-	-	-
クサネム近似種	果実			-	1	2	-	1	-
● マメ類	種子	炭化	完形	-	1	2	2	-	-
マメ科	種子	炭化	完形	-	-	-	6	-	-
カタバミ属	種子			2	-	-	-	-	-
エノキグサ	種子			6	-	-	-	-	-
チドメグサ属	果実			12	-	-	-	-	-
セリ科	果実			-	-	1	-	1	-
サクラソウ科	種子			-	1	-	-	-	-
イヌコウジュ属	果実			-	1	2	-	-	-
● エゴマ	果実		完形	-	1	7	-	-	-
			破片	1	-	-	-	-	2
●？ナス科(栽培種？)	種子			-	-	8	-	-	-
ナス科	種子			2	-	3	1	-	1
● ヒョウタン類	種子		破片	-	-	3	-	-	-
タウコギ	果実			-	-	-	-	2	-
メナモミ属	果実			2	-	6	-	-	-
不明種実				5	-	-	-	1	-
分析量				200cc	200cc	200cc	200cc	200cc	50cc
				314.1g	274.9g)	257.9g	272.8g	269.2g	62.5g
炭化材(径4mm 以上)				8(＜0.01g)	2.5cc(0.3g)	4cc(0.7g)	15cc(2.8g)	10cc(2.0g)	5cc(1.5g)
木材(径4mm 以上)				-	7	-	-	42	4
木の芽				-	2	-	-	-	-
昆虫				2 cc	1	-	-	8	-
土器				-	1	-	-	-	-

＊キジムシロ類：キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属

に胚の凹みがある。表面はやや平滑。同定根拠となる穎（果）の付着は認められなかった。

・オモダカ科（Alismataceae）

種子が検出された。淡-黒褐色、長さ1.5mm、幅0.8mm程度の倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳と穎（果）が検出された。穎（果）は淡-茶褐色、胚乳と一部の穎は炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ3.5-5mm、幅2.5-3.5mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。表面に穎が付着した個体もみられる。穎は長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ1-2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

・エノコログサ属（*Setaria*）　イネ科

果実が検出された。黄褐色、長さ2-2.5mm、径1.5mm程度の半狭卵体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・アワ－ヒエ（*Setaria itarica* (L.) P.Beauv.- *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno）　イネ科エノコログサ属－ヒエ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、径1.2mm程度のやや偏平な広卵体で、背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。同定根拠となる穎（果）の付着は認められなかった。

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）

果実が確認された。炭化しており黒色、長さ3-4mm、径2mm程度の狭卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦長の網目模様が縦列する。

実体顕微鏡下では、周辺域に生育していた可能性があるイヌビエ等の他のイネ科野生種との厳密な区別は困難であるが、炭化していることや他の栽培植物が供伴する点から、栽培種のヒエに近似する可能性がある。今回確認された果実は、遺存状態が良好であることから、走査型電子顕微鏡下観察で種類が特定される（松谷，1980，2000など）可能性がある。

・イネ科（Gramineae）

果実が確認された。イネ、エノコログサ属、アワ－ヒエ、ヒエ近似種以外の形態上差異のある複数種を一括した。果実は淡-灰褐色、炭化個体は黒色。長さ1-3mm、径0.5-2mm程度の狭卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には微細な縦長の網目模様が縦列する。炭化果実の内部に確認される胚乳は、長さ1mm、径0.6mm程度の長楕円体で、背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。胚乳表面はやや平滑。

・ホタルイ属（*Scirpus*）　カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、径2mm、厚さ1.3mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。果実頂部は尖る。背面正中線上は鈍稜。基部は切形で、刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括している。淡～黒褐色、径1.2-3mm程度の三稜またはレンズ状倒卵体。頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形。果皮表面は平滑または微細な網目模様がある。長さ1.2mm、径0.7mm程度の三稜状狭倒卵体で表面には微小な疣状突起が密布する、カヤツリグサ属（*Cyperus*）に似る個体などを含む。

・ツユクサ（*Commelina communis* L.）　ツユクサ科ツユクサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ3mm、径4mm程度の半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。背面と側面の表面には、大きなすり鉢状の孔が散在する。他の面には円形の小孔が散在する。

・イボクサ（*Aneilema keisak* Hassk.）　ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ1.5mm、径1.5-3mm程度の半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面には円形の小孔が散在する。

・ミズアオイ属（*Monochoria*）　ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、長さ1mm、径0.6mm程度の楕円体。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には10本程度の太い縦隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。日本に分布するミズアオイ属は、ミズアオイとコナギの2種があるが、実体顕微鏡下の観察による区別は困難である。

・アサ（*Cannabis sativa* L.）　クワ科アサ属

種子が検出された。暗灰褐色、長さ3-4mm、幅3mm、厚さ2.5mm程度の歪な広倒卵体。縦方向に一周する稜に沿って半分に割れた破片がみられる。頂部は切形、基部に淡灰褐色、径1mm程度の楕円形の臍点がある。種皮表面は葉脈状網目模様があり、断面は柵状。

・サナエタデ近似種（*Polygonum* cf. *lapathifolium* L.）　タデ科タデ属

果実が検出された。黒褐色、径1.8-2.2mm程度の偏平な円形。両面中央はやや凹む。頂部はやや尖り、２花柱がある。基部は切形で、果皮とは別組織の灰褐色の萼と、基部から伸び、先が２つに分かれ反りかえる花被の脈がある。果実表面は平滑で光沢がある。

・タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。黒褐色、長さ2.5mm、径1.5mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形で萼が残る。果皮表面はやや平滑で光沢がある、ハナタデやイヌタデに似る個体などを含む。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子が検出された。黒色、径１-1.3mm程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・スベリヒユ科（Portulacaceae）

種子が検出された。黒色、腎臓状円形でやや偏平。径0.8mm程度。一端が凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が臍から同心円状に配列する。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子が検出された。灰褐色、径0.9mm程度の腎状円形でやや偏平。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には瘤-針状突起が臍から同心円状に配列する。

・キンポウゲ属（*Ranunculus*）　キンポウゲ科

果実の破片が検出された。黄褐色、完形ならば長さ2.5mm、幅1.8mm、厚さ0.5mm程度の偏平な非対称広倒卵体。破片の大きさは1.8mm程度。頂部や基部はやや尖る。果皮は薄くスポンジ状で表面はざらつく。

・アブラナ科（Cruciferae）

種子が検出された。赤褐色、長さ１mm、幅0.6mm程度のやや偏平な楕円体。基部は切形で、両面の同一側には臍点から頂部へ伸びる１個の浅い溝がある。種子表面には微細な網目模様がある。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*）　バラ科

核（内果皮）が検出された。淡灰褐色、径１mm程度のやや偏平な腎形。内果皮は厚く硬く、表面は粗面で数個の隆条が斜上する。

・クサネム近似種（*Aeschynomene* cf. *indica* L.）　マメ科クサネム属

果実（豆果）の破片が検出された。灰褐色、完形ならば長さ３-４cm、幅５-６mm、厚さ１mm程度の偏平な非対称広線形で腹面方向にやや湾曲する。頂部と基部は伸び、縁には筋がある。破片は６-８個程度の短軸方向の節に沿って分離した１片で、径５-７mm程度の長方形。一端は斜切形の個体がみられる。果皮表面は粗面。

・マメ類（Leguminosae）　マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色。長さ3.5mm、径２mm程度の長楕円体で腹面方向にやや湾曲する。腹面子葉の合わせ目上に長さ１mm程度の長楕円形で縁が隆起する細長い臍がある。種皮表面はやや平滑。

・マメ科（Leguminosae）

種子が検出された。炭化しており黒色。径1.5mm程度の腎状楕円体。腹面中央部は湾入し、縁が隆起する長さ0.3mm程度の長楕円形の臍がある。上述の栽培種のマメ類とは区別され、野生種の類と思われる。種皮表面はやや平滑。

・カタバミ属（*Oxalis*）　カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、長さ1.5mm、幅１mm程度の偏平な倒卵形。基部は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には４-７列の肋骨状横隆条が配列する。

・エノキグサ（*Acalypha australis* L.）　トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、長さ1.5-1.8mm、径1.2-1.4mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Ｙ字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には粒状の微細な凹みが密布しざらつく。

・チドメグサ属（*Hydrocotyle*）　セリ科

果実が検出された。淡～灰褐色、径１-1. 2mm程度の半月形でやや偏平。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には１本の明瞭な円弧状の稜がある。

・セリ科（Umbelliferae）

果実が検出された。灰黄褐色、長さ２mm、幅1.5mm、厚さ0.8mm程度のやや偏平な楕円体。果皮はスポンジ状で、腹面と背面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・サクラソウ科（Primulaceae）

種子が検出された。灰褐色、径１mm程度の倒台形、背面は平らで楕円状、菱形状、円形状などの４-５角形。腹面は長軸方

向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広線形の臍がある。表面には5－6角形の凹みによる微細な網目模様がある。

・イヌコウジュ属（*Mosla*）　シソ科

果実が検出された。淡灰褐色、径1mm程度の倒広卵体。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・エゴマ（*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica* Hara）　シソ科シソ属

果実が検出された。茶～黒褐色、倒広卵体。径1.8-2.2mm程度。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・ナス科（Solanaceae）

種子が検出された。淡～灰褐色、歪な腎臓形で偏平。径1.8mm程度の小型種子と径3mm程度の大型種子が確認された。大型種子は栽培種に由来する可能性が高いため、区別している。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・ヒョウタン類（*Lagenaria siceraria* Standl.）　ウリ科ヒョウタン属

種子の破片が検出された。灰褐色、長さ1.3cm、幅7.5mm程度の偏平な倒広皮針体。頂部は角張り、基部は切形で臍と発芽口がある。種皮表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い稜に2本の縫線がみられる。

・タウコギ（*Bidens tripartita* L.）　キク科センダングサ属

果実が検出された。灰褐色、長さ6mm、幅1.7mm程度の偏平な倒皮針体。頂部の両肩から長さ2mm程度の下向きの逆刺をもつ芒が伸び、先端を欠損する。果実正中線上は細い縦隆条がある。果皮表面には伏毛が密布する。

・メナモミ属（*Siegesbeckia*）　キク科

果実が検出された。黒褐色、狭三角状菱形体で腹面方向へやや湾曲する。長さ2.8mm、径1.2mm程度。頂部には円形の臍がある。表面には浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境壁は短く突出し、全体に微細な突起がある。

（5）樹種同定

結果を表13、遺構別・器種別種類構成を表14に示す。木製品および自然木計54試料は、針葉樹4種類（モミ属、ツガ属、サワラ、ヒノキ科）、広葉樹6種類（ヤナギ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、クワ属、フジ属近似種）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1－4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・ツガ属（*Tsuga*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広いが、一部狭い試料も認められる。樹脂細胞は年輪界付近に認められるが、数は少なく顕著ではない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1－4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.)Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1－3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

上記サワラを含むヒノキ科のいずれかであるが、組織の保存状態が悪く、分野壁孔が観察できないため、区別することができず、ヒノキ科とした。

・ヤナギ属（*Salix*）　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2－3個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は3－4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は２－３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３－４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁

表13．樹種同定結果

遺構名	遺物No.	器種	木取	樹種
1号住	7	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	8	カマド構築材	柾目板	サワラ
	9	カマド構築材	板目板	サワラ
	10	杭状木製品	分割材	ヒノキ科
	11	杭状木製品	分割材	サワラ
	12	杭状木製品	ミカン割	ヒノキ科
	14	斎串状木製品	削出棒	ヒノキ科
	18	薄板	板目	ヒノキ科
	19	底板？	板目	サワラ
	20	底板？	板目	ヒノキ科
	21	角材	分割材	ヒノキ
3号住	4	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	6	カマド構築材	柾目板	ヒノキ科
	9	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	11	杭状木製品	分割材	ヒノキ科
	12	斎串状木製品	分割材	ヒノキ科
	13	斎串状木製品	柾目	ヒノキ科
	14		削出棒	ヒノキ科
4号住	6	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	8	カマド構築材	分割材	ヒノキ科
	11	板	板目	ツガ属
	12	杭状木製品	分割材	サワラ
	13	杭状木製品	柾目板	サワラ
	18		分割材	ヒノキ科
	19		分割材	サワラ
	21	曲物底板	柾目	ヒノキ科
6号住	10	杭状木製品	分割材	ツガ属
	11	杭状木製品	分割材	ツガ属
	13	板材（孔有）	板目	フジ属近似種
	14	柱材	芯持丸木	ツガ属
杭列（２次調査）	33	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	34	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	35	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	36	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
井戸	12	棒状	芯持丸木	モミ属
	13	棒状	削出丸棒	クリ
	14	板材（孔・切込有）	柾目	ヒノキ科
	15	板材	板目	サワラ
	16	角材（孔段有）	分割材	サワラ
	17	板材（孔有）	柾目	サワラ
	19	板材（孔有）	柾目	サワラ
	21	板材	柾目	ヒノキ科
	28	板材	板目	ヒノキ科
	31	角材	板目	サワラ
	32	角材	分割材	サワラ
	34	棒状（有頭）	芯持丸木	サワラ
	35	棒状	柾目	モミ属
	36	角材（孔有）	分割材	モミ属
	サンプル９	板材		ヒノキ科
	サンプル10	板材		モミ属
	田畑境界杭１	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	田畑境界杭11	杭	芯持丸木	クリ
	サンプル11	自然木		ヤナギ属
	サンプル12	自然木		クワ属

表14．遺構別・器種別種類構成

遺構名	樹種名	モミ属	ツガ属	サワラ	ヒノキ科	ヤナギ属	クヌギ節	コナラ節	クリ	クワ属	フジ属近似種	合計
1号住	杭(カマド構築材・杭状木製品)			3	3							6
	底板？			1	1							2
	角材				1							1
	棒状(斎串状木製品)				1							1
	薄板				1							1
3号住	杭(カマド構築材・杭状木製品)				4							4
	棒状				1							1
	分割材(斎串状木製品)				2							2
4号住	杭(カマド構築材・杭状木製品)			2	2							4
	分割材			1	1							2
	板		1									1
	曲物底板				1							1
6号住	杭(杭状木製品)		2									2
	板										1	1
	丸木状(柱材)		1									1
杭列	杭						2	2				4
井戸	板	1		3	3							7
	角材	1		1								2
	底板？			1								1
	部材			1								1
	棒	1		1					1			3
	不明	1			1							2
	境界杭							1	1			2
	自然木等					1				1		2
	合　計	4	4	14	22	1	2	3	2	1	1	54

孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・クワ属（*Morus*）　クワ科

環孔材で、孔圏部は4-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-4個が塊状あるいは接線方向に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・フジ属近似種（cf. *Wisteria*）　マメ科

試料は板目の切片が作成できなかった。環孔材で、孔圏部は2－3列、孔圏外で管径を漸減させて散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織の形状・大きさは不明。小道管が階層状になる。

4．考察

（1）古植生

水田跡および畑跡試料の一部には、花粉化石の大半に破損・溶解の痕跡が認められるなど遺存状況の悪い試料が認められた。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類によって異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされる（中村，1967；徳永・山内，1971；三宅・中越，1998など）。好気的状況下においては分解に強い花粉が多く残存していると推定され、花粉化石群集は正確に周辺植生を反映していない可能性がある。

一方、花粉化石の遺存状況が良好であった1地点（サンプル1）、畑跡畝（サンプル5）、水田跡（サンプル6）、井戸跡（サンプル7）の花粉群集はいずれも類似する。木本類では、ツガ属が最も多く産出し、モミ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属等が伴う組成を示した。したがって、ツガ属をはじめとしてモミ属、トウヒ属、スギ属等は、後背の丘陵や山地部に林分を形成し、中間温帯林を形成していたと推測される。

ところで、甲府地方気象台による甲府地方の気象統計結果から計算した暖かさの指数は115.4、寒さの指数は4.3である。これを吉良（1971）に当てはめた場合、現在の気象条件では常緑広葉樹林が成立する。冬の気温低下が著しいと中間温帯林が成立す

る場合もあるが、上記した指数を見る限り、常緑広葉樹が生育できないほどの気温低下ではないことから、自然状態ではカシ類などの常緑広葉樹林が成立することになる。花粉分析結果では、平安時代頃は中間温帯林が主体であったと推定され、おそらく現在の環境と異なっていたと考えられる。中間温帯林となる条件としては、現在よりも気温が低下（特に冬期の気温）し、常緑広葉樹林の発育が阻害されることや、多雨化等により斜面地の土壌が流出し痩地に強い温帯針葉樹林が生育する等が考えられる。平安時代における冷涼・多雨化の兆候は、縄文時代末から始まる「弥生の小海退」とよばれる寒冷期から続く現象であり、各地の分析結果に普遍的にみられる傾向である。

カバノキ属やハンノキ属をはじめとして、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属等は、河畔や低湿地等の適湿地に生育する種類である。これらは、丘陵縁辺等の沢沿いや扇状地上の河川沿いの河畔や周辺の低湿地等に生育していたと推定される。自然木に認められたヤナギ属やクワ属も、河畔林構成種を含む分類群であり、これらは遺跡内や遺跡周辺に生育していたことが推定される。本遺跡では、過去にクワ属の立木が確認されたことやクワ科の花粉の多産、クワ属と同定された木材組織配列はヤマグワと異なる特徴が認められたことなどから、栽培クワの可能性が指摘された（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006）。ただし、今回のクワ属の自然木については、ヤマグワと大きな違いは認められなかったことから、栽培クワの可能性について言及することはできない。

草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属などの花粉や、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科等の種実が検出された。これらの草本類には、開けた空間に草地を形成する人里植物に属する分類群が多く含まれることから、遺跡周辺は、これらの分類群が生育する草地的環境が推定される。また、ガマ属、ヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、ホタルイ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キンポウゲ属、クサネム（近似種）、セリ科、タウコギ等の水生および湿地生植物に由来する花粉・種実が検出されることから、周辺域に水湿地の存在が推定される。これらの種類は、水田雑草としても認められる種類であり、本遺跡周辺では当該期の水田跡が検出されていることを考慮すると、水田内に生育していたものに由来する可能性もある。井戸跡埋積物（サンプル７）からは、虫媒花のクリ属の花粉、エノコログサ属やイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科の種実が検出された。これらは井戸跡周辺の局地的な植生を反映している可能性がある。

（２）栽培植物

３次調査区では、杭列を境界として水田跡と畑跡が検出されたことから、これらの遺構における栽培植物の検証が課題とされた。本分析では、水田跡と畑跡における花粉化石や植物珪酸体の産状の比較から、栽培植物の検討を試みた。

水田跡試料（サンプル１、サンプル６）からは、イネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体が検出され、花粉分析結果では、草本類のイネ科やカヤツリグサ科の多産が認められた。畑跡試料（サンプル３）・畝（サンプル４）、畑跡（サンプル５））からは、栽培植物であるイネ属が検出され、籾殻や葉部に形成される植物珪酸体が認められた一方、花粉分析結果では、畑跡（サンプル５）で定量解析に耐え得る花粉が検出されたが、木本類およびシダ類胞子が大部分を占め、草本類についてはイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出されたのみであった。

水田跡・畑跡試料のイネ属の機動細胞珪酸体含量は、水田跡試料では800～900個／g、畑跡試料では200～1400個／g と、試料間で多寡があるが畑跡試料で多産する。稲籾殻や稲藁等の植物体が堆積物中に混入していたことは明らかであるが、本分析結果から栽培や施肥等を特定するに至らない。

なお、住居カマド炭化物層の調査では、イネの胚乳・穎のほか、アワ－ヒエ、ヒエ近似種、アサ、マメ類、エゴマ、ナス科（大型）、ヒョウタン類等が検出され、水田跡試料（サンプル６）からはソバ属の花粉が検出された。これらの栽培植物は、１次調査区の調査成果（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006）と同様の傾向と言える。畑跡での栽培植物と断定することはできないが、これらの栽培植物の利用等が示唆される。

（３）植物利用

１）燃料材

住居跡カマド炭化物層や２次調査区１号不明遺構（カマド？炭化物）からは、栽培植物のイネ属やヨシ属やススキ属に由来する珪化組織片が検出された。このことから、燃料材として利用された植物体のうち、イネ科草本類では、イネ属やヨシ属、ススキ属などの利用が考えられる。イネ属については、いずれの試料からもイネ属短細胞列が多く検出され、イネの籾殻に由来する顆珪酸体も検出された。同試料の微細物分析では、住居跡カマド炭化物層を主体として炭化および未炭化の顆が多量検出された一方、イネ胚乳の検出は少量であった。同様の結果は、１次調査区で検出された住居跡カマド炭化物や灰層の調査でも確認されている（パリノ・サーヴェイ，2006）。

２）木材利用

分析対象の木製品は、住居跡から出土した杭（棒状木製品）や木製品、杭列を構成する杭材、井戸跡の構築部材等からなり、針葉樹５種類（カラマツまたはトウヒ属、モミ属、ツガ属、サワラ、ヒノキ科）、広葉樹４種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、フジ属近似種）に同定された。これらの分類群は、本遺跡の１次・４次調査区で検出され

た棒状木製品や杭材、井戸構築部材に確認された分類群と同様の組成を示す（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006・2007）。

住居跡から出土した杭や木製品は、いずれでも針葉樹が多く、広葉樹は6号住の板材にフジ属近似種が認められたのみである。針葉樹は、1・3・4号住居跡ではサワラあるいはヒノキ科が多く、6号住ではツガ属が認められた。なお、6号住からは、調査所見から柱根と考えられる丸木材（№14）が確認されており、用途等の違いを反映している可能性があるが、本遺跡では柱根を対象とした調査事例はないことから住居跡間の木材利用の差異については今後の課題である。

井戸跡の枠材を構成する部材や覆土中から出土した木製品は、針葉樹が多く、サワラとヒノキ科の多用、住居跡等で未検出のモミ属の利用が確認された。一方、広葉樹は、井戸枠の棒状の横木（井戸跡№13）にクリが認められたのみであった。4次調査区の1号井戸跡の井戸枠部材からは、サワラやヒノキ、ヒノキ科等が多く確認されており、同様の木材利用が窺われる。本分析結果では、横木や角材等の部材にモミ属の利用が認められたが、これらの部材にはサワラあるいはヒノキ科も利用されており、木材の選択性等を見出すことはできない。なお、甲府盆地では、大坪遺跡・塩部遺跡（甲府市）等で古代の木製品の調査が実施され、曲物、田下駄、斎串等の板状を呈する製品にヒノキ属（ヒノキまたはサワラ）の木材が多用される傾向が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996；松葉，2001）ことから、本遺跡を含めて当該期における一般的な木材利用が推定される。

杭列は、1次調査区から検出された杭列に相当すると考えられる2次調査区より検出された杭列と、3次調査区から検出された水田跡と畑跡の境界部より検出された杭列からなる。杭材は、小径の丸木が用いられ、一方の端部のみを加工し、樹皮が残存するものが多く認められた。これらの杭材からは、クヌギ節やコナラ節、クリ等が認められ、いずれも広葉樹材であった。1次調査区の杭列からは、ヤナギ属を主体として、コナラ節、カエデ属、クリ等が確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006）、樹種構成数は異なるが、いずれも広葉樹材を主体とするといった共通点が指摘される。

花粉分析結果や杭材に認められた広葉樹材は、杭材の形状や河畔林構成種を多く含む分類群から構成されることから、周辺に生育していた樹木の利用が推定される。一方、住居跡や井戸跡内から出土した木製品、建築部材等では針葉樹の利用が多く認められたが、このうち、サワラは山地の尾根筋に生育する種類であり、現在の山梨県では南部・北部・西部の県境付近の山地に分布する。また、種類の同定まで至らなかったヒノキ科も、これまでの調査結果を考慮するとサワラの可能性が高い。モミ属とツガ属は、いわゆる中間温帯林を形成する種類であり、山地・丘陵の斜面地等に生育する。花粉分析結果では、モミ属やツガ属の花粉化石は比較的多く産出したが、ヒノキ科を含む分類群（イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科）の花粉化石はほとんど検出されなかった。花粉の生産量を考慮したとしてもヒノキ科を含む分類群の産出量がわずかであること、本遺跡が釜無川扇状地扇端部付近に立地することなどを考慮すると、周辺にヒノキ科が多く生育していたとは考え難く、木材の入手は容易でなかったと推定される。

引用文献

村石眞澄，2002，第2章　微地形環境．町内遺跡詳細分布調査報告書．田富町教育委員会，2－5．

玉穂町教育委員会，1995，町内遺跡詳細分布調査報告書．35p.

玉穂町教育委員会，2003，上窪遺跡　医大南部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書．玉穂町埋蔵文化財調査報告書第1集.25p.

玉穂町教育委員会，2005，上窪遺跡（2次）　新山梨環状道路建設及び一級河川山王川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査．玉穂町埋蔵文化財調査報告書第2集．56p.

玉穂町教育委員会，2006，平田宮第2遺跡新山梨環状道路建設及び一級河川山王川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査．玉穂町埋蔵文化財調査報告書第3集．64p.

山梨県教育委員会・山梨県土木部，2007，平田宮第2遺跡　新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書．山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第244集．74p.

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176.

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

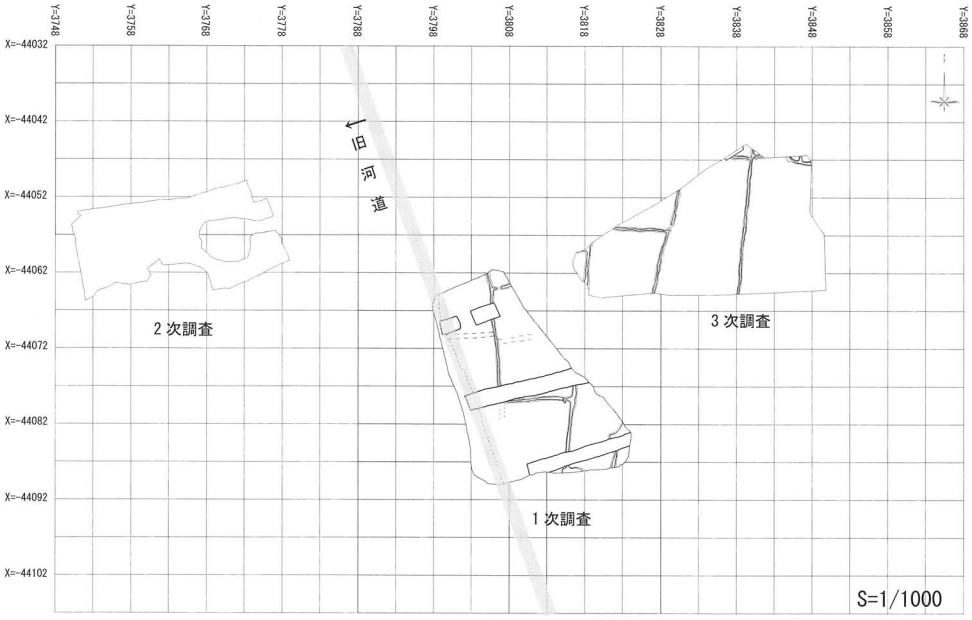
近藤　錬三，2004，植物ケイ酸体研究．ペドロジスト，48，46-64.

松葉　礼子，2002，大坪遺跡から出土した木製品（奈良～平安時代）の樹種同定．大坪遺跡　－平成12年度調査地点の報告－，社会福祉法人清翔会・大坪遺跡発掘調査会，28-30.

松谷　暁子，1980，十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について．浦幌町郷土博物館報告，第16号，203-211.
松谷　暁子，2000，植物遺残の識別と保存について．Ouroboros，東京大学総合研究博物館ニュース，5，8-10.
南木　睦彦，1991，栽培植物，古墳時代の研究　4　生産と流通Ⅰ，石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編，雄山閣，165-174.
三宅　尚・中越　信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，6，15-30.
中村　純，1967，花粉分析．古今書院，232p.
中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.
パリノ・サーヴェイ株式会社，1996，木製品の樹種．山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第123集　塩部遺跡　県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査報告書，山梨県教育委員会，48-50.
パリノ・サーヴェイ株式会社，2006，平田宮第２遺跡の自然科学分析．玉穂町埋蔵文化財調査報告書第３集　平田宮第２遺跡　新山梨環状道路建設及び一級河川山王川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査，玉穂町教育委員会・山梨県新環状・西関東道路建設事務所・山梨県峡中地域振興局，32-55.
パリノ・サーヴェイ株式会社，2007，理化学分析．山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第244集　平田宮第２遺跡　－新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書－，山梨県教育委員会・山梨県土木部，11-23.
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.
徳永　重元・山内　輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50-73.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第４章　まとめ

［第１面　水田跡］



第56図　1～3次調査　第1面水田跡合成図

３次調査地点では、標高250.9m から水田跡が検出された。１次調査地点でも250.8m から水田跡が検出されており、両者は同水田面の広がりである。上層には15世紀頃の方形区画施設（上窪遺跡）をもち、下層には10世紀前半の集落跡が存在することからおおよそ平安末から鎌倉時代の水田跡である。

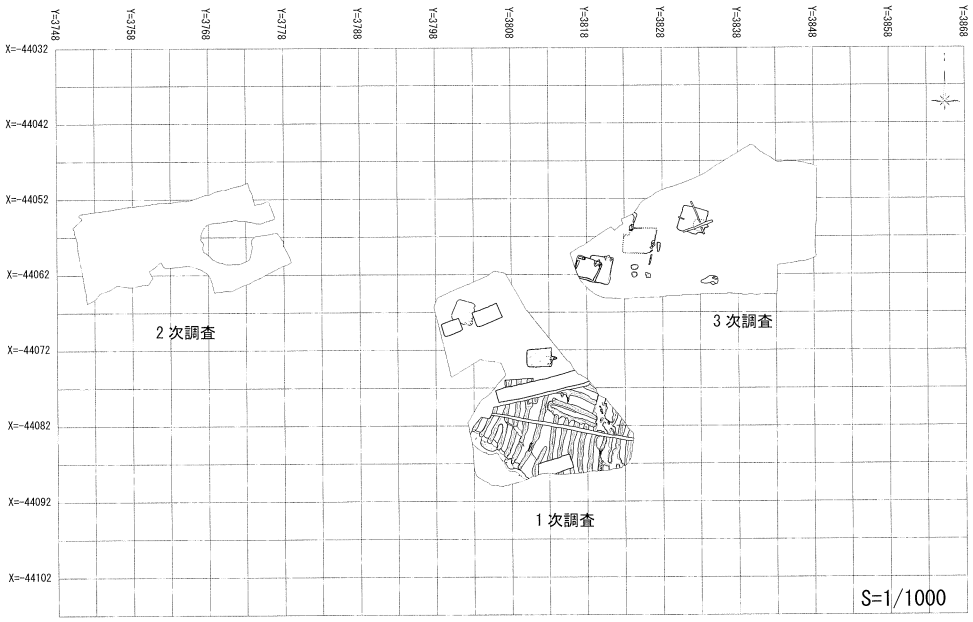
調査された水田の区画は、１・３次調査地点とも長軸を南北にもち、東西方向の短辺の長さが異なる台形に近い長方形を呈している。平田宮第２遺跡第１面合成図でも畦畔配置は、対応しており、同規格の水田が広がっていたことがわかる。

なお、東に約50m 離れた上窪遺跡２次調査地点でも水田跡は検出されており、その検出レベルは標高250.7m であった。上窪遺跡２次調査地点で検出された水田区画はＥ－30°－Ｓに直線的な畦畔を平行に配し、その間を短い畦畔で区切っており平田宮第２遺跡とは大きく異なる。この規格の変化は、上窪遺跡２次調査区西端にある南北方向大畦畔を始点としており、大畦畔から西が平田宮第２遺跡の水田区画になっている。

２次調査区で水田跡は検出されておらず、１次調査時に想定したように旧河道の存在を再度指摘しておく。おそらく、大畦畔以西の水田区画の変化は、流路に規制された結果河川沿いに生じたものと考えられ、本調査により平田宮第２遺跡から上窪遺跡に広がる水田域の西端を明らかにすることとなった。

西へ約1,400m 離れた小井川遺跡では、中世館跡、平安時代集落が調査されているが水田跡の存在は確認されていない。その間1,400m は、新山梨環状道路建設に伴う試掘調査が、県埋蔵文化財センターにより実施されたが、遺構の存在は確認されなかった。平田宮第２遺跡から小井川遺跡までの１km を越える範囲は遺跡の空白地帯であり、平田宮第２遺跡の土層堆積状況、水田跡のあり方からもここに河川が存在した可能性は高いだろう。

［第２面　住居跡］



第57図　1・3次調査第2面集落跡合成図

住居跡は、３次調査区で合計７軒確認された。２次調査区では第１号不明遺構としたものが杭状の木製品をもち、３次調査検出の住居カマドの構造と極めて類似していることから、住居跡の可能性が高い。可能性も含めれば今回の２・３次調査では合計８軒の住居跡を検出したことになる（第57図）。

住居跡内からは、１次調査に引き続き多くの木製品が出土した。以下（１）カマド構築材、（２）斎串状木製品、（３）杭状木製品、（４）その他木製品にわけてまとめる。

（１）カマド構築材

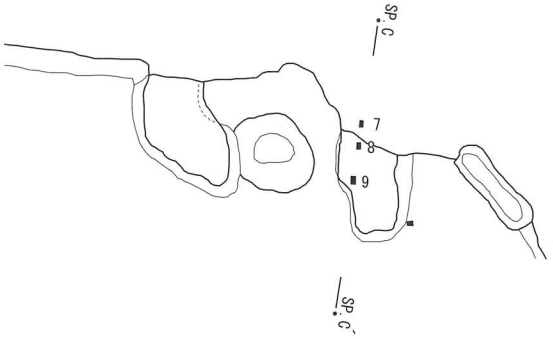
２次調査１号不明遺構、３次調査１・３～６号住居跡カマドでは、その構築材として杭状に木製遺物が使用されていた。構築材（補強材）として石や土器を用いたカマドは多く調査・報告されているが、木製品が使用された例は、本遺跡が初見であろう。カマドをつくる際に基準・骨組みとなるような役割を主に担っていたと考え、カマド構築材とした。

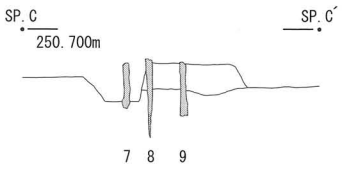
カマド構築材は、カマドソデ部分に２～３本、焚口部に上端をやや傾けた「ハ」状で検出され、いずれのカマド構築材も同様の傾向にある。構築材の下端は、下層の畑跡まで達している例が多く、砂ではなく粘土質の地盤で構築材を固定しようとした結果と推測される。また、構築材上端は、炭化している例が多くあることも特徴である。

第58図にカマド構築材の検出位置を示した。いずれのカマドも本数の差こそあれ、同じような位置に打ち込まれ、ソデ片側３本以内であった。３号住居跡カマド構築材９は、横たわった状態でカマドソデ中から出土した。縦材と組み合わさり、カマドつくりの基準・骨組みとなったのかもしれない。

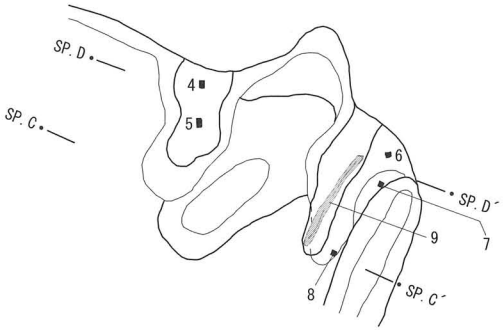
第59図にカマド構築材を示した。地面に刺すことを目的としていたため、その先端は加工され鋭くなるものが多い。４号住居跡カマド構築材はいずれも大型で先端は杭状に鋭く削ってあった。逆側端部も加工されており完形のカマド構築材である。４号住居跡カマド構築材７は、今回出土した構築材の中で最長の52.1cmを測るが、この大きさから考えると床面上には約35cm程度しか突き出ないことになる。他のカマド構築材を見ても完形のものが多いが長さは40cm未満がほとんどであり、床面上には数cmから20cm程度しか突き出ない。

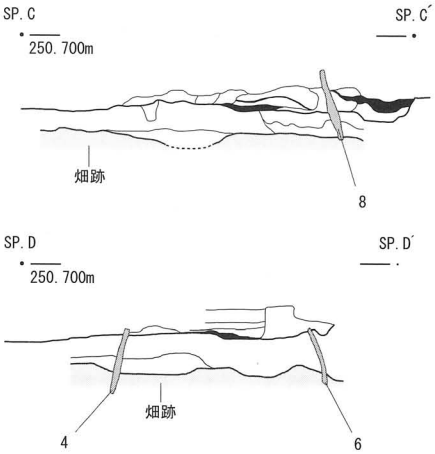
カマド上部については、カマド天井が全て崩れてしまっているため不明だが、少なくとも今回検出



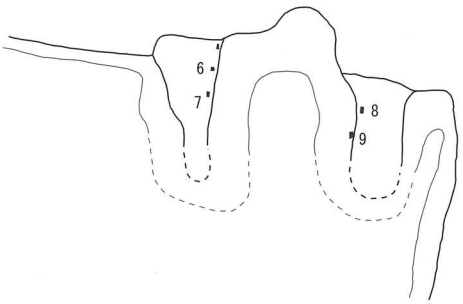


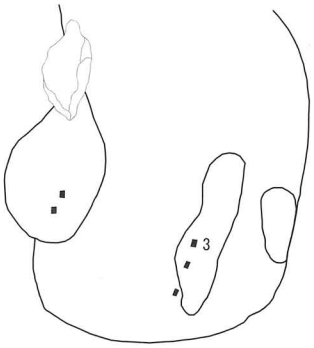
1号住居跡カマド





3号住居跡カマド

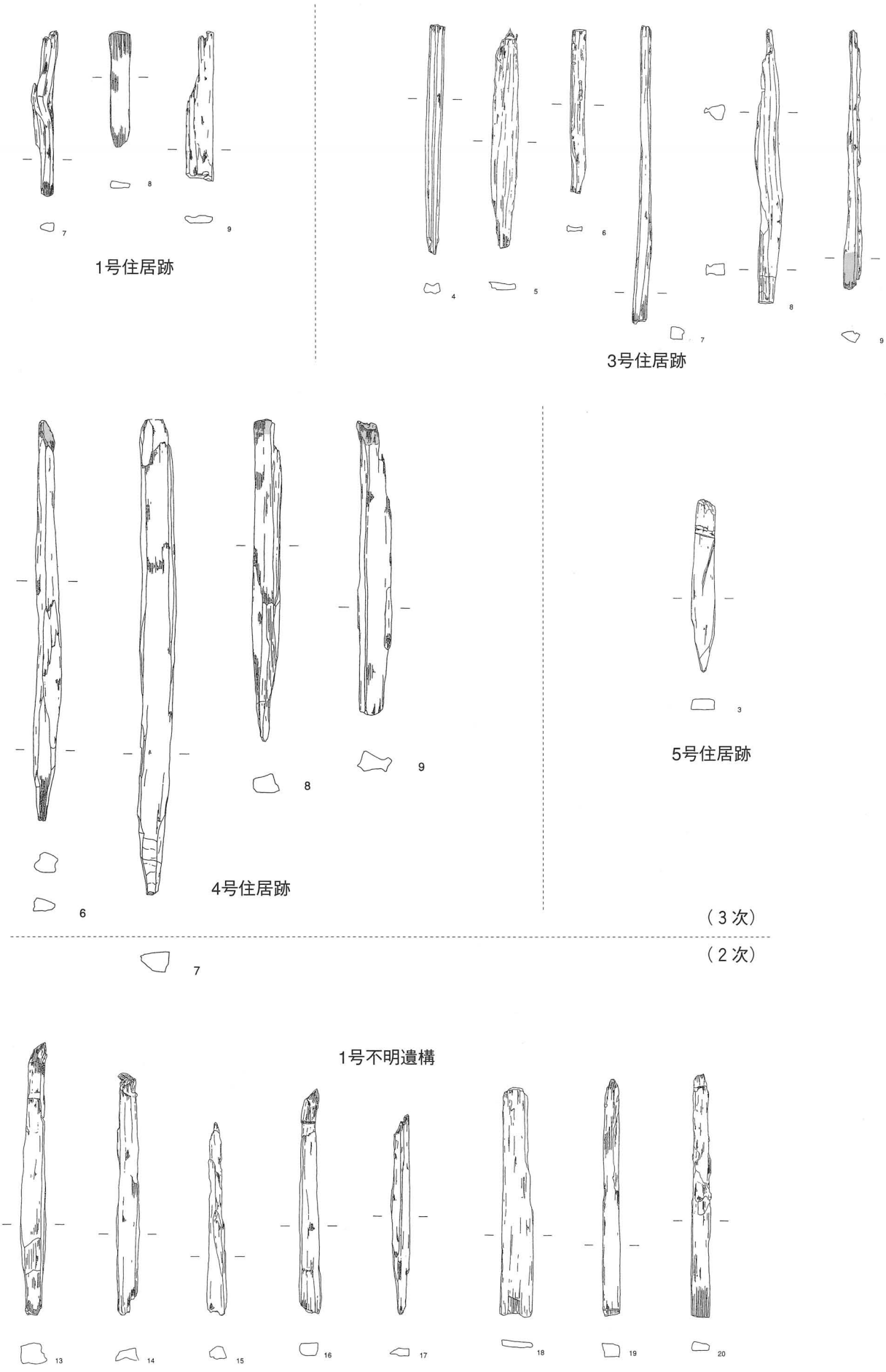




4号住居跡カマド

5号住居跡カマド

第58図　平田宮第2遺跡3次調査検出カマド構築材



第59図　平田宮第2遺跡出土カマド構築材　（S＝1/6）

されたカマド構築材は、カマド基部を安定させ、焚口部側へ緩やかにカーブするカマド壁体形状の目安とする役割があったと思われる。

また、カマド構築材の形態には、住居ごとに特徴がある。1号住居跡カマド構築材は、自然木の先端を若干加工するのみの7と、短く薄い板の先端をさらに薄く矧ぐように加工した8、長方形の板の先端を平らに加工する9というように形状に統一性がない。3号住居跡は、棒状で先端を加工してはいるが、杭状に鋭く尖らせず先端は平に削っている。4号住居跡は、長い材の先端を杭状に鋭利に削っている。5号住居跡は、1点のみであるが、板状の両側縁を削り鋭利な先端にしている。2次調査1号不明遺構のカマド構築材は3号住居跡構築材のように先端を鋭くなく平に加工しているが、より幅広で3号住居跡例が先端に至ると細くなるのに対し、同じ幅か逆に広がるような形態のものが多い。

このように5つのカマドを比べるとそれぞれ特色をもった構築材が使用されていることがわかるが、大きさも様々であり、小型の1号住居跡例と大型の4号住居跡例がどこまで同機能を果たしたと考えることができるのか、端部被熱に何の意味があるのかなど今後に残す課題も多い。ただ、カマド構築に際し、石材・土器等を使用せず、木材のみが使用されるこの状況は甲府盆地でも最低地部という限定された範囲の確かな特徴ということができる。

（2）斎串状木製品

棒状で一部が加工され、また被熱した木製品は、1次調査で斎串として報告したものである。今回の調査ではさらに類例を増やすことになったが、平成17年に実施された県埋蔵文化財センターの調査（4次調査地点）では、類似する木製品が祭祀遺物として報告された。出土状況は、溝の底に斎串状の木製品が10数本重なり、その上を炭化物粒子を含む土壌と土師器などが覆い、木製品の多くに端部の炭化が見られたという。報告者は、頂部を圭頭状に削ることがないことや側面に切り掛けが施されない点など、いわゆる斎串とは、特徴を違にすることから斎串状木製品と呼称している。本報告でも加工痕をもつ棒状の木製品を斎串状木製品と呼び4次調査例に倣った。

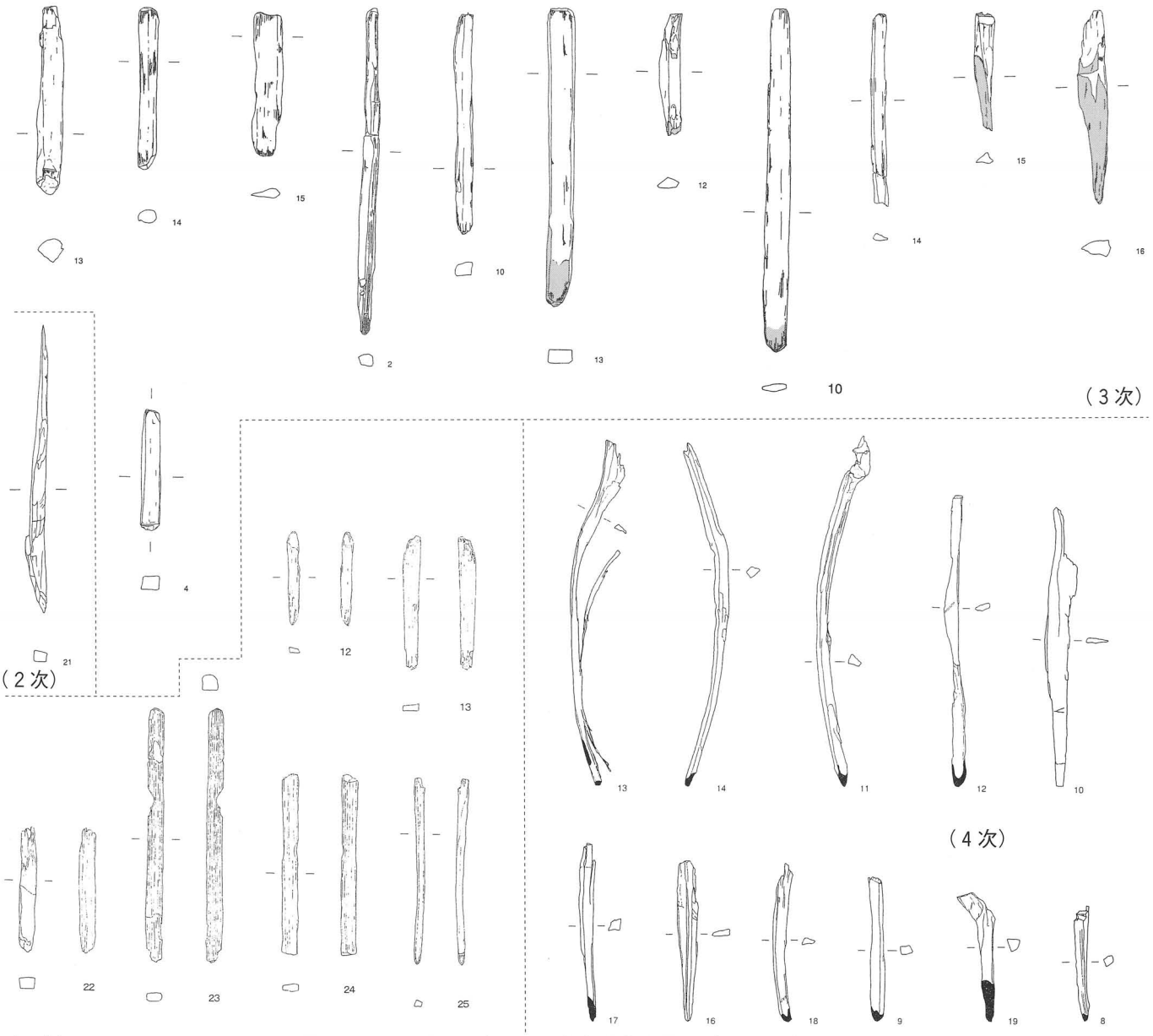
第60図は、1～3次調査出土斎串状木製品の内、出土地点が住居内と確実にわかっているもの及び4次調査祭祀遺構出土斎串状木製品である。住居内出土例と祭祀遺構出土例を比較すると、前者は概して直線的に削りだされ先端が丸みを帯びつつやや尖る傾向があり、後者は粗く削りだされ自然面を多く残している。両者とも端部に被熱する例が多い特長は同様だが、細部はことなり若干形態差を有している。

第61図は、県内出土斎串状木製品である。形態は棒状・板状の材を粗く剥いだもの（地耕免遺跡で小野正文氏が分類した剥ぎ板材を用いたC類、自然の丸材を用いて頂部を切断し、先端も杭状に尖らせたF類）が多く、平田宮第2遺跡4次調査祭祀遺構出土例はこれらと類似する。圭頭状の端部をもつ典型的な斎串は、大坪遺跡、宮ノ前遺跡から数は少ないが出土している。

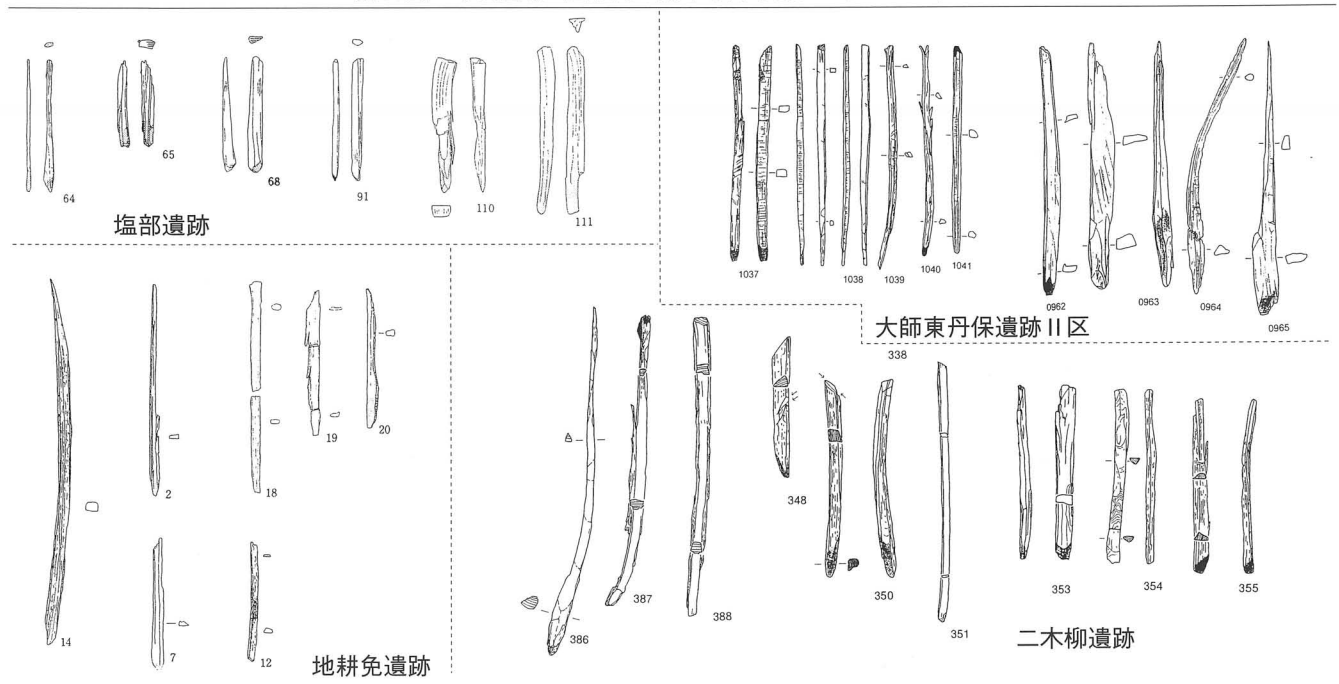
斎串状木製品の出土位置は塩部遺跡例が奈良・平安時代の旧河道、大師東丹保遺跡Ⅱ区出土例が鎌倉時代の水田面、地耕免遺跡例が平安時代後半の溝跡、二本柳遺跡例が古代末～中世前期・後期の水田面、大坪遺跡が古代旧河道、宮ノ前遺跡例が8～9世紀の溝跡であり、祭祀が行われたことが指摘されている。平田宮第2遺跡4次調査例を加えた7例はいずれも屋外の遺構からの出土となる。

これに対し平田宮第2遺跡1～3次調査出土の斎串状木製品は屋内からの出土である。その形態と端部を被熱する特徴から祭祀的性格を持っていた可能性は推測できるが、屋外出土斎串状木製品との間には形態差が存在している。

また、屋内出土斎串状木製品の被熱痕跡は、その出土位置から「カマド」＝「火」との結びつきが考えられ、「斎串立て神酒すゑ奉る祝部がうずの玉かげ見れば」（『万葉集』巻13）、「庭中の阿須波の神に小柴さし吾は斎はむ帰り来までに」（『万葉集』巻20）等から推測される地面に刺して使用する「他地と聖地と区別するしるし」（黒崎　1986）、としてのいわゆる斎串とは異なる性格が想定できる。端部の被熱が屋内外ともに多いという共通の特徴もあるが、本遺跡出土斎串状木製品は、屋内出土という他に類例のない特徴を重視し、屋外の斎串状木製品とは性格が異なるカマドに係わる遺物と



第60図　平田宮第2遺跡出土斎串状木製品　（S＝1/6）



第61図　山梨県内出土斎串状木製品　（S＝1/6）

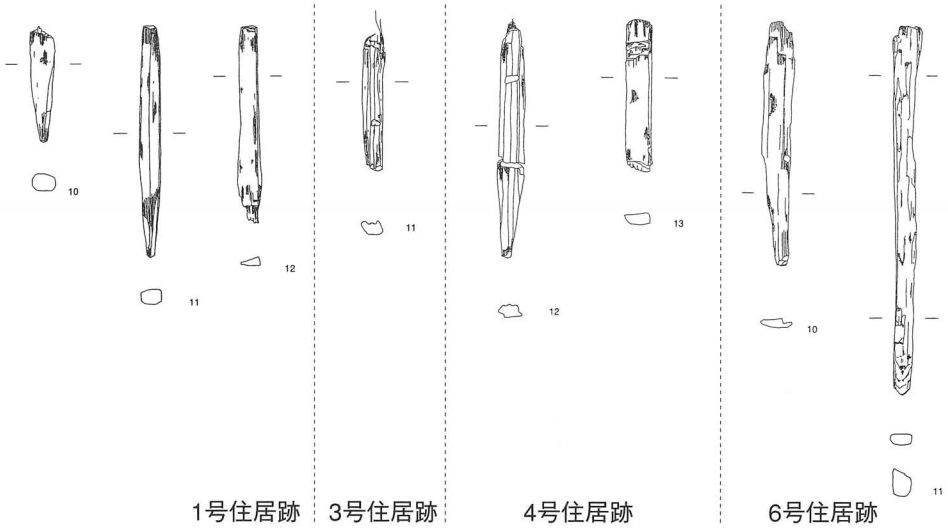
考えたい。

（3）杭状木製品

棒状で先端を削り鋭くしカマド以外の地面に突き刺してあるものを杭状木製品と呼ぶ。形態はカマド構築材や斎串状木製品とほとんど差異はないが、住居内でもカマド以外の床面や壁際に刺してある点が特徴である。

長さは最も長い6住－11で28.9cm、短いものでは1住－10で9.1cmであるが、床面上にはわずかに突出するのみである。カマドソデの延長上に複数本で位置する傾向があるため、住居内の区画を示すようなもの、あるいは中世絵巻物に見られるような御幣を巡らし結界とした斎串のようなものかもしれないが、その用途は不明である。

カマド構築材の残骸の可能性もあるが、炭化物の堆積や、シルトの分布、遺物の集中などはまったく確認できない。いずれにしても住居内出土杭状木製品というこれまで例のない遺物であり出土状況のため、資料の増加をまちたい。



第62図　平田宮第2遺跡3次調査出土杭状木製品　（S＝1/6）

（4）その他の木製品

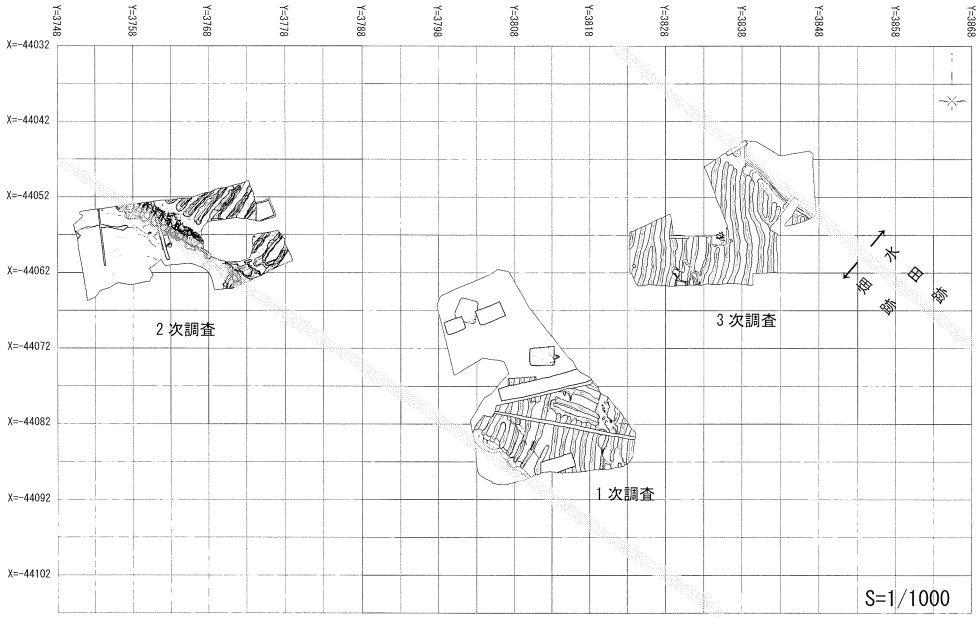
その他の木製品として注目されるのは、3次調査6号住居跡から検出された柱材である。

柱材は3次調査6号住居跡のカマド手前約120cm、南壁から約60cm内側から検出された。プラン確認時点ではその存在はわからなかったが、住居完掘の状態で床面から約30cm出ている径15cm程度の木が検出された。断面観察からは柱材よりひとまわり大きな掘り方を確認でき、掘り方内は砂が充填されていたが、版築のような突き固めは見られなかった。

その形状と出土位置から柱材としたが、6号住居跡内で確認されたのは1本のみであった。最終的に、住居全体を床面から20cm程掘下げたが柱材、掘り方等床面以下に柱に関係する遺構・遺物は確認できなかった。柱が1本のみだったとは考えにくく、床面下の調査で見落としたのか、掘り方をもたず床面上に直接柱を据えつけたのか想定できる可能性は少ない。

1次調査1号住居跡内の北壁際でも掘り方をもち版築状の土層堆積の直立した木材が検出され、柱材として報告されている。柱の形状としては3次調査柱材が底面を平に加工しているのに対し、1次調査例は鋭利に加工されていた。住居内から柱材が検出されたのは2例であり、住居プランの確認ができた1～3次調査6軒の1／3である。木製品の出土状況から考えると柱材があったならば残っている可能性が高く、2軒の住居から1本ずつしか検出されない状況はそのまま当時の住居のあり方を示していると思われる。壁柱穴のようなものも住居周辺には確認できていない。

［第３面　畑・水田跡］



第63図　1～3次調査　第3面畑跡合成図

２次調査区で畑跡の西端を、３次調査区で東端を検出し、幅約50mで南東から北西方向に帯状に畑跡がのびていることを確認した。両端とも杭列が続いており杭列の外側は、西側で遺構がまったく確認されなくなり、東側は水田跡が広がっていた。

２次調査区で検出された杭列の西側には、畝が約２mという中途半端な長さで残る特異な状況が見られた。この短い畝は地震の影響と思われる地割れにより、水平方向にずれたり、上下に段差が生じたりするなど大きな被害を受けていた。地震により耕作不能となった畝が放棄され、耕作可能な畝との間に境界と土留めを兼ねた杭列が設けられた結果と考えられる。

３次調査畑跡は調査区東端で水田へと変化しており、上窪遺跡の第３水田面へとつながっていく。３次調査区の水田跡は畑跡とほとんど標高差がなく、違和感があったが、視野を上窪遺跡まで広げて比較してみると、やはり水田跡の広がる上窪遺跡２次調査区で約50cmの差があり、さらに１次調査区とは約１mの標高差があった。少しでも高い土地に畑を、低い土地には水田を配したことがわかる。住居跡が検出されるのも畑が広がる範囲に限られており、土地の高低差が当時の人々の居住地選定に大きな意味を持っていたことを示している。

畑跡の東西の境界に打たれた杭列は、特定の樹種に特化する傾向にはないが、杭列の中に根をはった状態の木が間隔をもって植えられていたことが明らかとなった。１次調査では2.7m離れて２本の木が樹立しており、２次調査１本、３次調査２本（１本は畑の中）が検出されている。限られた範囲の調査でこれだけ根をはった状態の木が検出されるということは2.7m以上の間隔で植栽が広く行われていたことが予想される。

樹種については１次調査検出例がクワ属、３次調査検出例がヤナギ属とクワ属であった。畑の境界杭の中に１本ずつある程度の間隔をもって根をはっていたという検出状況から、人手による計画的な植栽が行われていたことは確かである。

（井戸跡）

３次調査畑土中から検出された井戸跡は、畑耕作以前のものであることが土層堆積状況の観察から明らかとなった。１次調査検出の畑跡には多量の土器が含まれていたことが報告されており、３次調

査畑跡でも同様であった。畑耕作以前に集落が存在した可能性を１次調査報告書で指摘したが、井戸跡はその集落に伴うものと思われる。

なお、平成19年12月～平成20年１月に実施された上窪遺跡試掘調査では10世紀前半の畑跡中から住居跡が検出されており、畑耕作以前に集落が存在していたことが確実となっている。

［引用・参考文献］

山梨県教育委員会　『地耕面遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第73集　1992
山梨県教育委員会　『塩部遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第123集　1996
山梨県教育委員会　『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集　1997
山梨県教育委員会　『二本柳遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第183集　2000
山梨県教育委員会　『平田宮第２遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第244集　2007
山梨県教育委員会　『小井川遺跡Ⅲ』　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第255集　2008
玉穂町教育委員会　『上窪遺跡（２次）』　玉穂町埋蔵文化財調査報告書第２集　2005
玉穂町教育委員会　『平田宮第２遺跡』　玉穂町埋蔵文化財調査報告書第３集　2006
黒崎直　「斎串考」　『日本考古学論集』３　1986
網倉邦生　「斎串状木製品の検討」『山梨県考古学協会誌』第17号　2007
「萬葉集」３　『新日本古典文学大系』３　2002
「萬葉集」４　『新日本古典文学大系』４　2003

写真図版

第２面調査区遠景（東から撮影）

１号不明遺構

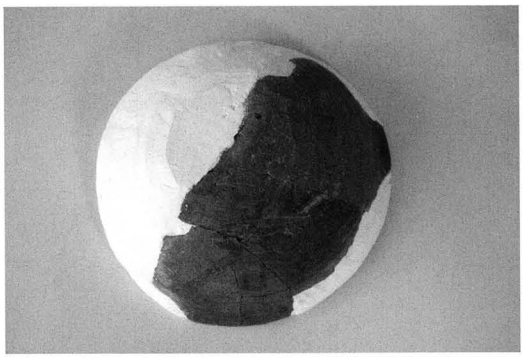
カマド構築材13、14、15

２号不明遺構

１号土坑

畑跡空撮

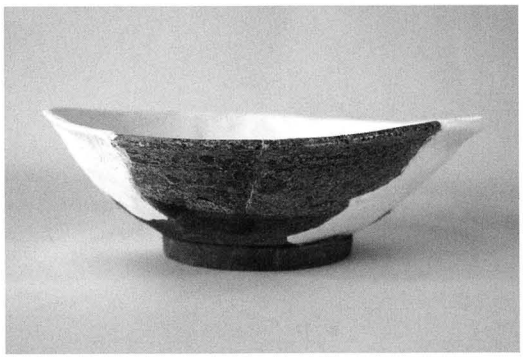
境界杭列及び畝



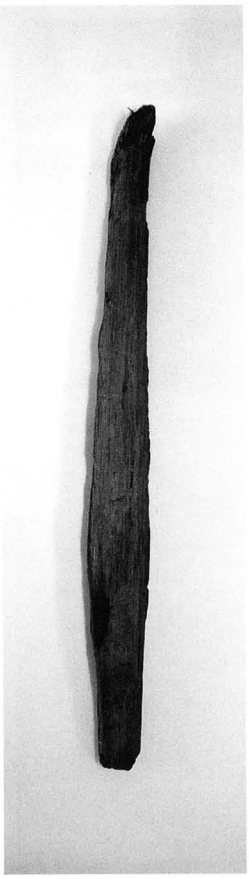
No. 2

No. 3

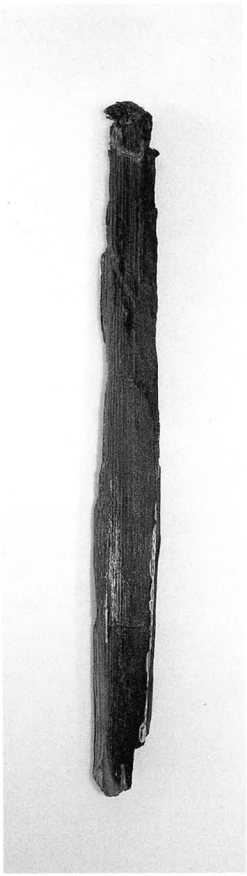
No. 8



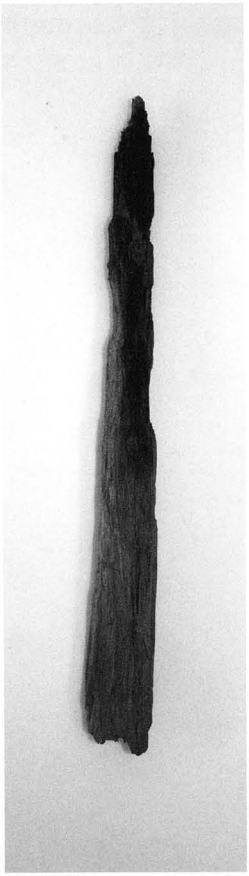
No. 9



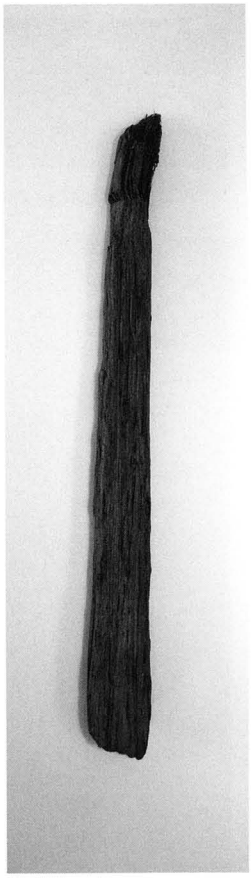
カマド構築材No.13



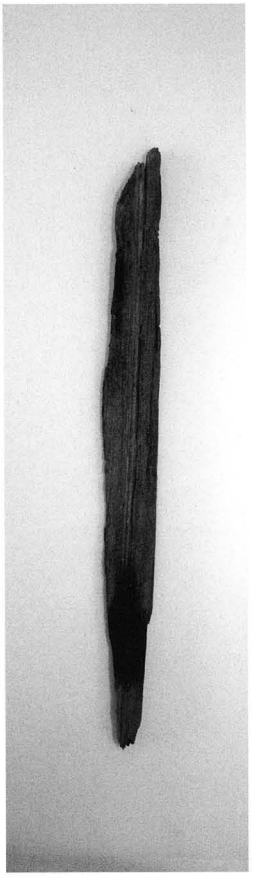
カマド構築材No.14



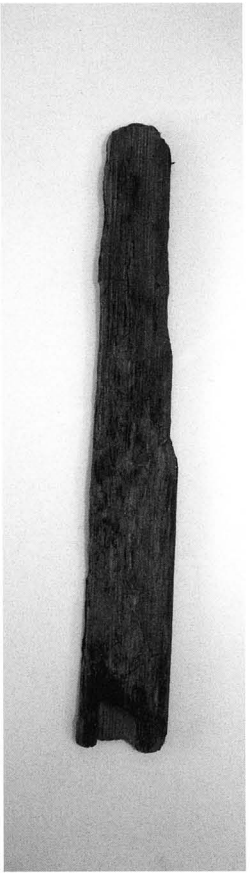
カマド構築材No.15



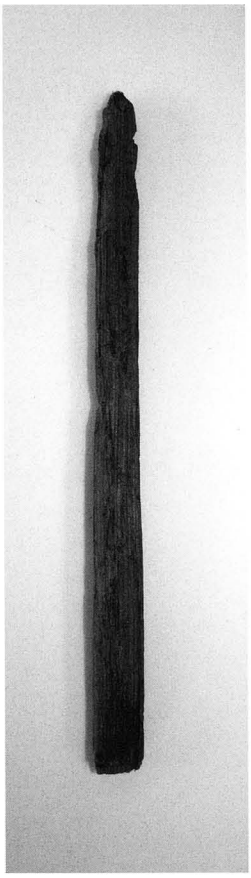
カマド構築材No.16



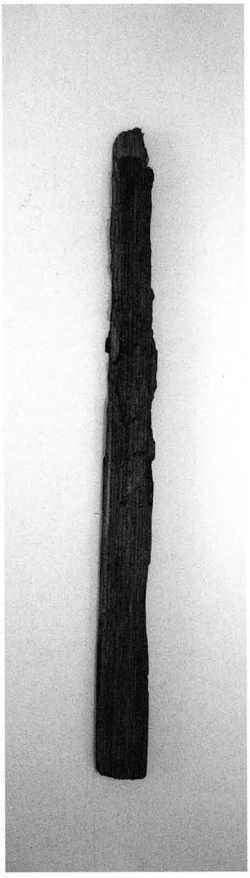
カマド構築材No.17



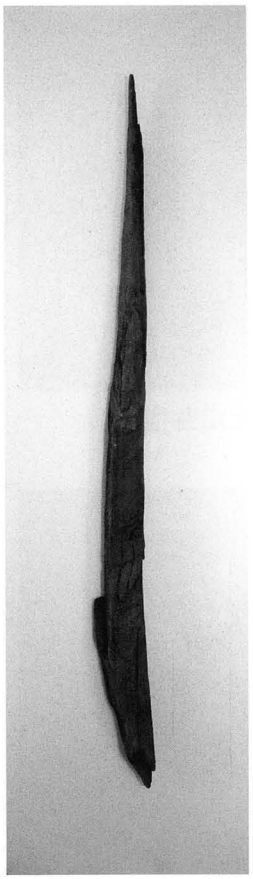
カマド構築材No.18



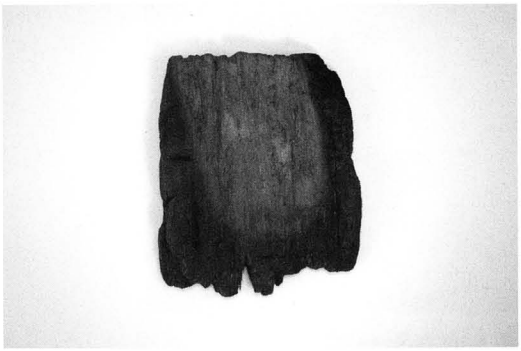
カマド構築材No.19



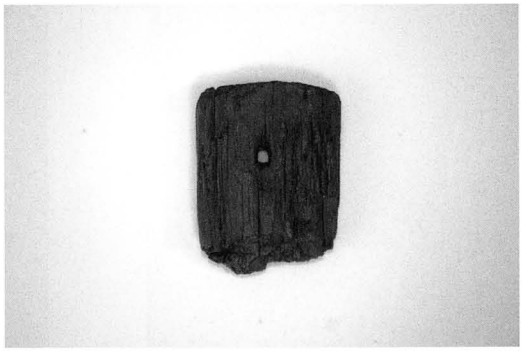
カマド構築材No.20



斎串状木製品

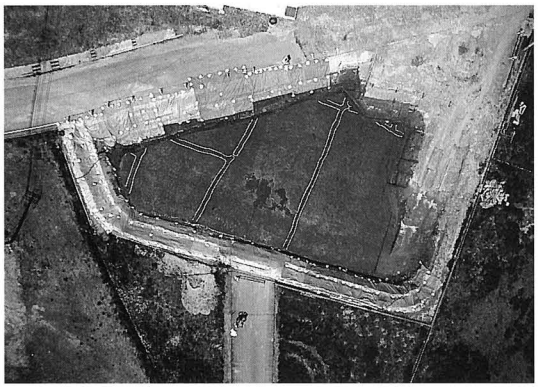


不明木製品No.23

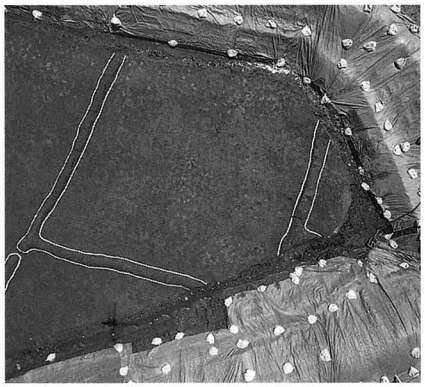


不明木製品No.22

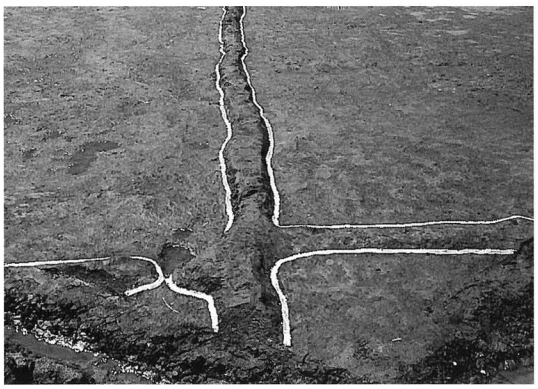
第１面調査区遠景（東から撮影）



第１面水田跡空撮



第１面水田跡空撮

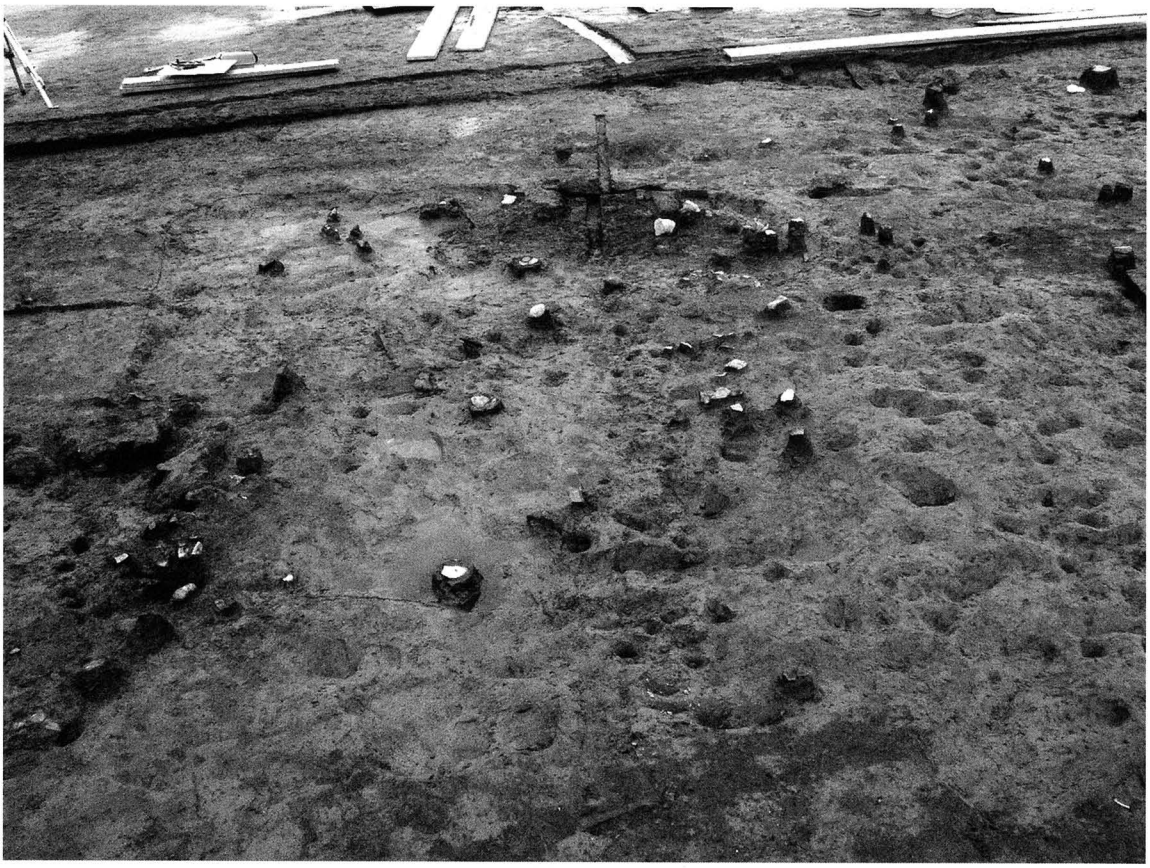


水口

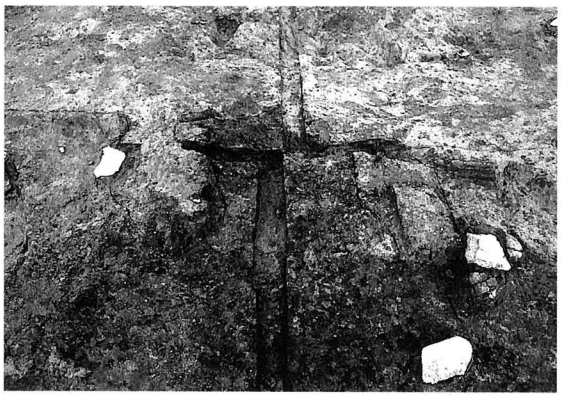
作業風景

第 3 面調査区遠景

第 3 面調査区遠景（西から撮影）



1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡カマド

1号住居跡カマドソデ

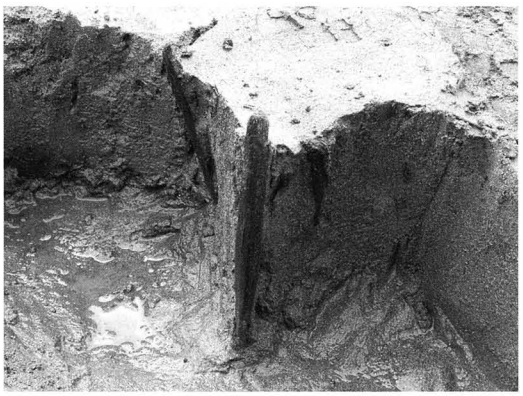
1号住居跡カマド

1号住居跡カマド構築材出土状況（1）

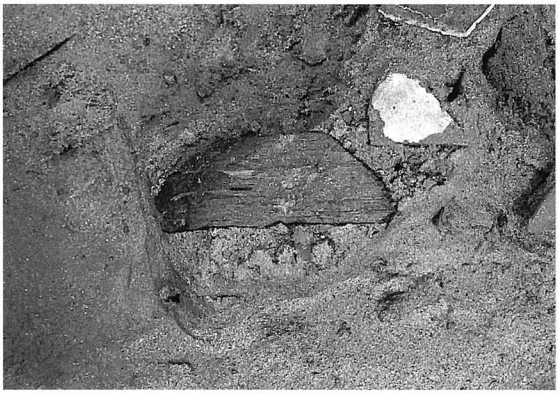
１号住居跡カマド構築材断ち割り状況（１）

１号住居跡カマド構築材断ち割り状況（２）

１号住居跡杭状木製品（１）



１号住居跡杭状木製品（２）



１号住居跡木製品（No.19）

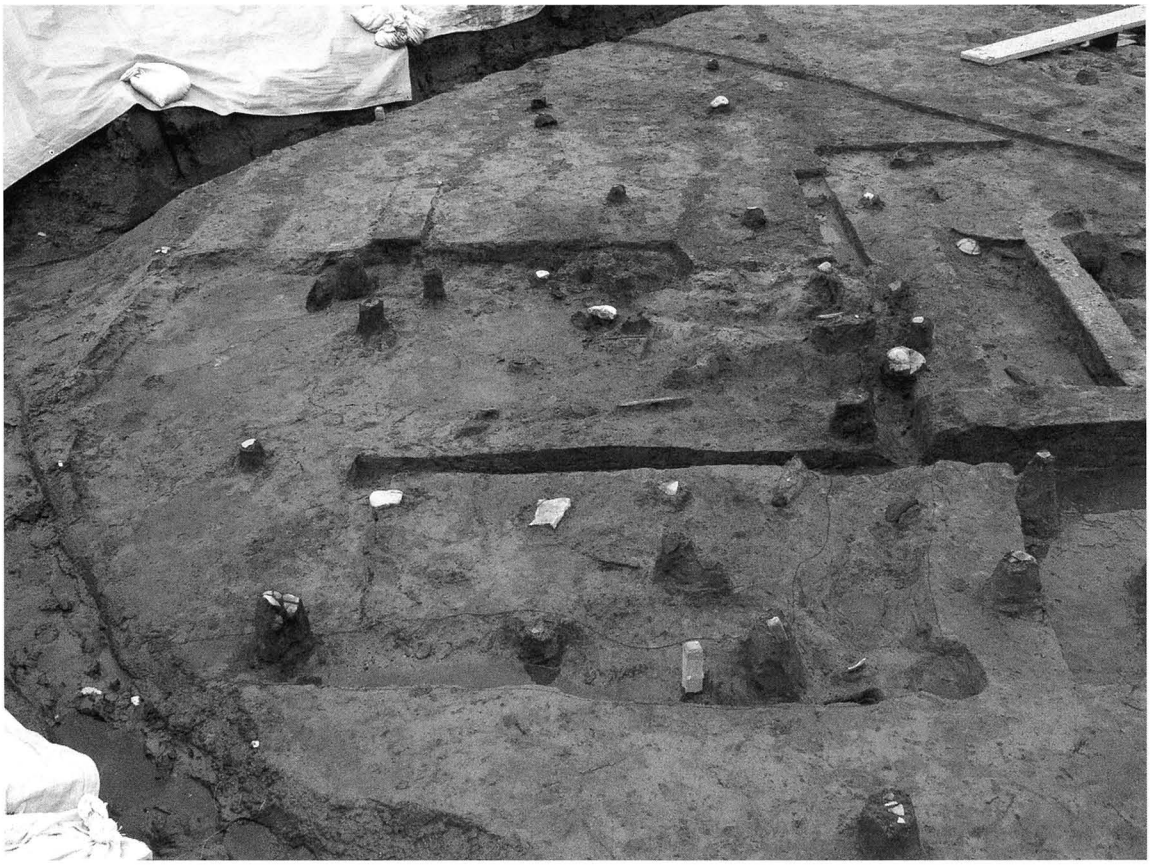
１号住居跡木製品（No.20）

１号住居跡木製品（No.21）

１号住居跡遺物出土状況（No.５）

2 号住居跡遺物出土状況

2 号住居跡カマド



3号住居跡遺物出土状況

3号住居跡カマド遺物出土状況

3号住居跡遺物出土状況

3号住居跡斎串状木製品（No.13）

3号住居跡木製品（No.14）

3号住居跡完掘

3号住居跡カマド

3号住居跡カマド構築材（1）

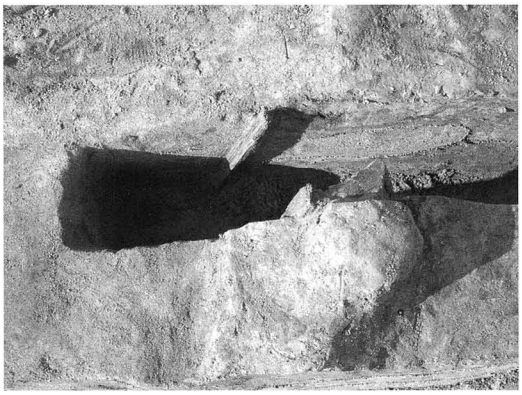
3号住居跡カマド構築材（2）

3号住居跡カマド左ソデ

3号住居跡カマド

3号住居跡カマド断ち割り

3号住居跡カマド構築材出土状況

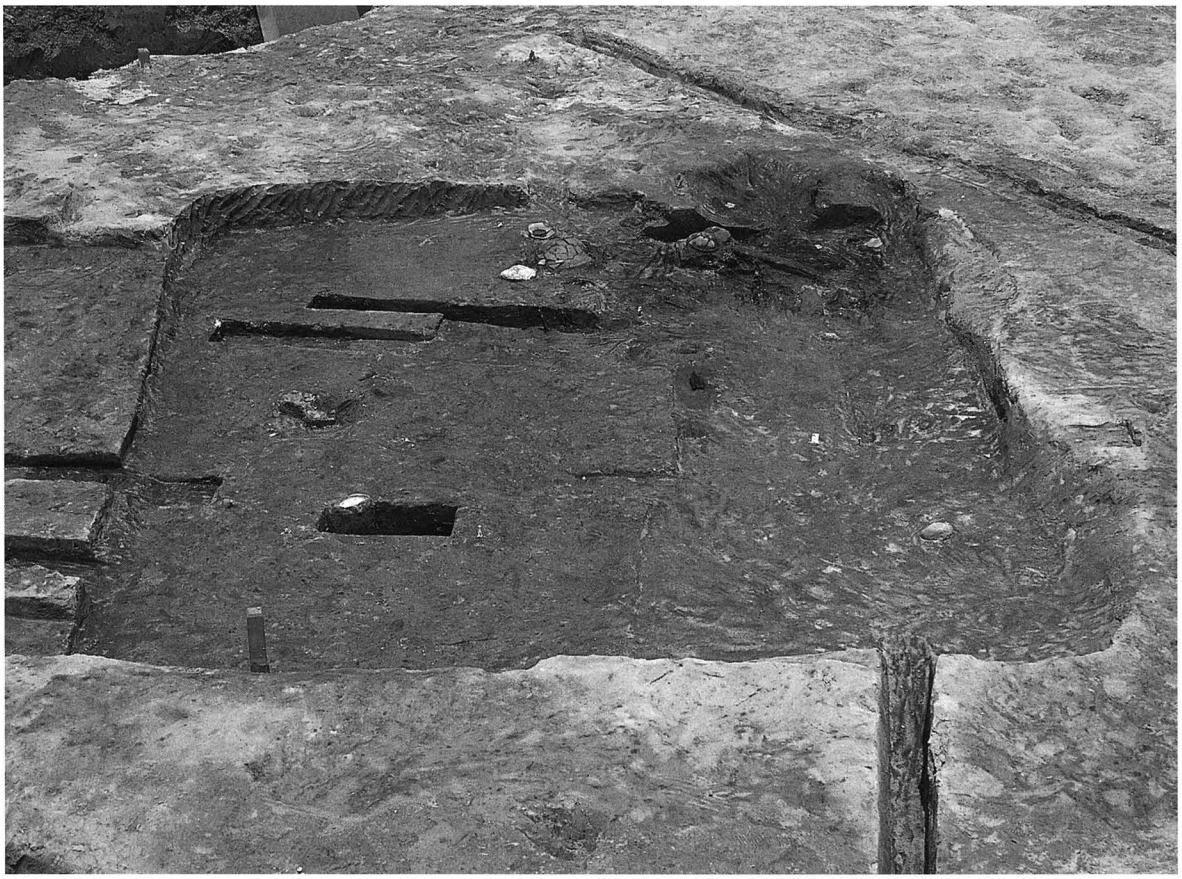


3号住居跡カマド構築材左ソデ（1）

3号住居跡カマド構築材右ソデ（1）

3号住居跡カマド構築材左ソデ（2）

3号住居跡カマド構築材右ソデ（2）

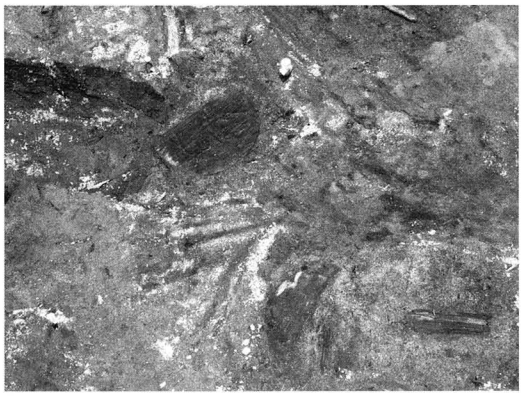


4号住居跡遺物出土状況

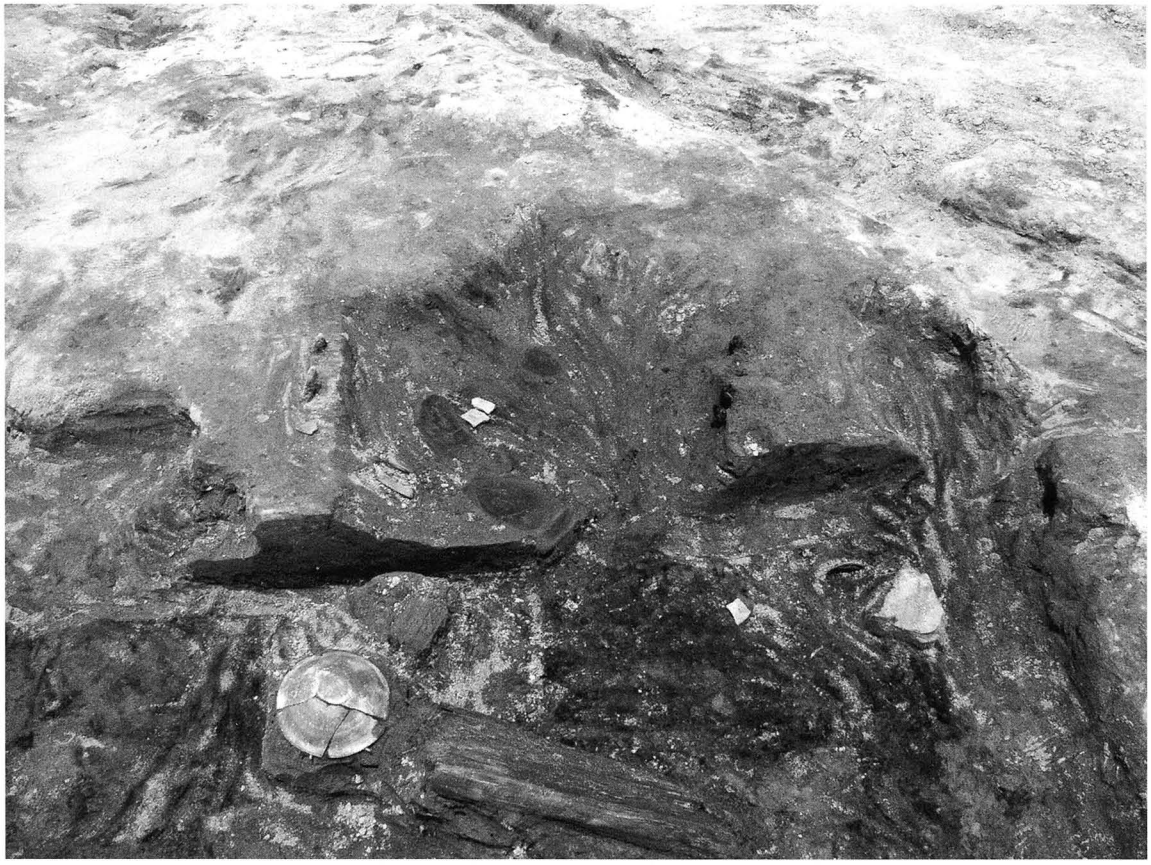
4号住居跡カマド周辺

4号住居跡カマド周辺遺物出土状況（1）

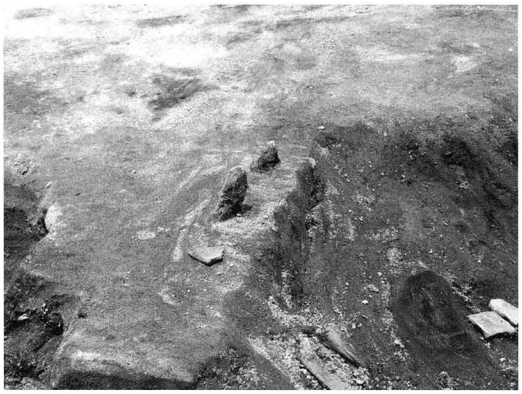
4号住居跡カマド周辺遺物出土状況（2）



4号住居跡カマド周辺遺物出土状況（3）



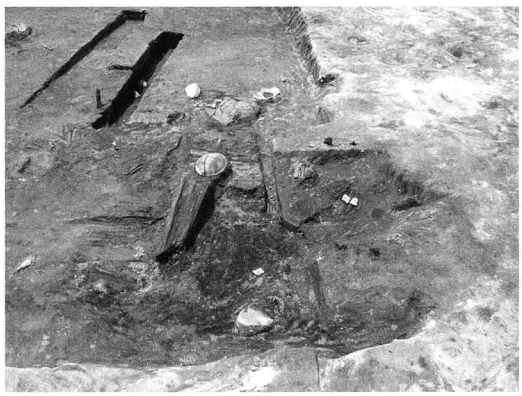
4号住居跡カマド遺物出土状況



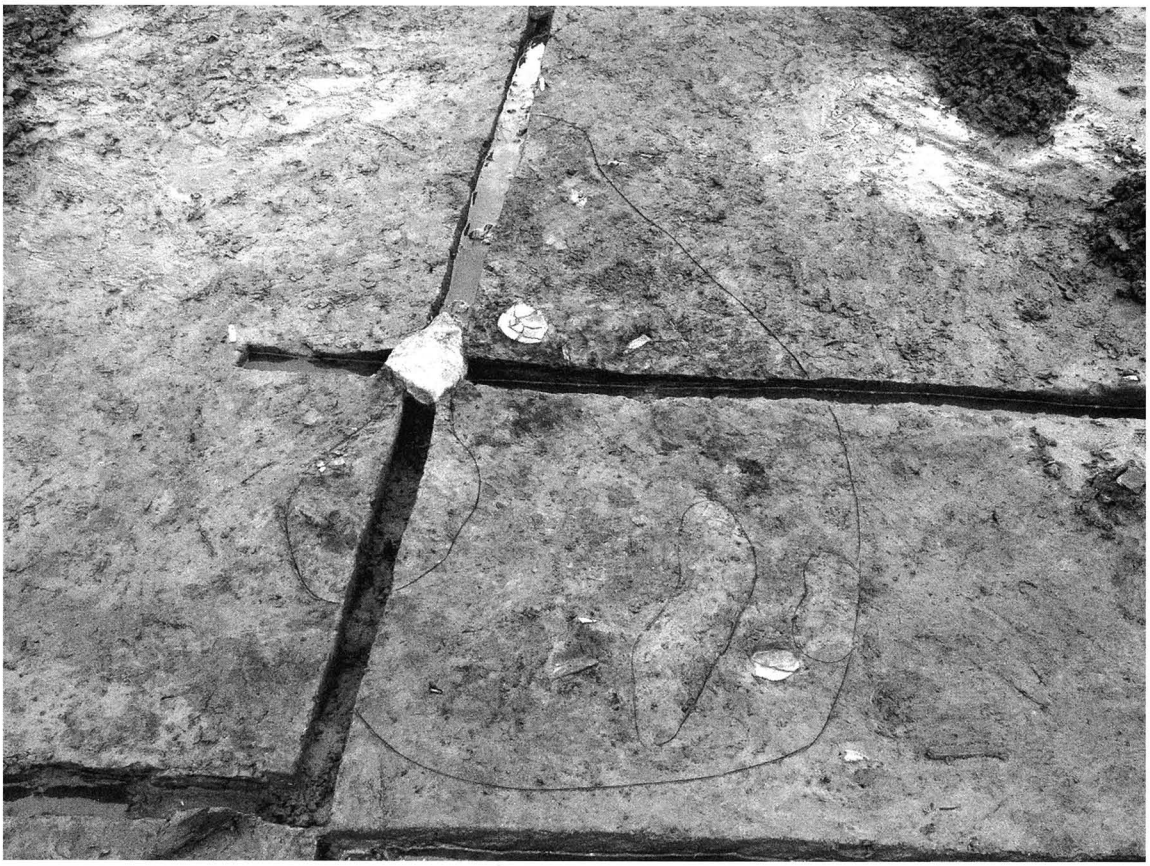
4号住居跡カマド構築材左ソデ出土状況

4号住居跡カマド構築材右ソデ出土状況

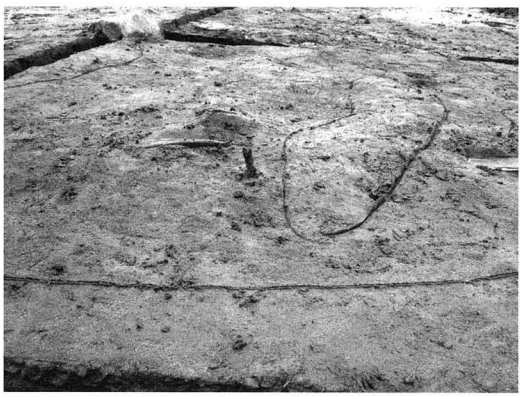
4号住居跡遺物出土状況（1）



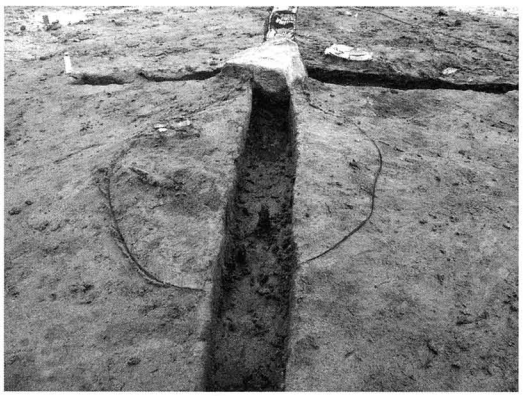
4号住居跡遺物出土状況（2）



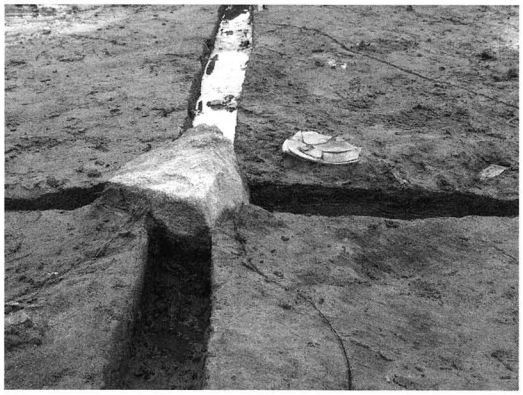
5号住居跡遺構検出状況（1）



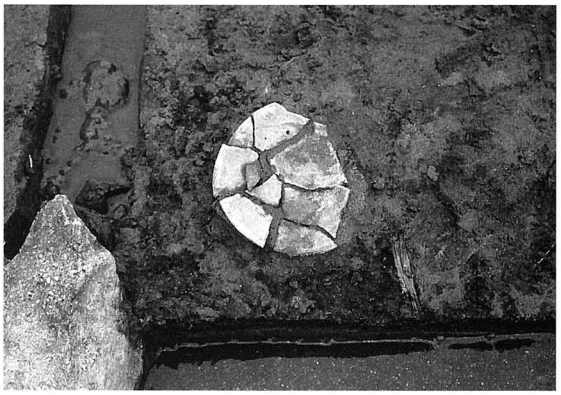
5号住居跡遺構検出状況（2）



5号住居跡カマド構築材検出状況

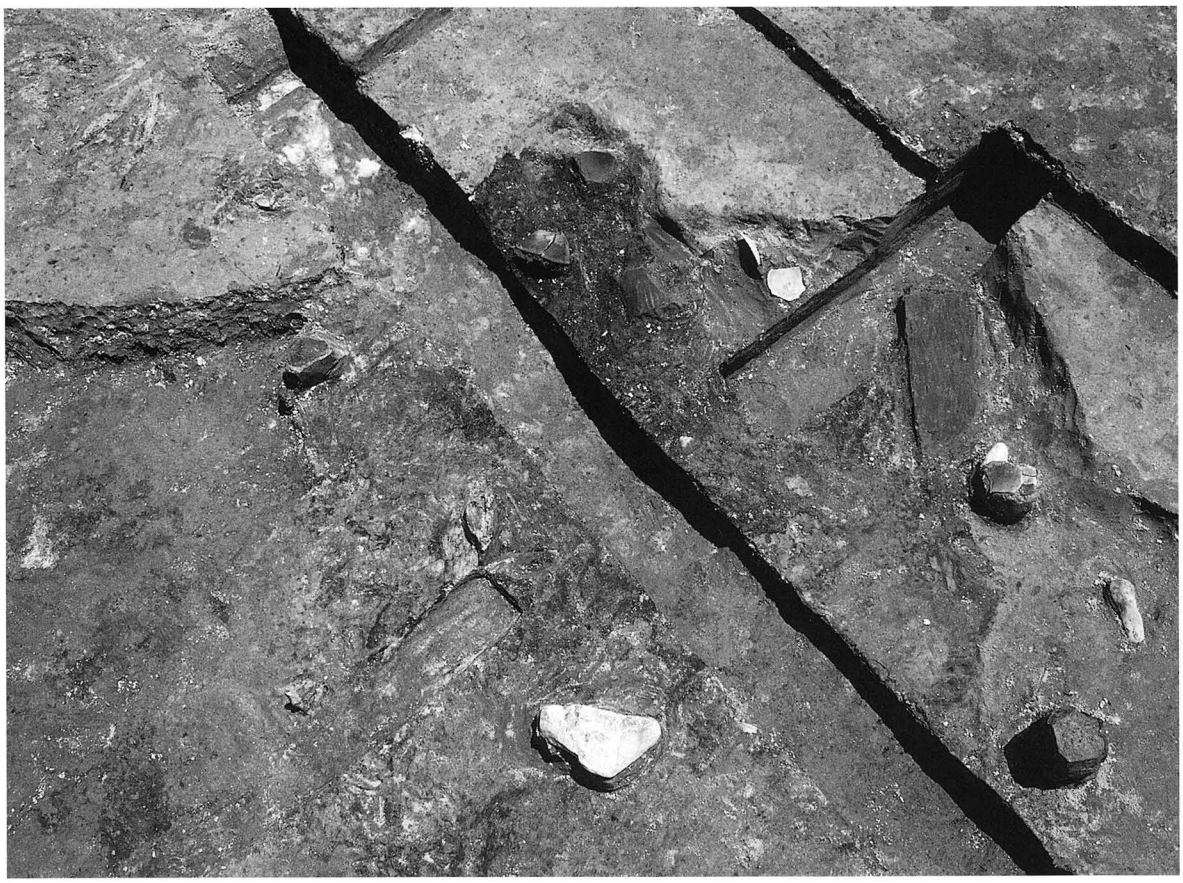


5号住居跡



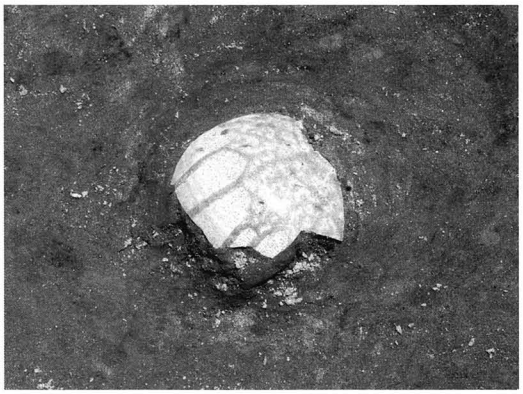
5号住居跡遺物出土状況（No.1）

6 号住居跡遺物出土状況



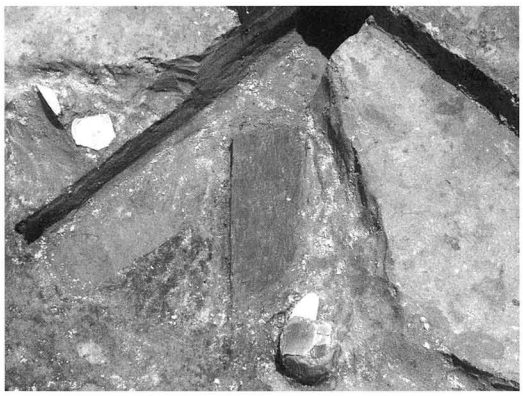
6 号住居跡カマド

6 号住居跡遺物出土状況



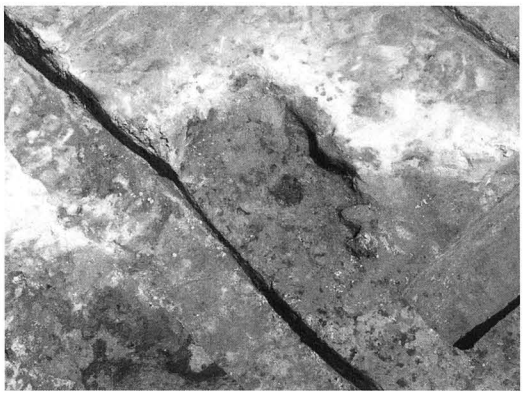
6 号住居跡遺物出土状況（No. 9 ）

6 号住居跡杭状木製品出土状況

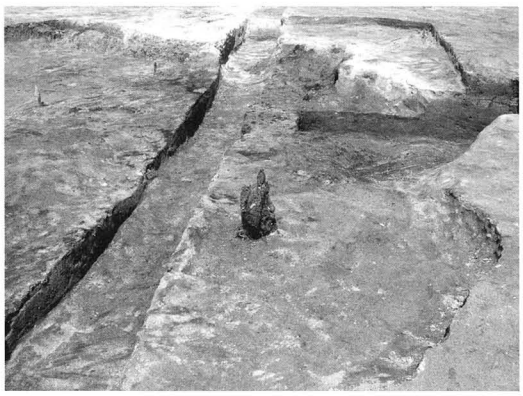


6 号住居跡木製品出土状況（No.13）

6 号住居跡完掘

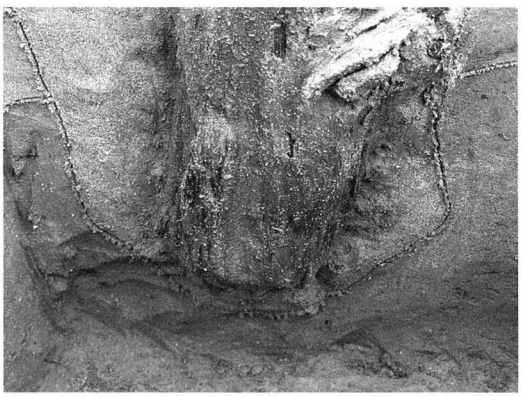


6号住居跡カマド



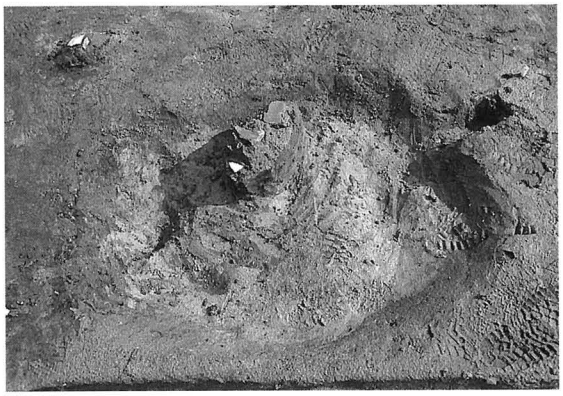
6号住居跡柱材出土状況

6号住居跡柱材断ち割り（1）

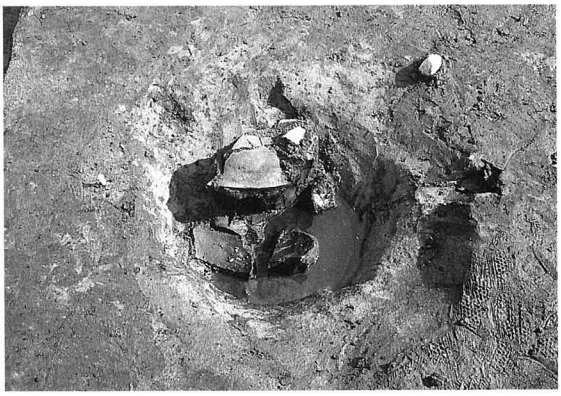


6号住居跡柱材断ち割り（2）

6号住居跡柱材断ち割り（3）



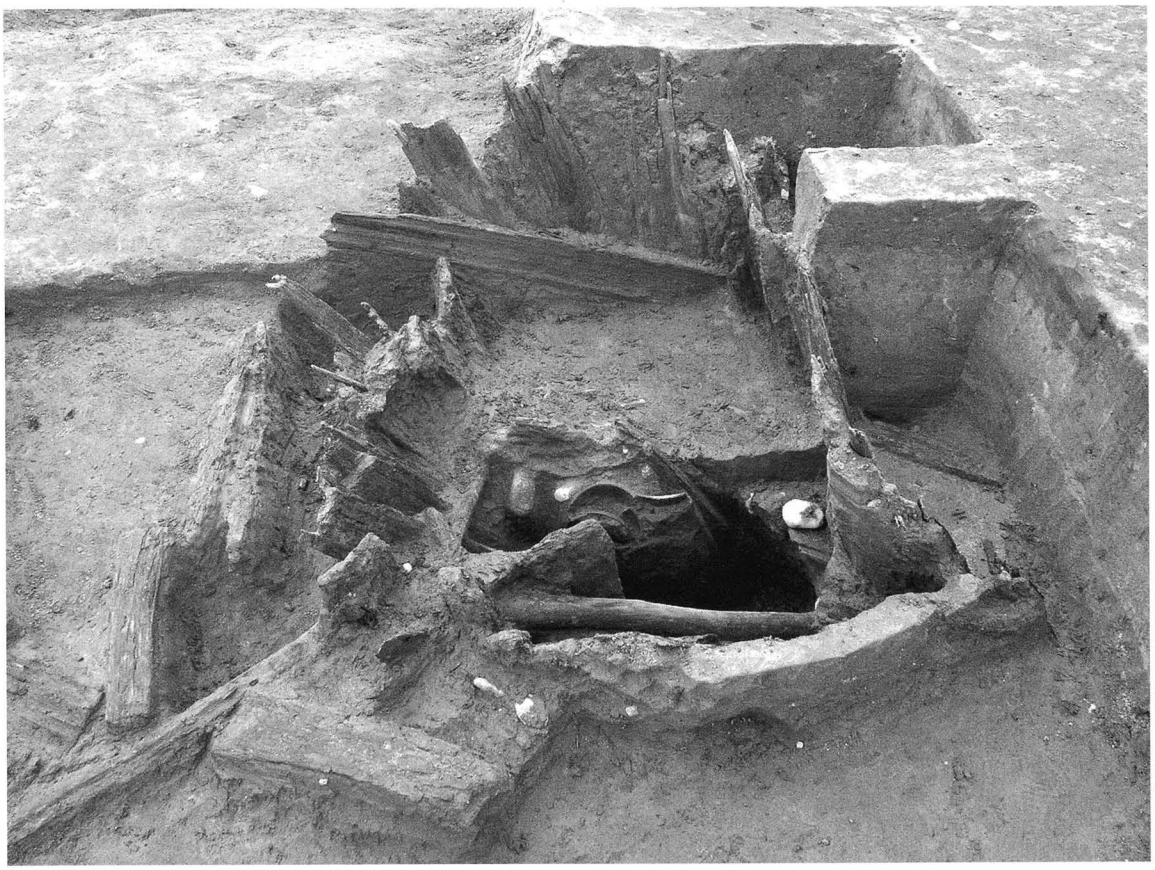
1号土坑完掘



2号土坑遺物出土状況

井戸跡（1）

井戸跡（2）



井戸跡（3）

井戸跡（4）

井戸跡（5）

井戸跡（6）

井戸跡（7）

井戸跡（8）

井戸跡（９）

井戸跡（10）

井戸跡（11）

井戸跡（12）

井戸跡（13）

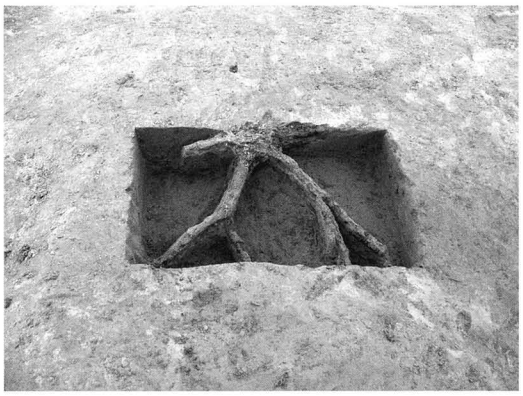
井戸跡（14）

井戸跡（15）

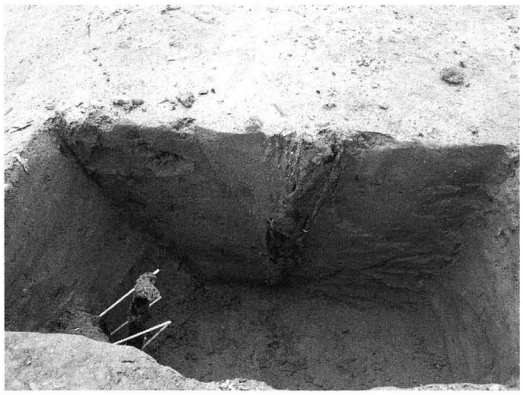
井戸跡（16）

第３面　水田跡、畑跡境

畑跡畝



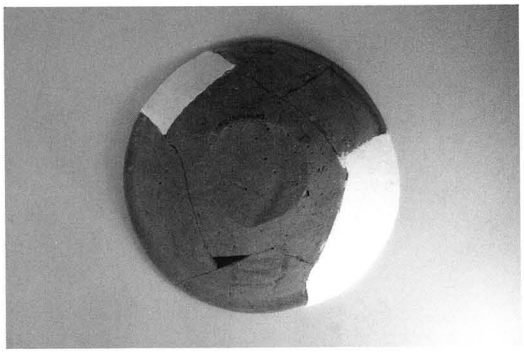
畑・畝境界自然木（No.12）



畑・水田境界杭断ち割り（１）

畑・水田境界杭断ち割り（２）

1号住居跡No.1

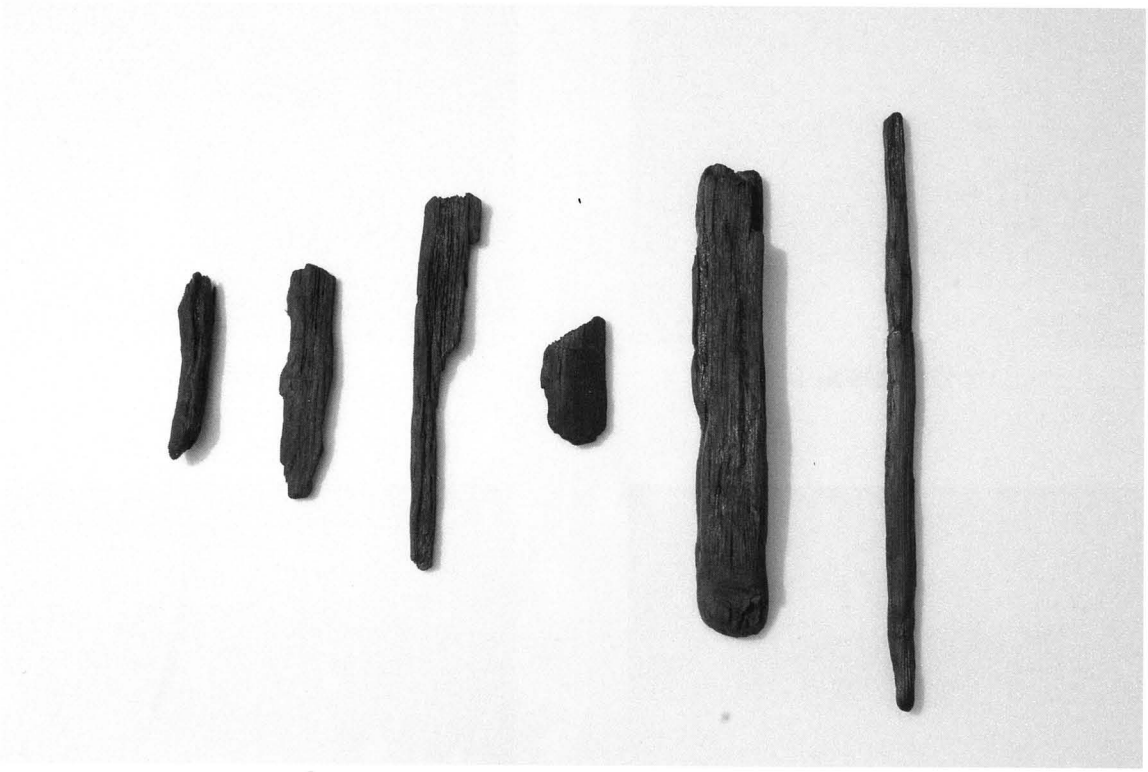


1号住居跡No.2

1号住居跡No.4

1号住居跡No.5

1号住居跡出土木製品

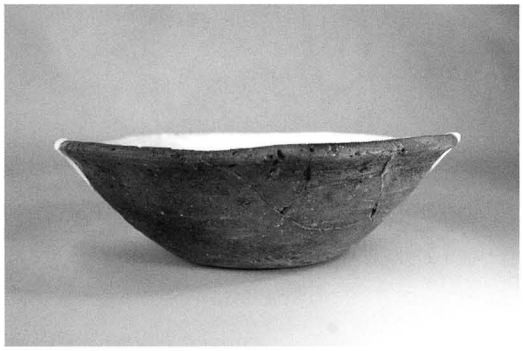


2号住居跡出土木製品

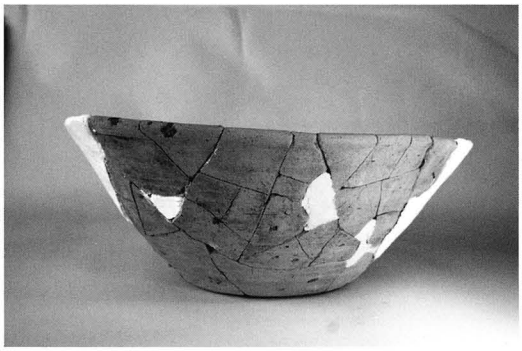
3号住居跡木製品

4号住居跡No.1

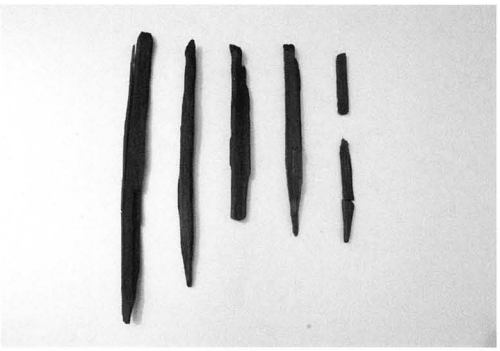
4号住居跡No.2



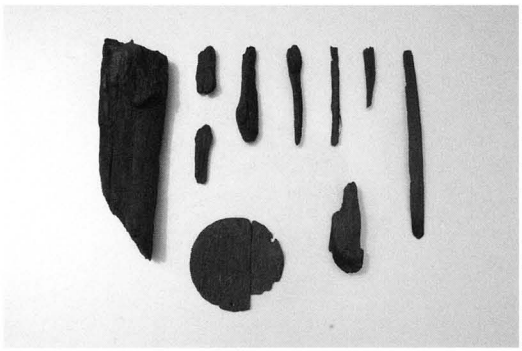
4号住居跡No.4



4号住居跡No.5



4号住居跡カマド構築材

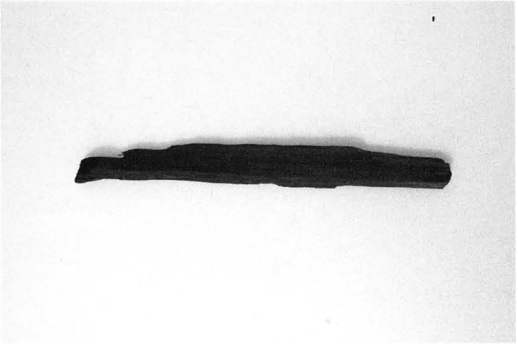


4号住居跡出土木製品

4号住居跡カマド構築材No.7

4号住居跡カマド構築材No.7先端

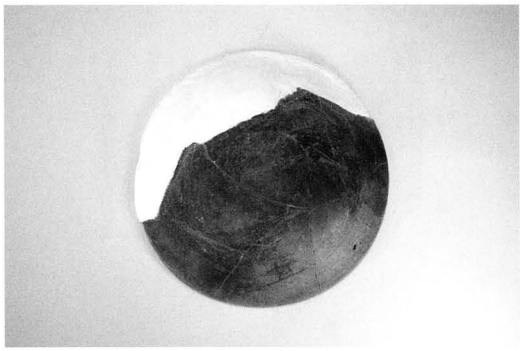
4号住居跡カマド構築材No.8



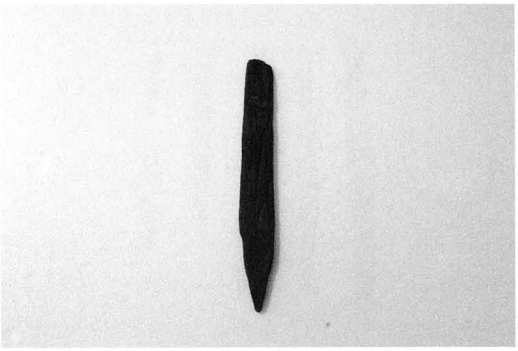
4号住居跡カマド構築材No.9

4号住居跡出土木製品No.11

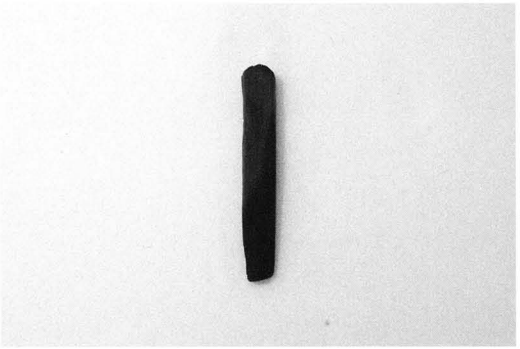
4号住居跡出土木製品No.21



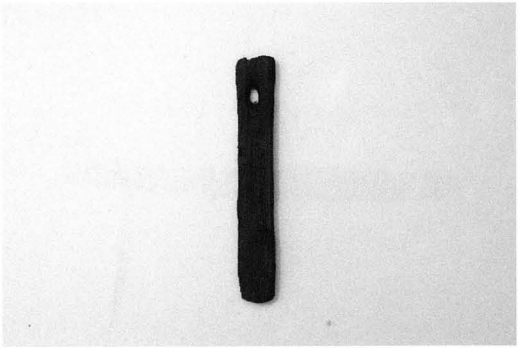
5号住居跡No.1



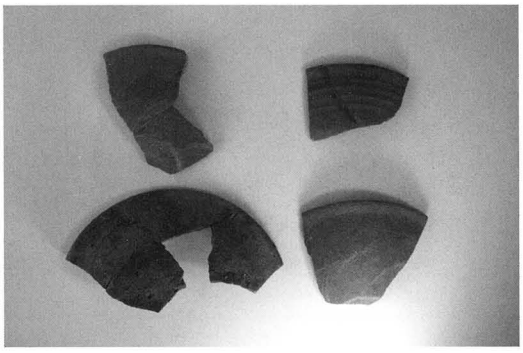
5号住居跡カマド構築材No.3



5号住居跡斎串状木製品No.4

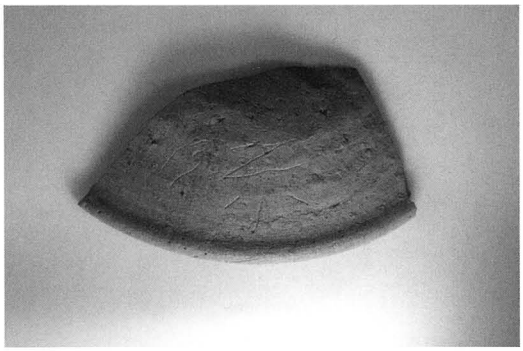


5号住居跡出土木製品No.5

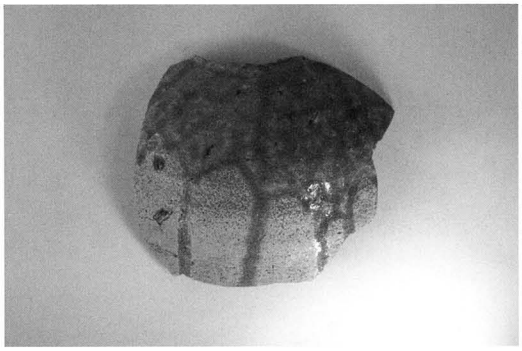


6 号住居跡出土遺物No. 1 ～ 4

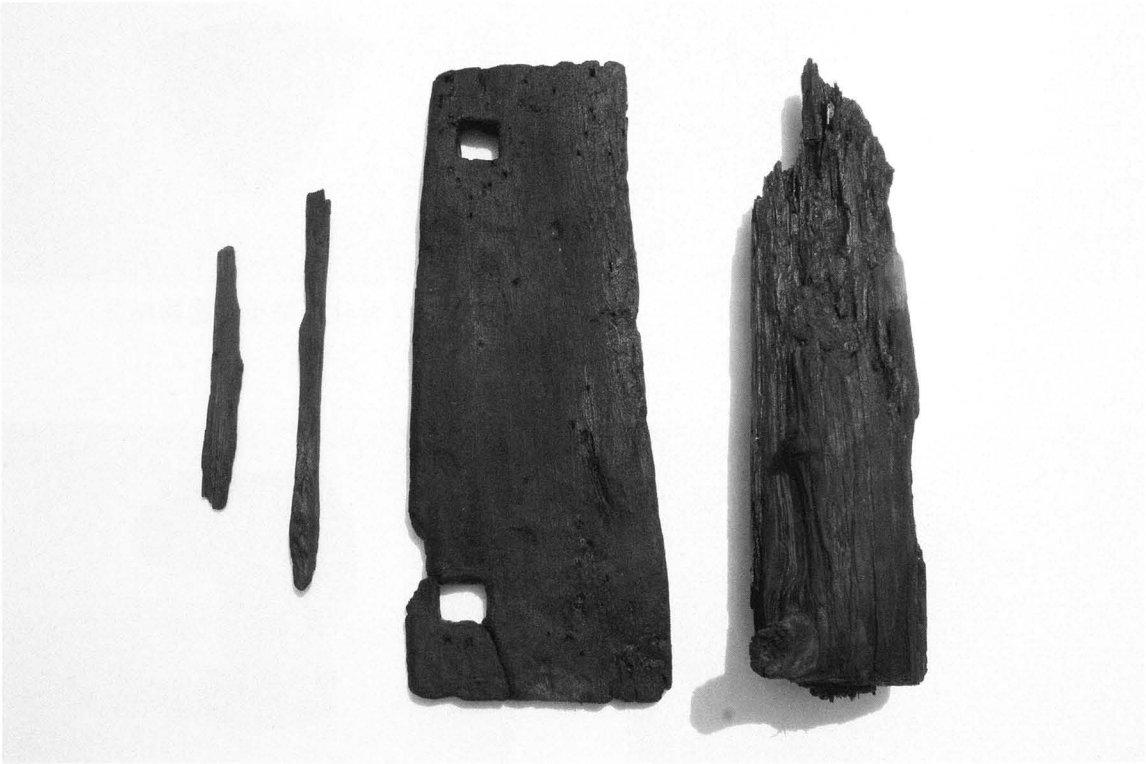
6 号住居跡出土遺物No. 5



6 号住居跡出土遺物No. 6



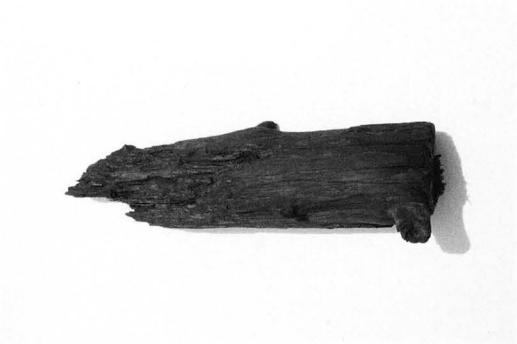
6 号住居跡出土遺物No. 9



6 号住居跡出土木製品

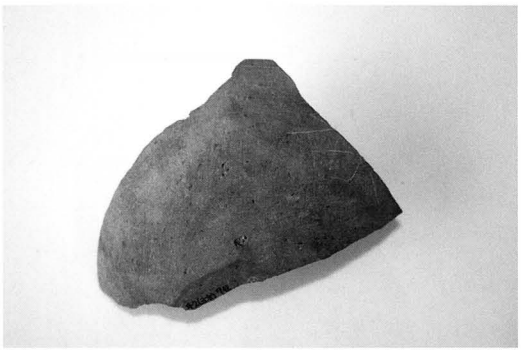
6 号住居跡出土木製品No.13（1）

6 号住居跡出土木製品No.13（2）

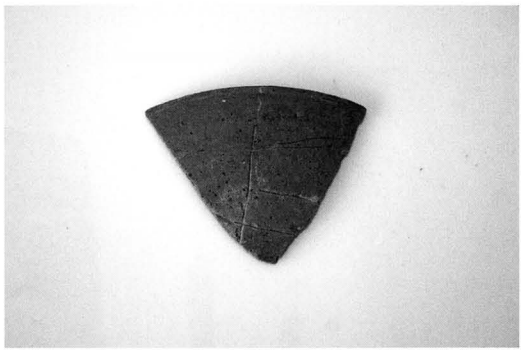


6 号住居跡出土木製品No.14（1）

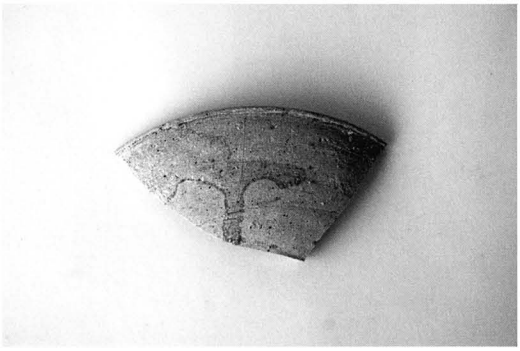
6 号住居跡出土木製品No.14（2）



7 号住居跡出土遺物No. 1

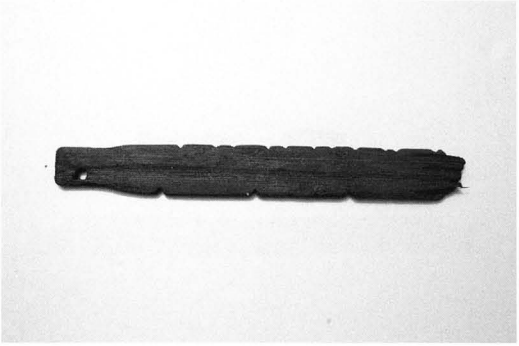


7 号住居跡出土遺物No. 2



7 号住居跡出土遺物No. 3

7 号住居跡出土遺物No. 5



井戸材No.14（1）

井戸材No.14（2）

井戸材No.15（1）

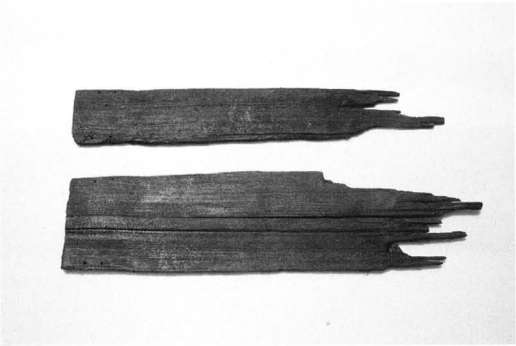
井戸材No.15（2）

井戸材No.16（1）

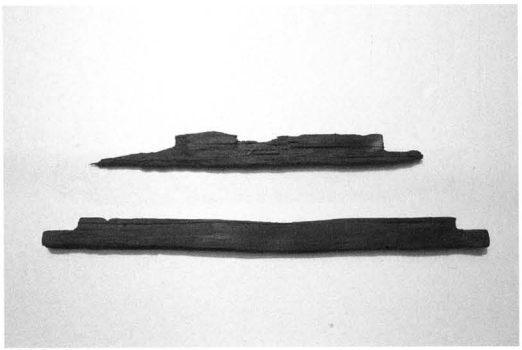
井戸材No.16（2）

井戸材No.16（3）

井戸材No.16（4）



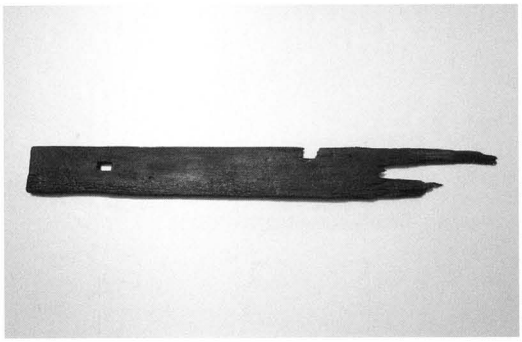
井戸材No.19（上）、21（下）



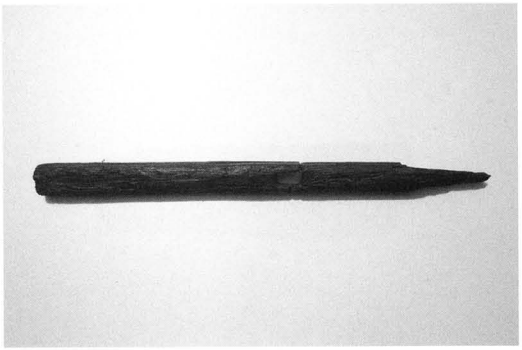
井戸材No.30（上）、31（下）

井戸材No.31（1）

井戸材No.31（2）

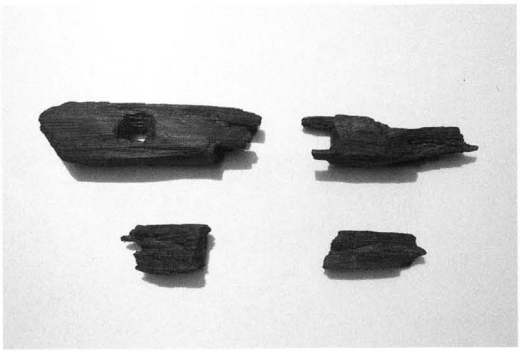


井戸材No.28



井戸材No.34

井戸材No.35



井戸材No.36

報告書抄録

フリガナ	ヒラタミヤダイ２イセキ（２・３ジ）
書名	平田宮第２遺跡（２・３次）
副書名	新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	中央市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１集
編著者名	今村直樹
発行者	中央市教育委員会、山梨県新環状・西関東道路建設事務所
編集機関	中央市教育委員会
所在地	山梨県中央市臼井阿原301－１
発行日	2008年３月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
平田宮第２遺跡（２次）	山梨県中央市下河東	19214	43	35°36′10″	138°32′29″	2005年２月21日～2005年３月29日	900㎡	新山梨環状道路建設
平田宮第２遺跡（３次）	山梨県中央市下河東			35°36′09″	138°32′32″	2006年３月１日～2006年７月３日	1,200㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平田宮第２遺跡（２次）	田畑、集落	平安～鎌倉	住居跡、畑跡	土師器、灰釉陶器、木製品	
平田宮第２遺跡（３次）	田畑、集落	平安～鎌倉	水田跡、住居跡、畑跡	土師器、須恵器、灰釉陶器、木製品	住居内出土木製品

中央市埋蔵文化財調査報告書　第１集

山梨県中央市

平田宮第２遺跡（２・３次調査）

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行日　2008年３月31日

編集　中央市教育委員会

発行　中央市教育委員会

山梨県新環状・西関東道路建設事務所

〒409-3892　山梨県中央市臼井阿原301-1

ＴＥＬ055-274-8522

ＦＡＸ055-274-7132

印刷所　株式会社サンニチ印刷